

福井県埋蔵文化財調査報告 第175集

# 高柳遺跡 2

— 北陸新幹線建設に伴う調査4 —

2021

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第175集

# 高柳遺跡 2

— 北陸新幹線建設に伴う調査4 —

2021

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



## 序 文

このたび、北陸新幹線建設事業に伴い、福井市高柳1丁目において平成26年度に発掘調査を実施した高柳遺跡第2地区の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

高柳遺跡は、九頭竜川左岸の沖積地に位置する集落遺跡です。周辺では土地区画整備事業に伴い、福井市教育委員会によって発掘調査が行われてきました。今回の調査では、周溝墓、掘立柱建物、溝、土坑を検出したほか、自然流路からは比較的多量に出土した土器や石器・木製品を得ることができました。特に本県初となる人面墨書土器は非常に珍しいもので古代史を語る上で欠くことのできないものです。これまでの発掘調査や第3地区の成果も踏まえると、当地区周辺には古代をはじめ弥生時代以降、古代までの集落が展開していたと考えられます。

本書が今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの方がたに活用される一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様がたから多大なご支援とご協力を賜りましたことに、厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
所長 赤澤 徳明

## 例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが北陸新幹線建設事業に伴い、平成26年度に実施した高柳遺跡の発掘調査のうち、第2地区(福井市高柳1丁目所在)の発掘調査報告書である。
- 2 高柳遺跡は独立行政法人 鉄道建設・運輸施設整備支援機構の委託を受けて福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、宮崎 認、宮沢多紀が担当した。
- 3 発掘調査の支援業務は、株式会社イピソクに委託した。
- 4 発掘調査は、平成26年4月1日～11月30日まで実施した。出土遺物の整理作業は平成27年4月1日～令和3年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 5 本書の編集は、青木隆佳があたり、赤澤徳明・山本孝一が分担して執筆した。附章については委託した一般社団法人 文化財科学研究センターから提出された成果を青木が編集して掲載した。なお、執筆の分担は以下の通りである。

青木 第1章～第3章・第4章第2節

赤澤 第4章第1・3節・第5章

山本 第4章第1節 縄文土器

文化財科学研究センター 附章

- 6 高柳遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書を持って訂正したものと了解されたい。
- 7 本書に掲載した遺構図ならびに空中写真は、株式会社イピソクに委託して作成したものであり、一部改変して使用した。
- 8 出土した木製品の保存処理と樹種同定・塗膜分析を一般社団法人 文化財科学研究センターに委託した。
- 9 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 10 本書における水平レベルの表示は、海拔高(m)を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第VI系(世界測地系)に基づく。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 12 土層および土器の色調は、『新版標準土色帳』『農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修』に基づいている。
- 13 発掘調査に際しては、次の機関のご協力を得た。  
福井県地域戦略部新幹線建設推進課 福井県福井土木事務所
- 14 本書の作成にあたっては、次の方々からご助言・ご指導を頂いた。(五十音順・敬称略)  
伊藤武士、神野 恵、川畑 誠、国下多美樹、杉山大晋、出越茂和、戸谷邦隆、深澤芳樹、松葉竜司、望月精司
- 15 発掘調査には、地元の方々のご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および整理作業員があつた。

# 目 次

第1章 調査の経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	1
第2章 調査の概要 .....	2
第1節 基本層序 .....	2
第2節 遺構の分布 .....	2
第3節 出土遺物の状況 .....	2
第3章 遺構 .....	7
第1節 周溝墓 .....	7
第2節 掘立柱建物 .....	8
第3節 土坑 .....	10
第4節 溝 .....	12
第5節 自然流路 .....	17
第6節 ビット .....	17
第4章 遺物 .....	18
第1節 土器・土製品 .....	18
第2節 石器・石製品 .....	57
第3節 木製品 .....	58
第5章 まとめ .....	64
第1節 弥生時代後期から古墳時代前期について .....	64
第2節 古代の土器と本遺跡の位置付け .....	66
附 章 自然科学分析 .....	76

## 写真図版目次

- 図版第1 遺跡 (1) 2-3区遠景 (2) 2-1区遠景 (3) 2-4区遠景 (4) 2-2区遠景  
(5) 2-4区全景
- 図版第2 遺構 (1) ST02全景 (2) ST02東溝木棺出土状況
- 図版第3 遺構 (1) ST04全景 (2) SB04・05全景
- 図版第4 遺構 (1) SB01・02全景 (2) SD53遺物出土状況
- 図版第5 遺構 (1) SD53全景 (2) SD54・55全景
- 図版第6 遺構 (1) SD56全景 (2) SR02完掘
- 図版第7 遺物
- 図版第8 遺物
- 図版第9 遺物
- 図版第10 遺物
- 図版第11 遺物
- 図版第12 遺物
- 図版第13 遺物
- 図版第14 遺物
- 図版第15 遺物
- 図版第16 遺物
- 図版第17 遺物
- 図版第18 遺物
- 図版第19 遺物
- 図版第20 遺物
- 図版第21 遺物
- 図版第22 遺物
- 図版第23 遺物
- 図版第24 遺物
- 図版第25 遺物
- 図版第26 遺物

## 挿 図 目 次

第1図	区割り図	1
第2図	全体図1	3・4
第3図	全体図2	5・6
第4図	周溝墓実測図1	7
第5図	周溝墓実測図2	8
第6図	周溝墓実測図3	9
第7図	周溝墓実測図4	10
第8図	掘立柱建物実測図1	11
第9図	掘立柱建物実測図2	12
第10図	土坑実測図	13
第11図	溝実測図1	15
第12図	溝実測図2	16
第13図	溝実測図3	17
第14図	掘立柱建物柱穴出土の土器・土製品実測図	18
第15図	土坑出土の土器・土製品実測図	19
第16図	溝出土の土器実測図	21
第17図	溝 (SD53) 出土の土器実測図1	23
第18図	溝 (SD53) 出土の土器実測図2	24
第19図	溝 (SD53) 出土の土器実測図3	26
第20図	溝 (SD53) 出土の土器実測図4	28
第21図	溝 (SD53) 出土の土器実測図5	29
第22図	溝 (SD53) 出土の土器実測図6	31
第23図	溝 (SD53) 出土の土器実測図7	33
第24図	溝 (SD53) 出土の土製品実測図	34
第25図	溝 (SD59・60・61) 出土の土器実測図	35
第26図	溝 (SD59・60・61) 出土の墨書土器実測図1	36
第27図	溝 (SD59・60・61) 出土の墨書土器実測図2	37
第28図	自然流路 (SR02) 出土の土器実測図1	39
第29図	自然流路 (SR02) 出土の土器実測図2	40
第30図	自然流路 (SR02) 出土の土器実測図3	41
第31図	自然流路 (SR02) 出土の墨書土器実測図1	42
第32図	自然流路 (SR02) 出土の墨書土器実測図2	43
第33図	自然流路 (SR02) 出土の人面墨書土器・土師器実測図	45
第34図	自然流路 (SR02) 出土の土師器・土製品実測図	46
第35図	自然流路 (SR02) 出土の製塩土器実測図	47
第36図	縄文土器実測図	56



第37図	石器・石製品実測図	57
第38図	木製品実測図 1	59
第39図	木製品実測図 2	60
第40図	木製品実測図 3	61
第41図	木製品実測図 4	62
第42図	特異な成形・調整の土器微細図	65
第43図	福井平野周辺で製塩土器が出土した内陸部の遺跡と周辺の製塩遺跡	67
第44図	和田防町遺跡・持明寺遺跡出土製塩土器実測図	68
第45図	御簾尾遺跡出土製塩土器実測図	69
第46図	米納津遺跡・(仮称)浜割遺跡出土製塩土器実測図	70
第47図	蛍光X線分析結果	82

## 表 目 次

第1表	土器・土製品観察表	49
第2表	製塩土器観察表	55
第3表	石器・石製品観察表	57
第4表	木製品観察表	63
第5表	福井平野周辺製塩土器出土遺跡製塩土器観察表	71
第6表	北陸で出土した人面墨書土器一覧	73
第7表	樹種同定結果	81



# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

高柳遺跡に関わる調査の経緯は『高柳遺跡1』で述べているので省略する。

## 第2節 調査の経過

### 1 2次調査

本調査区は緩やかな弧状を成し延長約400m、幅12mをはかる。

発掘調査は事務所等の用地や排土置き場などの関係から調査区を4分割し、調査順に2-1～4区とした。北から2-3・1・4・2区となり、前2区を北調査区、後2区を南調査区とした(第1図)。

グリッドは3調査地区を通して設定し、国土方眼座標系VI系を用いた。グリッドは10mメッシュとし北東を基準とし、グリッド名は東西をアルファベット、南北をアラビア数字で表示した。

表土はぎは2-1区を平成26年3月に行い、以後調査期間に空白が無いように進めた。

発掘調査は平成26年4月～11月の期間で実施し、各調査期間の調査期間・空中写真測量日は以下の通りである。

2-1区 調査期間 4月15日～5月14日

空中写真測量日 5月14日

2-2区 調査期間 5月20日～7月17日

空中写真測量日 7月17日

2-3区 調査期間 7月17日～9月17日

空中写真測量日 9月17日

2-4区 調査期間 9月17日～11月12日

空中写真測量日 11月12日

なお、調査期間に2-2区において7月18日に報道機関を対象に、翌19日に一般の方を対象にした現地説明会を実施し約50名の方が参加された。

### 2 遺物整理作業

発掘調査で出土した遺物の量は、コンテナ41箱である。これらの遺物の整理作業は平成27年4月から開始し、令和3年3月まで実施した。

各年度に実施した整理作業の内容は、以下の通りである。

平成27年度 洗浄・注記・接合

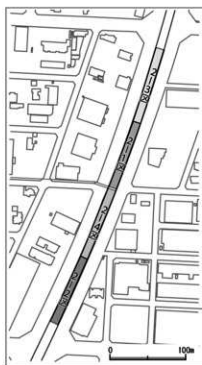
平成28年度 洗浄・注記・接合

平成29年度 復元

平成30年度 実測

平成31年度 実測・トレース・保存処理・自然科学分析

令和2年度 原稿執筆・写真撮影・報告書刊行



第1図 区割り図(縮尺1/5,000)

## 第2章 調査の概要

### 第1節 基本層序

高柳遺跡は福井平野を東西に流れる九頭竜川が形成した扇状地末端に位置する。標高は調査区北側が8.90m、同南側が8.60mである。僅かに北から南への傾斜はあるもののほぼ平坦である。調査区内の状況は、土地区画整理事業時に新幹線事業地とし盛土され平坦地となっていったが、同事業以前は一面水田であった。調査区内の堆積状況は、表土面から順に盛土、灰色系粘質土である旧水田耕作土、黄褐色粘質土となる。

旧水田耕作土直下である黄褐色粘質土上面が遺構確認面となり、本調査区内で遺物包含層はほとんど遺在していない。

### 第2節 遺構の分布(第2図・第3図)

調査区には大規模なカクランが数箇所ありあり、遺構の遺存状況はあまり良好ではない。検出した遺構は以下の通りである。

周溝墓 4基 掘立柱建物 5棟 土坑 11基 溝・自然流路 多数 柱穴 多数

時代別にみると弥生時代後期から古墳時代前期の遺構が、周溝墓、掘立柱建物、溝、土坑があり、土坑は59列に、周溝墓は80～85列間に纏まっている。

平安時代の遺構は掘立柱建物、溝を検出したが、まともではない。掘立柱建物は全体像のわかるものは1棟で残りのものは、東西どちらかの柱穴列を検出したのみである。

自然流路は、弥生時代後期末の遺構を切っており、埋土中からは9世紀頃の遺物が出土していることからこの時期にはまだ機能していたと推測する。

近世以降としては素掘りの溝が多数みられ、特に調査区南端部で集中している。

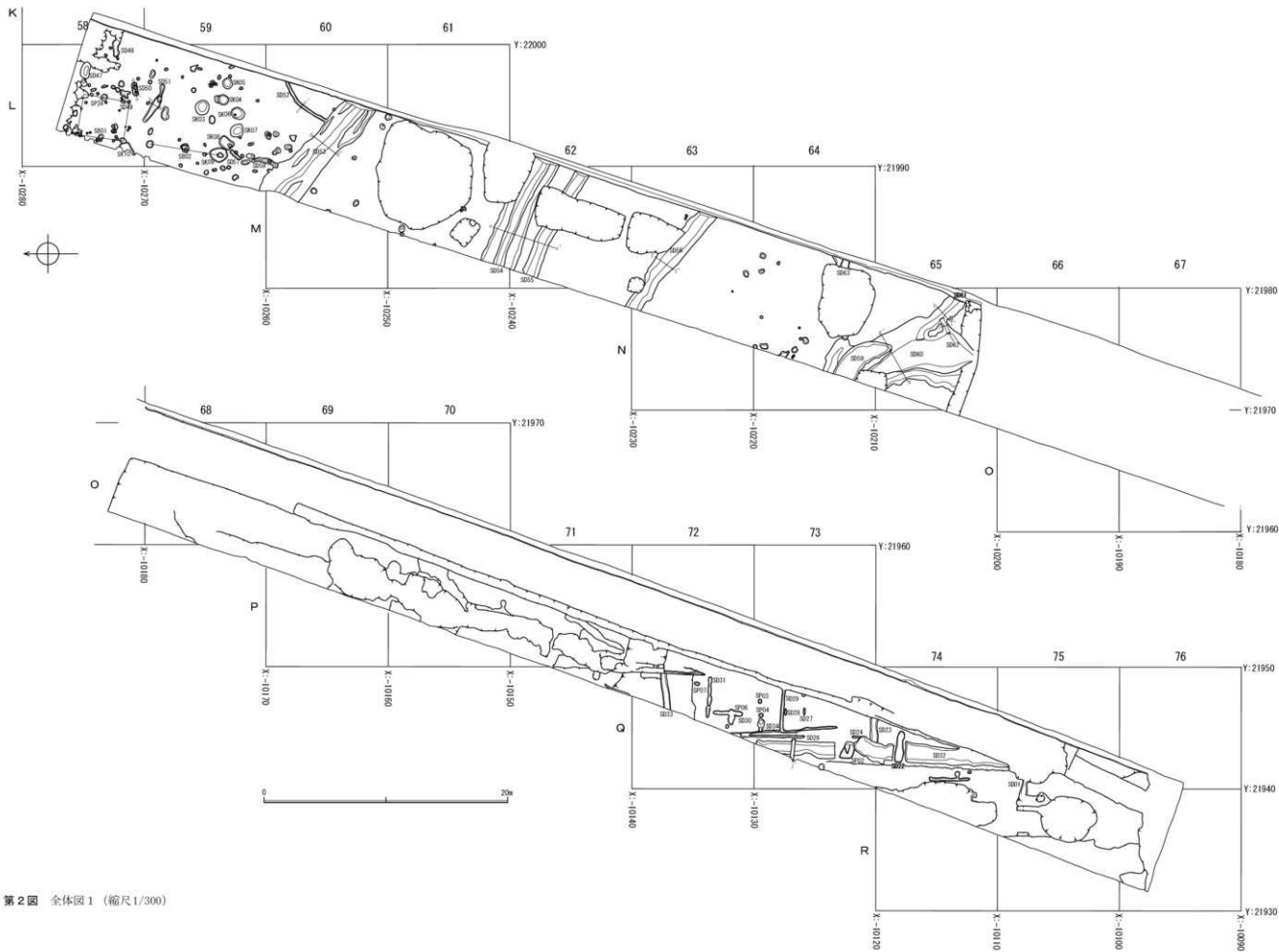
なお、遺構番号は各区通して遺構ごとに1から始まる。

### 第3節 遺物出土の状況

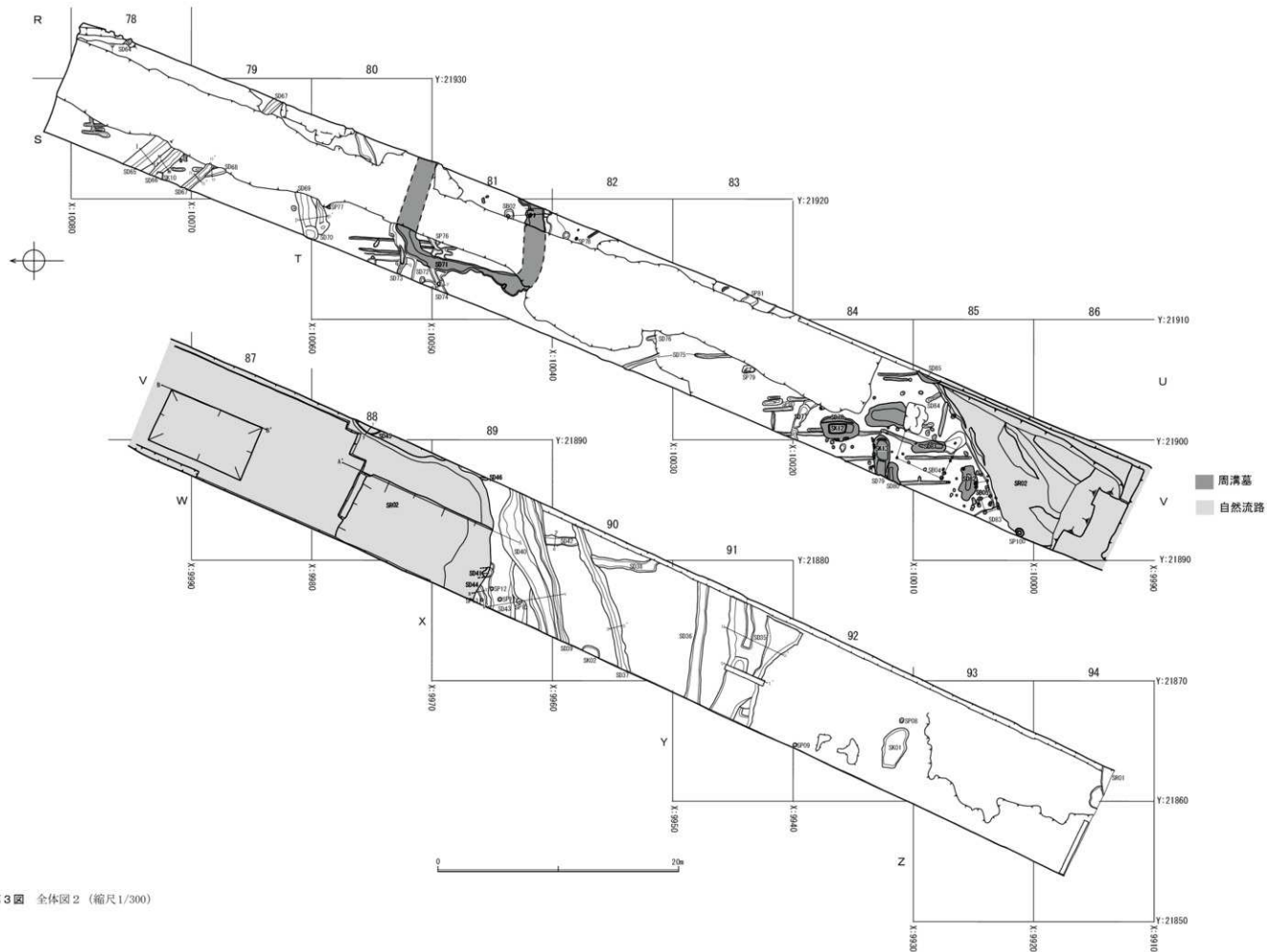
遺物は弥生時代後期～平安時代の土器が出土している。

遺物のほとんどが遺構からの出土である。弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器は、周溝墓や溝からであり、平安時代の須恵器・土師器は溝や自然流路から出土した。また、自然流路からは墨書土器や墨書で描かれた人面土器も出土している。

木製品は、溝から堅櫛などが出土している。



第2図 全体図1 (縮尺1/300)



第3図 全体図2 (縮尺1/300)

### 第3章 遺構

#### 第1節 周溝墓

T-W-81~86にかけ方形周溝墓4基を検出した。この周囲では福井市教育委員会(以下、市教委)の調査時に9基の周溝墓を検出し、うち1基が四隅突出形である。

周溝墓の平面形は市教委の調査成果とあわせると方形ないし長方形と推定され、周溝の形態はST01・02・03が陸橋部を4隅にもつ4隅切れ、ST04は全周するものと推測する。

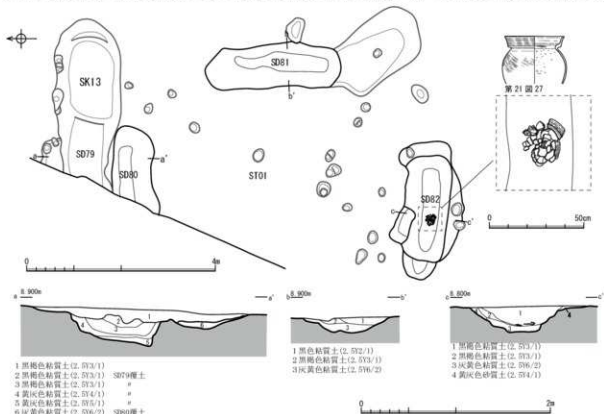
##### ST01 (第4図)

V・W-85に位置し、ST02に北接する。周溝は北溝の一部・東溝・南溝を検出し、SD80が北溝、SD81が東溝、SD82が南溝にあたり、各溝間は途切れている。なお、西溝は市教委の調査時に検出している。SD80の規模は長軸1.80m以上、幅0.88m、深さ0.30m、SD81の規模は長軸2.88m、幅0.90m、深さ0.30m、SD82の規模は長軸2.20m、幅1.24m、深さ0.36mを測る。埋葬施設は確認されていない。基底の規模は南北方向で5.32mを測る。遺物はSD82から弥生時代後期末の甕が出土している。

造営時期は周溝から出土した土器から弥生時代後期末と考えられる。

##### ST02 (第5図)

W-85・86に位置し、ST01に南接する。周溝は東溝と南溝を検出し、SD78が東溝、SD79が南溝にあたる。両溝間は途切れている。西・北溝は市教委の調査時に検出している。SD78の規模は長軸6.46m、短軸2.40m、深さ0.72m、SD79の規模は長軸2.40m以上、幅1.46m、深さ0.46mを測る。埋葬施設SK12はSD78内で検出し、埋葬施設は溝が埋まった段階で構築されたと推測する。埋葬施設の規模は長軸2.60m、



第4図 周溝墓実測図1 (縮尺1/20・1/40・1/80)



短軸1.66mを測る組合式の箱形木棺で両側板の一部が遺存していた。棺材の樹種はスギと同定された。SK12からは弥生時代後期末の壺口縁部が出土している。造営時期は、同時期と考えられる。

#### ST03 (第6図)

V-85・86に位置し、東・西・北溝は市教委により調査されており、南溝であるSD85の一部を検出した。そのSD85もSR02によって削られている。

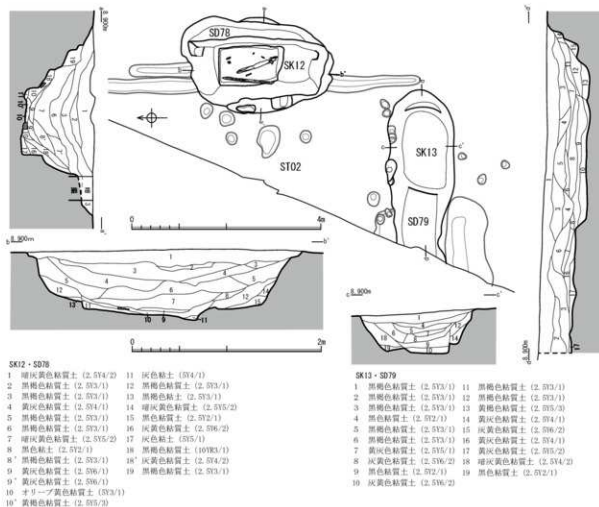
#### ST04 (第7図)

T・U-81・82に位置し、周溝はSD71と考えられる。SD71は南溝の一部と西溝が遺存していたが、クランにより南西隅部が不明である。SD71の幅は0.92m深さ0.26mを測る。基底の規模は南北方向で約9mと想定される。埋葬施設は確認されていない。弥生時代後期末と考えられる壺口縁部が出土している。造営時期は、同時期と考えられる。

## 第2節 掘立柱建物

掘立柱建物は5棟検出したが、全体像がわかる建物はない。SB01～03は南北方向の桁行のみの確認であり規模は不明である。SB01P01～03とSB03P01・02は調査時に同一建物と考えていたが、SB01P01～03とSB03P01・02間の柱間と軸方向に差異がみられたため別建物とした。

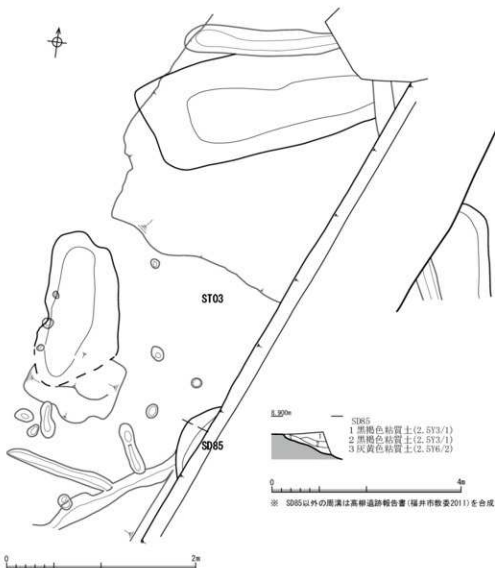
#### SB01 (第8図)



第5図 周溝墓実測図2 (縮尺1/40・1/80)

M-59に位置し、北東隅の柱穴はカクランにより不明である。建物の規模は桁行2間（柱間1.8m・1.8m）、梁方向1間（柱間3.3m）の側柱建物である。柱穴の規模は約0.50mの方形もしくは円形を呈し、深さ約0.30mで、建物の主軸方向はN-5°-Eを測る。

P1から須恵器の碗、P2から須恵器の蓋と土師器の甍片、P3から須恵器の碗・坏と土師器鍋が出土している。



SB02 (第8図) 第6図 周溝墓実測図3 (縮尺1/40・1/80)

M-60に位置し桁行方向の柱穴を3基検出した。建物の規模は桁行2間、梁方向は不明である。柱穴の規模は0.5m前後の方形で、深さ0.2m前後、柱穴の間隔は北から2.9m、2.9m、建物の主軸方向はN-8°-Eを測る。P1から土師器の甍片、P2から須恵器の坏と羽口片が出土している。

SB03 (第8図)

U-82に位置し、南北方向の柱穴を2基検出した。建物の規模は桁行1間以上、梁方向は不明である。調査区内に本建物を構成する柱穴が確認できていないことから建物は東側に延びるものと推定される。柱穴の規模は約0.9mの方形で深さ約0.25m、柱穴の間隔は1.8m、建物の主軸方向はN-3°-Eを測る。

SB04 (第9図)

V・W-85・86に位置し梁行3間、梁方向3間の側柱建物である。柱の規模は0.3m前後の円形を呈し深さ15cm前後を測る。桁行方向西列の柱穴は4本確認し、間隔は北から1.05m、1.50m、1.60mである。東列は中間の柱穴は確認できなかった。梁方向南列は3間のうち、中央の柱間が広がっている。建物の主軸方向はN-25°-Eを測る。

SB05 (第9図)

W-86に位置し、桁行方向2間、梁方向1間の建物である。建物の南側がSR02により削られているため梁方向は1間以上の可能性も考えられる。柱の規模は0.3m前後の楕円形を呈し、深さ0.15m前後、柱の間隔は桁行方向が東から1.40m、1.20m、梁方向は約1.00～1.10m、建物の主軸方向はN-72°-Eを測る。

### 第3節 土坑

#### SK01 (第10図)

Z-93に位置し、規模が長軸3.65m、短軸2.02mの平面が不整形円形を呈し、深さ0.17mを測る。

#### SK02 (第10図)

Y-91に位置し、規模が長軸1.50m、短軸0.54mの平面が長方形を呈し、深さ0.16mを測る。

#### SK03 (第10図)

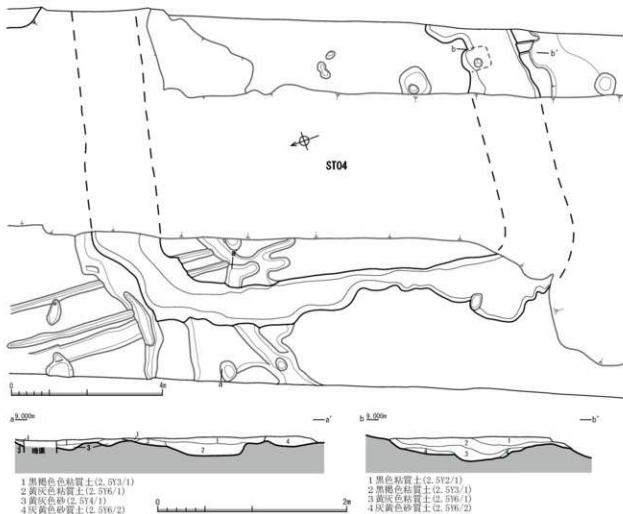
M-59に位置し、規模が長軸1.23m、短軸1.11mの平面が円形を呈し、深さ0.49mを測る。

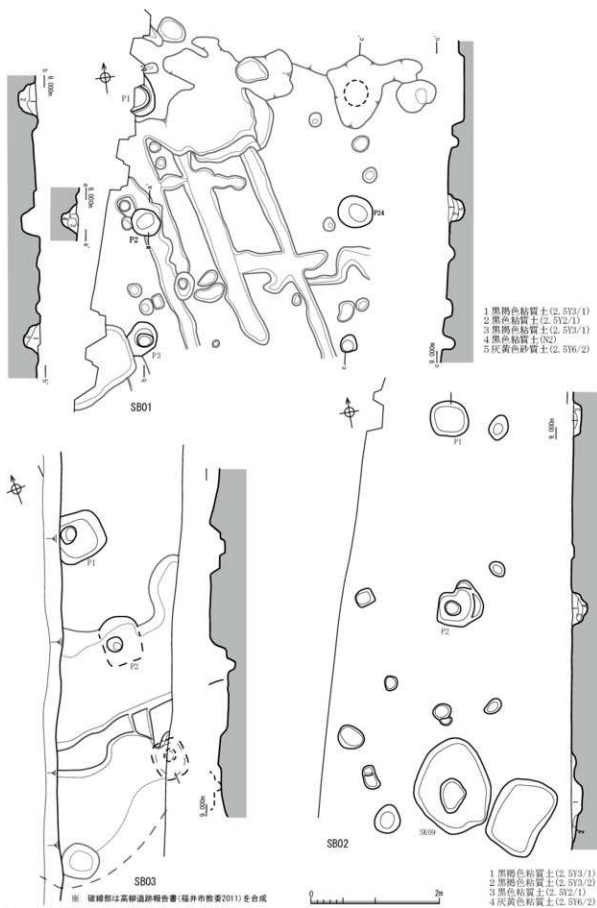
#### SK04 (第10図)

M-59に位置し、規模が長軸1.17m、短軸0.85mの平面が方形を呈し、深さ0.41mを測る。

#### SK05 (第10図)

M-59に位置し、規模が長軸0.78m、短軸0.76mの平面が円形を呈し、深さ0.73mを測る。





第8図 掘立柱建物実測図1 (縮尺1/40)

## SK06 (第10図)

M-59に位置し、規模が長軸1.14m、短軸0.95mの平面が円形を呈し、深さ0.15mを測る。

## SK07 (第10図)

M-59に位置し、規模が長軸1.23m、短軸1.05mの平面が円形を呈し、深さ0.50mを測る。

## SK08 (第10図)

M-59に位置し、規模が長軸1.25m、短軸0.89mの平面が円形を呈し、深さ0.07mを測る。

## SK10 (第10図)

M-58に位置し、規模が長軸1.10m、短軸0.92mの平面が方形を呈し、深さ0.30mを測る。古墳時代初頭の甕が出土している。

## SK11 (第10図)

T-79に位置し、規模が長軸0.58m、短軸0.53mの平面が円形を呈し、深さ0.13mを測る。

## 第4節 溝

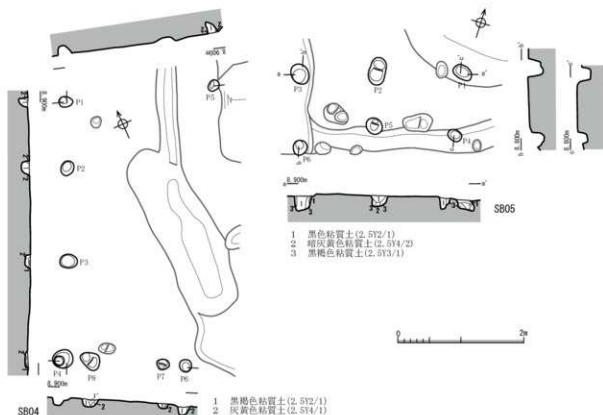
溝は近代の素掘り溝を含め多数を検出した。ここでは近代以外の溝について説明する。

## SD32 (第11図)

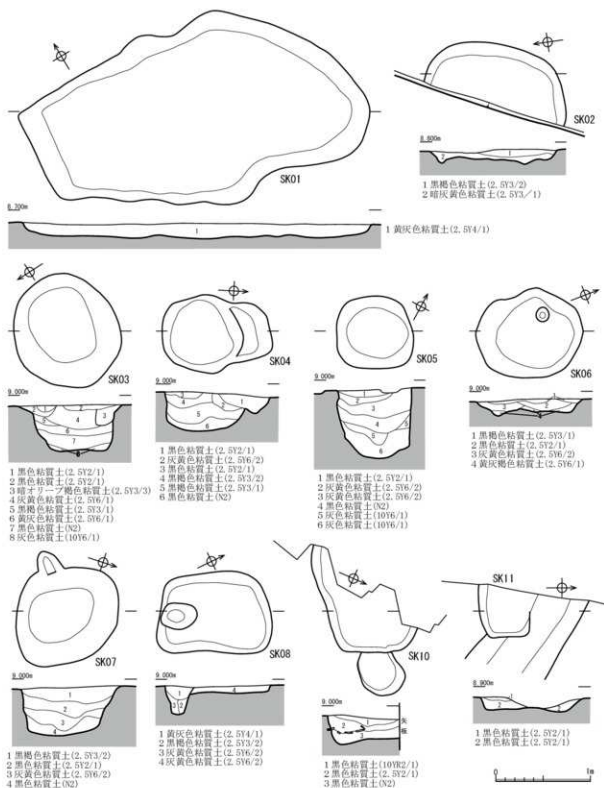
Q列を南北方向に流れる溝で、幅1.56m、深さ0.23mを測り、断面形は浅皿状を呈す。

## SD35 (第12図)

91列を東西方向に流れる溝で、幅6.67m、深さ0.49mを測る。壁は南側が鋭角に、北側が緩やかに立ち上がる。



第9図 掘立柱建物実測図2 (縮尺1/40)



第10図 土坑実測図(縮尺1/40)

SD37(第11図)

90列を東西方向に流れる溝で、SD39が並行している。幅1.10m、深さ0.24mを測り、断面形は逆台形を呈す。

**SD39 (第12図)**

89・90列を東西方向に流れる溝でSD40が近接している。幅0.84m、深さ0.25mを測り、断面形は逆台形を呈す。古墳時代初頭の甕片が出土している。

**SD40 (第12図)**

89・90列を東西方向に流れる溝ですぐ北にSR02が位置する。幅1.43m、深さ0.40mを測り断面形は逆台形を呈す。古墳時代初頭の甕片が出土している。

**SD42 (第12図)**

W列を南北に流れる溝で、SD37・SD39間に位置する。幅0.74m、深さ0.10mを測り断面形は浅皿状を呈す。

**SD43 (第12図)**

89列を東西に流れる溝で、SR02とSD40に切られている。幅1.94m、深さ0.21mを測り断面形は浅皿状を呈す。弥生時代後期末の甕片が出土している。

**SD44 (第12図)**

89列を東西に流れる溝で、東側はSR02に切られている。幅0.46m、深さ0.10mを測り、断面形は浅皿状を呈す。

**SD45 (第12図)**

W89に位置し、南東から北西方向に流れる溝である。SR02埋没後に構築されている。幅0.85m、深さ0.15mを測り断面形は浅皿状を呈す。古墳時代初頭の甕片が出土している。

**SD50 (第11図)**

L58に位置し、長軸1.10m、短軸0.46m、深さ0.19mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。

**SD51 (第11図)**

L59に位置し、長軸3.43m、短軸0.68m、深さ0.18mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。弥生時代後期の壺片が出土している。

**SD52 (第11図)**

L60に位置し、幅0.28m、深さ0.21mを測る溝で断面形はU字状を呈す。

**SD53 (第11図)**

L・M59・60に位置し、幅3.46m、深さ0.88mを測る溝で断面形はV字状を呈す。多量の弥生時代後期～古墳時代前期頃の土器とともに壺が出土している。

**SD54 (第11図)**

L・M61・62に位置し、幅2.83m、深さ0.80mを測る溝で断面形は菓研状を呈す。弥生時代後期末の土器出土している。

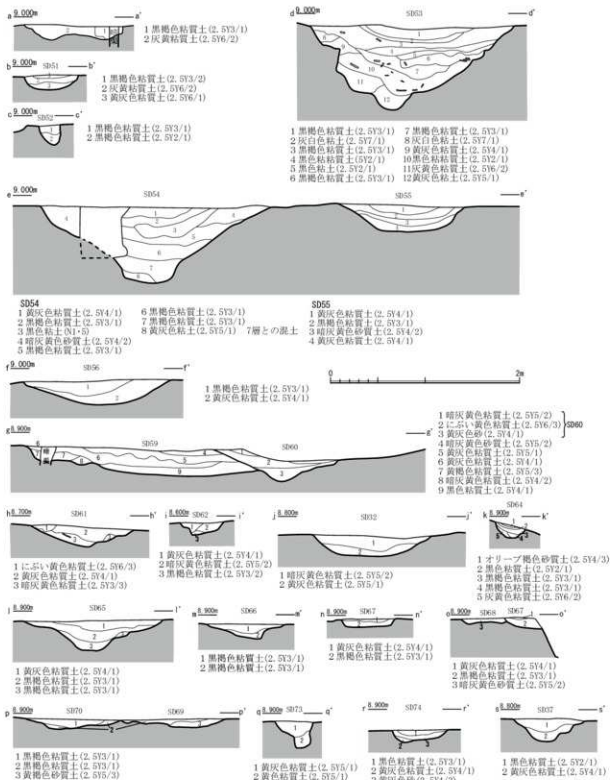
**SD55 (第13図)**

M62に位置し、幅1.23m、深さ0.29mを測る溝で断面形は逆台形を呈す。弥生時代後期末の土器が出土している。

**SD56 (第11図)**

M・N62・63に位置し、幅1.70m、深さ0.28mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。弥生時代後期の土器が出土している。

**SD59 (第11図)**



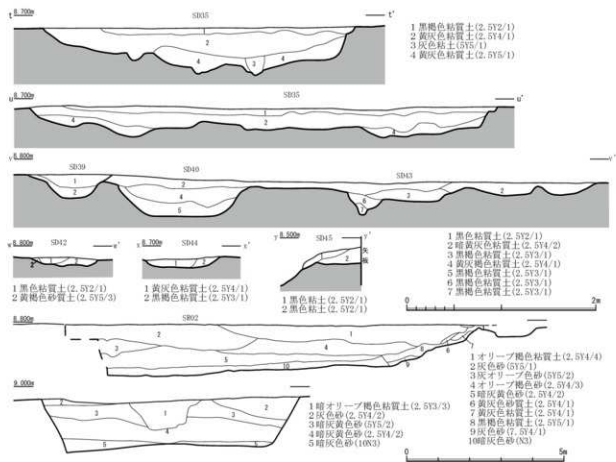
第11図 溝実測図1. (縮尺1/40)

N63に位置し、幅1.91m、深さ0.31mを測る溝で断面形は傾斜の緩やかなV字状を呈す。

SD60 (第11図)

N64・65に位置し、幅4.77m、深さ0.28mを測る溝で断面形は角が緩やかな箱形を呈す。





第12図 溝実測図2 (縮尺1/40・1/120)

## SD61 (第11図)

N65に位置し、幅1.57m、深さ0.21mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。SD59～61では主に須恵器が出土しており、墨書土器も観られる。

## SD62 (第11図)

N65に位置し、幅0.52m、深さ0.13mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。

## SD64 (第11図)

R78に位置し、幅0.40m、深さ0.22mを測る溝で断面形はU字状を呈す。

## SD65 (第11図)

S78に位置し、幅1.54m、深さ0.32mを測る溝で断面形は菜研状を呈す。

## SD66 (第11図)

S78に位置し、幅0.83m、深さ0.17mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。

## SD67 (第11図)

S78・79に位置し、幅0.62m、深さ0.08mを測る溝で断面形は箱状を呈す。

## SD68 (第11図)

S79に位置し、幅0.62m、深さ0.12mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。

## SD69 (第11図)

S・T79に位置し、幅1.43m、深さ0.10mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。

SD70 (第11図)

S・T79・80に位置し、幅0.77m、深さ0.10mを測る溝で断面形は浅皿状を呈す。

SD73 (第11図)

T80に位置し、幅0.49m、深さ0.23mを測る溝で断面形は上部がU字状、下部が箱状を呈す。

SD74 (第11図)

T80・81に位置し、幅0.65m、深さ0.14mを測る溝で断面形は逆台形を呈す。

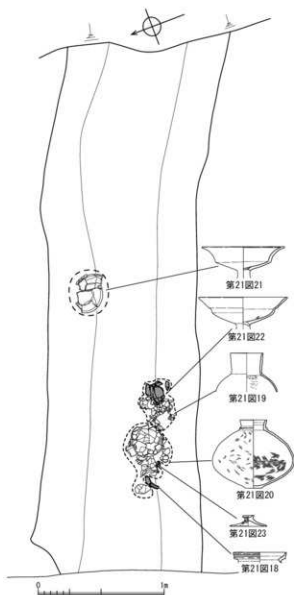
第5節 自然流路

SR02 (第12図)

85～89列を東西方向に流れる自然流路である。最大幅約40m、深さ約1.4mを測り、埋土は砂土で水流の痕跡を示す。遺物は両肩付近から底面の粘質土で縄文時代晩期、弥生時代後期～古墳時代初頭、9世紀代の土器が出土した。特に9世紀代の土器中に墨書土器や人面墨書土器が含まれていた。

また、底面付近で縄文時代晩期に属すると考えられる石剣が出土している。

SR02は、弥生時代後期末の周溝墓等の遺構を削っていることから、同時期以降に流路が形成され9世紀頃までは流路としての機能していたと考えられる。



第13図 溝実測図3 (縮尺1/30)

第6節 ビット

大小様々なビットを多数検出したが、掘立柱建物と捉えたビット以外に規則性を持つものは確認できなかった。

## 第4章 遺物

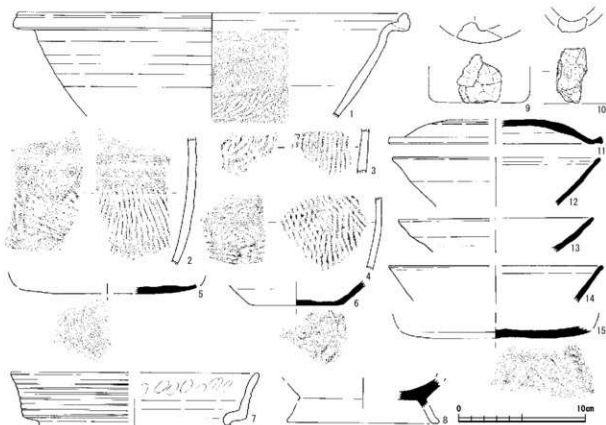
今回の調査では遺跡全体がすでに削平され包含層は残されていない。残されていた建物の柱穴と思われる穴も浅く、出土した遺物は限られる。検出された遺物の多くは溝などで、遺物もそのほとんどをこれらから出土した土器が占める。ここでは最初に建物の柱穴や土坑などから出土した土器について説明し、さらに溝(SD)や今回の報告で最も注目される遺物である人面墨書土器を出土した自然流路(SR)の順に説明していきたい。

### 第1節 土器・土製品 (第14図～第36図)

#### 1 掘立柱建物の柱穴や土坑出土の土器・土製品

SB01-P1からは、細片ながら須恵器埴の口縁部2点(第14図12・14)を図化した。この他にも須恵器が10数片出土している。SB01-P2からは、須恵器の蓋(第14図11)と土師器甕胴部片(第14図4)の2点を図化した。SB01-P3からは、須恵器埴の口縁部(第14図13)と須恵器無台坏(第14図15)に、土師器鍋(第14図1)の3点を図化した。SB02-P1からは、土師器甕胴部片(第14図2)を図化した。SB02-P2からは、須恵器無台坏2点(第14図5・6)と土師器甕胴部片(第14図3)に、羽口片1点(第14図9)を図化した。表土からの出土であるが同じような羽口片はもう1点ある(第14図10)。無台坏底部の3片(第14図5・6・15)は内面が非常に平滑で、よく使いこまれたものであろう。いずれも細片が多いが、これらの遺物からSB01は古代の建物と考えられる。

SB03-P1からは、図化が不可能な古式土師器が1片だけ出土している。



第14図 掘立柱建物柱穴出土の土器・土製品実測図 (縮尺1/3)

SP100からは、有段口縁甕の口縁部1片(第14図7)を図化した。擬凹線が7条施文され、口縁内面に連続指頭圧痕を残す。

SK10からは、口縁内面が肥厚する布留甕(第15図1)を図化した。底部はないがほぼ球形の胴部である。頸部直下の内面と胴部下半には指押えの痕跡が明瞭に残る。胴部の煤付着が著しい。

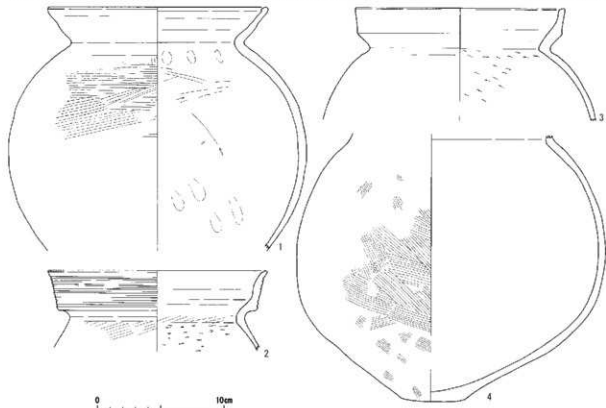
SK12からは、擬凹線を施文する有段口縁甕(第15図2)と須恵器高台坏(第14図8)の一部が出土している。施文・調整・色調や胎土など周辺の遺跡で見られる典型的な有段口縁甕で、擬凹線の施文も丁寧にされ、頸部内面の平坦面にヨコハケを残し、口縁内面の連続指頭圧痕もやや不鮮明ながら確実に存在する。須恵器高台坏は高台の端部を欠く、高台から坏の底部の破片で、断面などの摩滅が顕著である。出土状況が不明のため確実ではないが、有段口縁甕の依存状況が良好なことから、須恵器は上層からの紛れ込みで、有段口縁甕がこの遺構の時期を示しているかもしれない。

## 2 溝出土の土器・土製品

SD39からは、口縁端部内面が僅かに肥厚する布留系の甕1点(第16図2)を図化した。

SD40からは、古式土師器の甕と壺の2点を図化した。甕(第15図3)は有段口縁で口縁帯に擬凹線を施文せず、丁寧なヨコナデで仕上げる。内面の有段は不明瞭になりつつあり、口縁もさほど伸びず端部を先細りさせないで、そのままの幅で丸く終わる。胴部内面のケズリは明瞭だが、外面は摩滅のためか調整不明である。壺(第15図4)は胴部上半の頸部より上の頸部から口縁部を欠く。底径は5cm強あるが、摩滅のためか丸味をおびて自立しない。胴部最大径より上は摩滅や器壁表面の剥落が著しく、調整不明であるが、下半は左上がりのハケ調整を残す。胴部の中心に底部が合わないで、胴部水平の平面形も円形ではなく楕円形で、いびつな胴部となっている。

SD43からは、擬凹線が施文された有段口縁の甕1点(第16図1)を図化した。細いながらも擬凹線、内



第15図 土坑出土の土器・土製品実測図(縮尺1/3)

面の有段部、連続指頭圧痕も明瞭で、コの字の頸部にはヨコハケも明瞭に残る月形式有段口縁の典型である。

SD45からは口縁帯に部分的にまばらなタテミガキがある山陰系の壺(第16図3)が出土している。口縁帯への立ち上がりを強く突出することから山陰系としたが、突出が不明瞭で在地の有段口縁範疇かもしれない。口縁内面や頸部外面をミガキ調整することから甕ではなく壺と判断した。

SD47からは、坏部側面に孔が開く、北陸から東で多く出土する結合器台とされる坏部1点(第16図4)を図化した。

SD51からは、壺の胴部片(第16図24)を図化した。文様が粗い調整の上に施文されているためか明確ではなく、刺突列点文の上下に5〜7本前後の不明瞭な櫛描直線文を施文している。

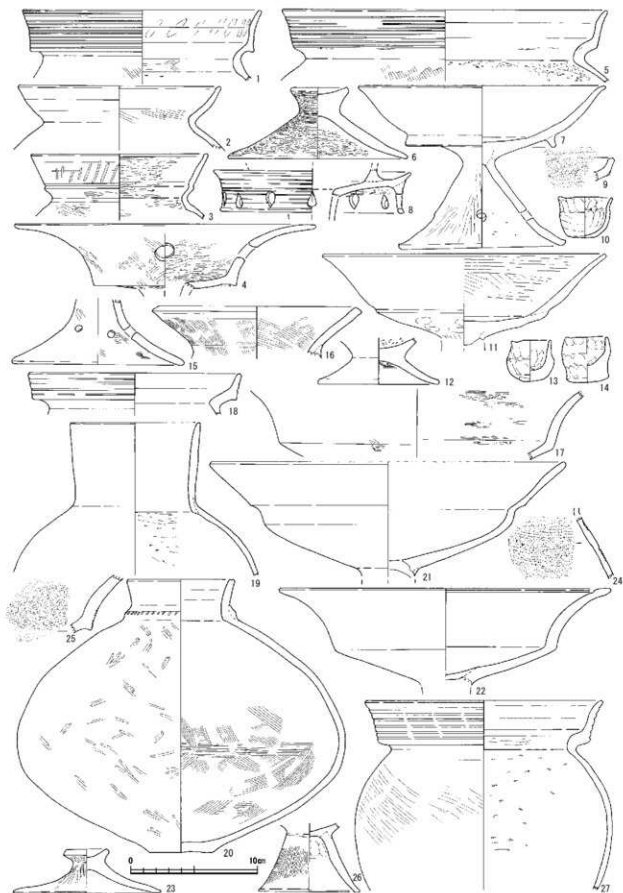
SD71からは、壺の口縁と思われるもの(第16図16)を図化した。単純に口縁部が直線に開くものと考えられるが、頸部との接合痕が不自然で、壺以外の器種の可能性もある。

SD80からは、図化が不可能な古式土師器片が2片出土している。

SD82からは、北陸在地の典型的な有段口縁の甕1点(第16図27)を図化した。長く伸びた有段口縁帯が緩く外反する。幅広い口縁帯には珍しくための擬凹線が6本と少なめに施文される。頸部は丸みのある面を有し、ヨコハケが残る。胴部外面は左上がりの斜めのハケであるが、このハケも他と比較するとやや太めで粗い。頸部以下は横方向にケズリであるが、非常に均一で薄い器壁となっている。

SD54からは、甕2点、高坏2点、装飾器台1点、蓋1点、脚台1点、手捏土器3点の10点を図化した。甕は有段口縁で先端がやや外反するもの(第16図5)と、小片だが小さく立ち上がる口縁下端に刺突列点文を加える近江系に特徴的なもの(第16図9)である。高坏は2点ある。完形に図化できたもの(第16図7)は坏底部からの立ち上がり部分に、1cmほどの凸帯を貼り付ける。脚は「ハ」の字状に開くが、端部近くになって小さくさらに開いて外反する。もう1点の高坏(第16図11)は坏部のみで脚部を欠く。坏部の底から立ち上がりの屈曲は弱い段となる。内面の口縁部付近は粗いヨコハケ、底部近くは同じく粗いナナメのハケで、外面にも指押えの痕を明瞭に残し、高坏に多いミガキ調整が行われた痕跡が見られない。そのためか表面に多数の砂粒が観察できる。蓋(第16図6)は口径が15cmと中型であるが、内外面ともヨコミガキとする。装飾器台(第16図8)は受部の垂下帯部分のみで、垂下帯の外面に7本の擬凹線を施文し、さらにこの擬凹線を切って水滴型の透かしを巡らせる。手捏土器は不安定な平底状のもの(第16図10・13)と安定した平底のもの(第16図14)で、後者の底は前者の2点より倍近く厚い。成形にも全面縦に指押えするもの(第16図13・14)と、底部から途中まで横に指押えして、縦に指押えして口縁が若干開くもの(第16図10)の2タイプある。

SD55からは、甕1点、壺2点、高坏2点、蓋1点の6点の土器を図化した。甕は擬凹線が4本施文された有段口縁(第16図18)で、やや外傾するがほぼ直線に立ち上がる。壺は2点ある。完形に図化できたもの(第16図20)は、やや下膨れで器高より最大径が大きくなるラクビーボールのような胴部から、短い口縁が直立する。頸部には上端にヘラ刺突列点文を巡らせた凸帯を貼り付ける。胴部外面は縦から斜めへ不規則で短いヘラミガキ、内面は最大径部のみヨコハケ、その上下はナナメハケとする。もう1点の壺(第16図19)は口縁から胴部上半までしか図化できなかった。縦長の卵形と考えられる胴部に、直立する口縁が付く。高坏2点はいずれも坏部のみで、脚部はない。脚との接合部から開いた坏の底部から外反した口縁が大きく開き、口縁端部の内面に幅1cmほどを肥厚させるもの(第16図22)は、おそらく棒状の脚となるもので、その接合部分を円盤状の粘土で塞ぐ。もう1点(第16図21)は丸く立ち上がった坏部



第16図 溝出土の土器実測図（縮尺1/3）

が屈曲して口縁帯となる。蓋は口径が12cmにも満たない小型で(第16図23)、外面がタテミガキであることから、壺に付くものであろう。

SD56からは、端部の裾が開く脚台(第16図26)を図化した。指押えで成形したのちにタテハケとし、鉢などの脚台にはあまり例のないものである。

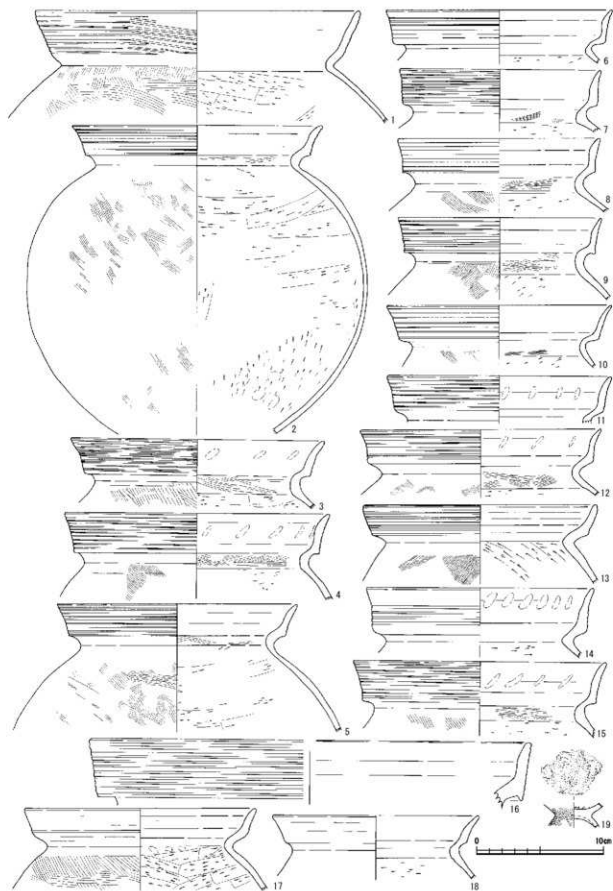
SD65からは、S字のスタンプが2段に施文される破片(第16図25)を図化した。径が大きくなりそうであるがこのような施文が多くある脚台ではなく、高坏の坏部が器台の受部、または壺の口縁部と考えられる。

SD53からは、多数の土器が復元でき、合計152点を図化した。

甕には弥生時代後期以来の北陸在来の有段口縁と、有段でも口縁帯の下端を強く突出させる「山陰」の系譜となるもの、頸部で単に屈曲して口縁となる「く」の字甕、口縁端部が肥厚する布留式の類となるものの4つのタイプがある。

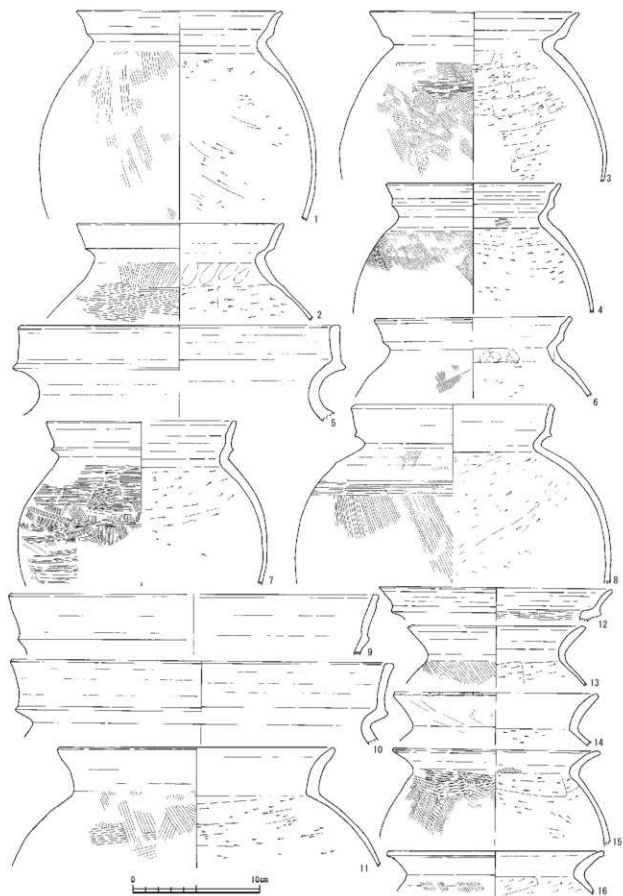
有段口縁は擬凹線が施文される有文のもの、ヨコナデで擬凹線が施文されない無文のものがある。擬凹線が施文される有段口縁は、口縁部を中心に16点を図化した(第17図1～16)。多数を占めるのが口径16～18cm前後のもの(第17図6～14)で、この時期の遺跡から最も多く出土し、この時期の法量として一般的な大きさの甕である。次に大きい口径の中型は口径20cm前後のもの(第17図2～5・15)である。一般的な大きさから中型の有段口縁の擬凹線は細くて施文される本数も10本以上が多い。これよりも大きい大型のものは口径が25cmほどの1点(第17図1)しか図化できなかった。この甕の擬凹線は描き雑ぎで施文されている部分である。さらに超大型の口径が30cmを大きく超えると想定するもの(第17図16)は、残された破片が小さく正確な口径を出すことができなかった。口縁帯がしっかりしているが施文されている擬凹線は弱く不明瞭である。擬凹線が施文されない無文の有段口縁は5点しか図化できなかった。口径が16cm程のもの(第17図18、第18図1～3)が、4点と多い。小さいものも1点(第18図4)で口径14cm弱と、擬凹線が施文されるものほど口径に大きな差は見られない。なおこの甕の外面のハケは一見するとタタキに見えるほど幅広く粗い。擬凹線が施文される口縁の形状はほぼ直立した有段が中ほどから外反し、先細りするもの(第17図6～9・11・12・14)で、この特徴は中型としたものには見られない。中型のものはいずれも有段の立ち上がりから外傾して口縁が先細りする、やや新しい要素と考えられるもの5点である。この状況は一般的な大きさのものにも2点(第17図10・13)あり、大型の口縁のもの(第17図1)も同様である。頸部は明確に平坦面を残すものは一般的な口径のもの1点(第17図7)だけであり、中型にも2点(第17図4・15)ある。これらほど明確ではないが丸味のある頸部のものは両者合わせて(第17図6・8～10、第18図2・3・5)と多いが、その多くにまだ頸部のヨコハケを残すものがあり、過渡的な状況を示している。次の時期以降に多くなる「く」の字甕の影響を受けて頸部が明瞭な「く」の字に屈曲するもの(第17図13・14)は少ない。この状況は擬凹線が施文されない無文の有段口縁についても同様である。無文の有段口縁は直立しないで立ち上がりから外傾するもの4点(第18図1～4・6)が顕著で、頸部にはまだ平坦な部分を残している。口縁外面では有段に見えるが、内面は有段の痕跡を残す程度で有段口縁としてはほぼ形態化しつつある。擬凹線が施文される有段口縁と比べると、より有段口縁とは無くなりつつある。擬凹線が施文される有段口縁でも、立ち上がる口縁内面を丁寧にヨコナデし指頭連続圧痕を残さないもの(第17図13)は、他の有段口縁とは異なり口縁帯が僅かだが丸く内湾して立ち上がる。内面も明確な立ち上がりではなく、丸みのある緩やかな立ち上がりである。施文される擬凹線も個々の条線の違いがあるものの、丁寧に施文されている。

ここでは無文の有段口縁の甕としたが、頸部直下を指押えして頸部を長くして、屈曲する頸部から間



第17圖 溝 (SD53) 出土の土器実測図1 (縮尺1/3)





第18図 溝 (SD53) 出土の土器実測図2 (縮尺1/3)

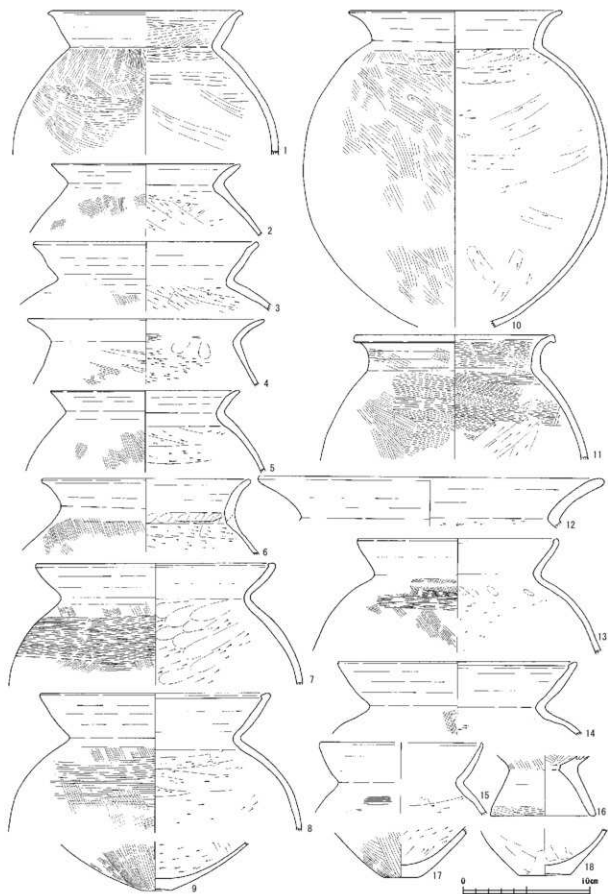
延びるように胴部に移行する土器(第18図2)がある。底部まで全体が復元されると壺に分類される可能性があるが、このような類例は確実ではないのでここでは甕とした。

有段口縁でも口縁帯の下端を突出させる山陰の影響を受けたものは6点図化した。口径が15~16cm前後のもの3点(第18図6~7)が一般的な大きさのもので、若干の強弱はあるが口縁帯の内側に小さな段が見られ、口縁帯を2回に分けて調整している。口径が30cmを超える大型のもの(第18図9・10)には、このような口縁の内側に段を残していない。しかしこの両者は共通して、口縁端部を先細りさせる北陸在来のものとは異なり、端部を平坦な面とする。これらの甕は口縁帯を外傾するが、直線に伸びる口縁帯を内傾させるもの(第18図5)は、口縁端部が丸くなる。このような丸くなる口縁は、頸部が丸くなり大型の壺となる可能性が高い。下端は突出させないが、立ち上がった口縁帯が屈曲して外傾するもの(第18図12)があるが、これまでの分類ではいずれにも当てはまらない。口縁全体を横に引っ張り出すが、頸部にヨコハケを行うことから、在来の有段口縁の系譜につながるかもしれない。

「く」の字甕は15~18cm前後のものが多く、10点(第18図13~16、第19図1~6)を図化した。口径の大ききの差が3cmあり、有段口縁よりばらつきが大きいが、それ以上なのが口縁部と頸部の形状の違いである。口縁が緩く外反して伸びるものは、頸部の屈曲も丸みのあるもの(第18図13・15、第19図5・6)が多く、直線的に口縁が伸びるものは、頸部の屈曲が内外面とも明確なもの(第18図14、第19図1~4・10)が多いが、「く」の字に屈曲する例外(第18図16)もある。口縁の端部についても、先細りさせるもの(第19図2・4・5)、平坦面をつくるもの(第18図14・16、第19図3)、端部全体を丸く収めるもの(第18図13・15、第19図1・6)などいくつかあり、これが口縁部や頸部の形状との違いに連動しない。また口径が20cmを超える大型のものも、口縁部が外反しながら大きく開くもの(第19図12)や、口縁部が直立気味に立ち上がり、先端が小さく外反するもの(第18図11)など、個体差が大きい。このように個体差が大きいのが「く」の字甕であり、これらの条件が編年に用いられることが少なく、図化も数達される理由であろう。「く」の字甕でも石川県能登地方に良く見られる口縁部に垂直な平坦面を有するもの(第19図11)は、頸部がやや長い内面がハケ調整であり、内面がケズリ調整となるこれまでの「く」の字甕とは異なる。胴部もやや長胴となるようで本県では珍しい能登の系譜につながると考えられる。小型の「く」の字甕と呼ぶべきもの(第23図1)が1点ある。器形は典型的な「く」の字甕であるが、口径が10.4cm、器高が11.7cmと一般的なものにはない大きさである。頸部の屈曲も明瞭で、胴部のタテハケで、甕本来と違いはない。

SD53から出土している甕で明らかに最も新しい時期は布留甕、もしくは布留傾向甕と呼ばれる畿内に系譜が求められるもので、5点を図化した。口縁端部を内面に肥厚する典型的な布留甕(第19図7・8・14)は、口径が18~19cmまでと大きさが揃う。内面の肥厚も単に水平な平坦面とするもの(第19図7・13)と、強く抑えて平坦面を沈線上に窪ませ、押し広げるように肥厚を盛り上げるもの(第19図8)など若干の違いはある。大きくは肥厚しないが、明確な平坦面をつくるもの(第19図13)は、17cmに及ばなく若干小さい。典型的な布留甕より若干古いと思われ、このような口径の違いは周辺の遺跡でも見かけることができる。口径がさらに小さい13cm程のもの(第19図15)は、幅み上げも小さいが、口縁の伸びは他のものと同じようである。

甕で底部まで復元できたものはないが、底部として図化した2点は、やや厚手の底部で底径が3cmのもの(第19図17)とやや薄手で底径が2cm程のもの(第19図9)で、いずれも有段口縁のものとして通有であるが、自立するには不安定な大きさである。ハケ調整の脚台(第19図16)があるが、どのタイプの甕となるか不明であり、そのほかの器種となる可能性も残る。台坏甕として注目されるのはS字状口縁のもの

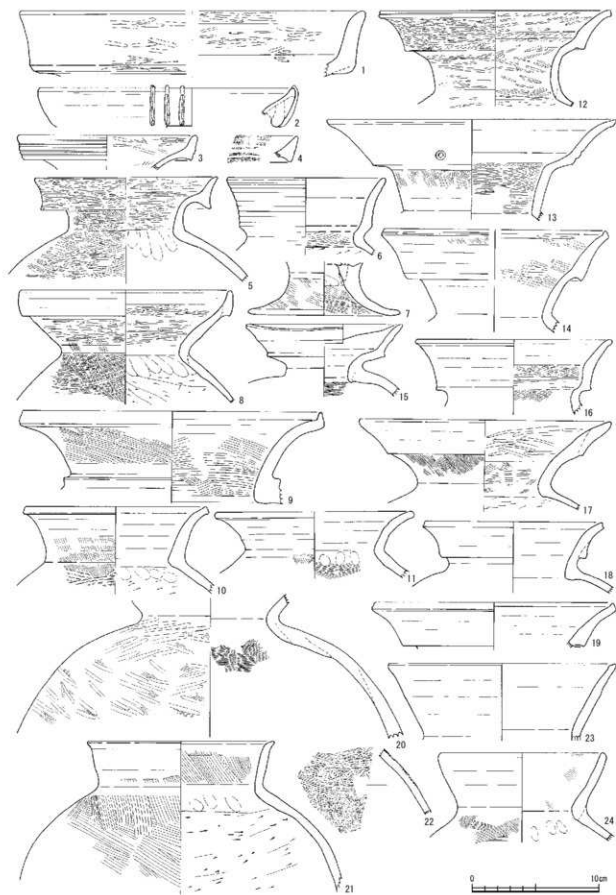


第19図 溝 (SD53) 出土の土器実測図3 (縮尺1/3)

のと特定できるもの(第17図19)がある。甕の胴と脚台の接合部のみの破片であるが、その接合部の胴部底面に指頭の圧痕が複数残され、脚台の天井部を粘土帯で補強する特徴的なもので、胎土も雲母片を含む当地では珍しいものである。破片の中から口縁部を確認することができなかったが、市教委調査区でも未確認である。現在のところ九頭竜川水系の遺跡では珍しいと思われる。

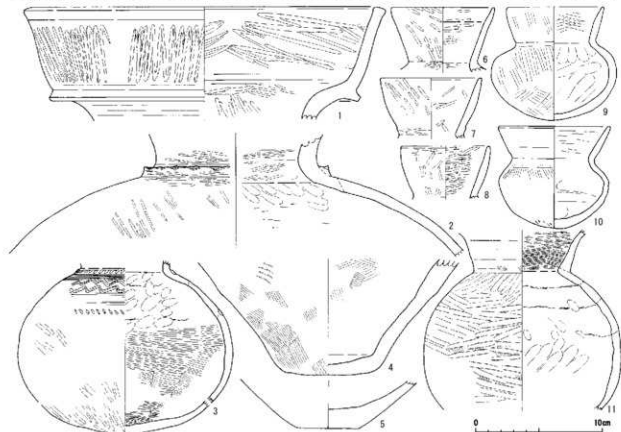
以上、古墳時代でも前期までの古式土師器として説明してきたが、これらの甕と口縁の形状が異なるものがある。頸部の屈曲は「く」の字で明確であるが、外反する口縁があまり開かないもの(第18図11)は、古墳時代でも布留式の内面が肥厚する前期のものではなく中期以降の甕と考えられる。

壺も図化できた点数が多いのは、やや大きめの器高が30cm前後の中型の口縁部を主体として18点である。甕と同じように有段のものは、擬凹線が施文されるもの1点(第20図6)で、「ハ」の字状に開く脚台(第20図7)が付くタイプと考えられる。小型ではあるが擬凹線が施文されるもの(第20図3)も有段口縁の壺であろう。口縁が甕と同様に長く伸びるものは擬凹線が施文されるもの(第20図6)と、ヨコナデで無文のもの(第20図16)があるが、前者は脚台(第20図7)が付き、台付壺(SR02から出土している第28図9のような)となると考えられる。有段でも口縁部を上下に拡張させるもの(第20図5)や、僅かに上に摘み上げるもの(第20図9)がある。口縁部の内外面のミガキは丁寧であるが、胴部のミガキはやや粗い。口縁部に面を作る複合口縁は、縦に棒状浮文を貼り付けるもの(第20図2)と、文様の施文など何もないもの(第20図8)があり、前者の頸部は筒状に伸びるが、後者は頸部で屈曲して口縁部を立ち上げる。小片ではあるが擬凹線が施文するもの(第20図4)もある。この時期に多くなるのが二重口縁の壺で、8点(第20図13-19)を図化した。1点(第20図19)は口縁部のみなので不明であるが、頸部で屈曲した後筒状に頸部が伸びてから上の二重となる口縁部が開くもの(第20図12・13)は、口縁内面の有段も明瞭である。このタイプの二重口縁は浮文を貼り付けるなど装飾性が高いが、ここでは口縁端部に1条の沈線を巡らせ、三方向に一個ずつ竹管を施文したもの(第20図12・13)以外は見当たらない。頸部が筒状にならないで「く」の字に外反する頸部のもの(第20図17)も、典型的な二重口縁である。ただし口縁部の内外面はヨコナデ、頸部の内面はヨコハケ、外面もタテハケで、ミガキ調整は残されていない。口縁部は頸部が短めのもの(第20図16)は、口縁の開きも小さいので有段口縁にも近い形状である。二重口縁としては一般的なものより口径が12cmほどと小さいもの(第20図15)は、口縁部が焼きゆがみで大きく曲がっている。断面の接合痕から「く」の字に開く口縁に二重口縁の下端に当たる部分を貼り付けたもの(第20図18)は、「見せかけの」二重口縁である。より二重口縁らしいものには、口縁部の内外面をヨコミガキ調整としたり(第20図12)、円形の竹管文を入れたり(第20図13)するなど、本来のものに近い。壺でも「く」の字の口縁に分類されるもの5点(第20図10・11・19・21・23・24)を図化した。直線に外傾するもの(第20図23)や、先になるほど外反する丸みのある口縁のもの(第20図10・11)、やや内湾気味な口縁のもの(第20図24)など、甕以上に個体差が大きい。さらに直立に伸びた口縁の先端だけ外反するもの(第20図21)は、ここでは古式土師器の分類で考え、壺に区分したが、胴部上半から想定される全体の器形から想定すると、市教委の調査でも出土した古墳時代中期以降の甕である可能性が高い。このサイズの壺で器形が判るまで復元できたものはないが、「く」の字に分類できるものは無文で胴部がハケ調整である可能性が高く、部分的にハケ調整を残すが、上からミガキ調整の胴部のもの(第20図20)などは二重口縁や有段・複合口縁になると思われる。この土器は内外面とも剥落が著しいが、外面には赤味の強い化粧粘土を施してから、ミガキを行っている。また胴部上半の破片(第20図22)に櫛描直線文と櫛描波状文を施文するのは二重口縁や複合口縁に多い。中型の壺より小さいが、小型壺には分類できないものが2点ある。接



第20図 溝 (S53) 出土の土器実測図4 (縮尺1/3)

合はしないが小さな平底となる球形の胴部のもの(第21図3)は頸部より上の口縁を欠く。凸帯に続けて櫛描直線文の下に2段に櫛描波状文を加え、その下を櫛描直線文で区切って、下に刺突列点文を巡らせる。その下半はタテミガキとし、内面の上半は丁寧な指押え胴部最大径から底部をヨコハケとする。もう1点(第21図11)は「く」の字に屈曲した頸部から外反気味に口縁となるが、口縁端部を欠く。また胴部も下半までしかなく、底部の形状は不明である。頸部に近い部分をタテミガキ、それ以下をヨコミガキとし、口縁部の内面はヨコハケ、胴部内面は輪積み痕を残す指押えとする。頸部に刺突を加えた狭い凸帯を巡らせてから胴部上半にかけて口径が30cm程となる大型の壺は、厚手の口縁が外傾気味に立ち上がる有段口縁であるが、口縁帯の下端が突出するもの(第21図1)と、施文されないもの(第20図1)の2タイプである。前者の口縁内面はヨコミガキだが、外面のミガキを波状の暗文とする。後者は内外面ともヨコミガキである。頸部に刺突の凸帯を巡らせた頸部(第20図2)は前者のようなタイプの壺に着く事例が多い。小型壺は口縁がほぼ直線に伸びるもの6点で、丸い胴部まで復元できたのは2点で、口縁部のみは3点、口縁部から胴部上半までが1点である。ほぼ完形に図化できた2点は、いずれも丸い胴部に外傾する直線の口縁が付く。口縁外面をタテハケ、内面をヨコハケとするもの(第21図9)と、口縁の内外面をヨコナデとするもの(第21図9)で、いずれも丸い胴部の外面をタテハケ、内面を指押え、指ナデとする。口縁部のみが図化できた3点(第21図6~8)は、外面がタテ、一部ヨコで、内面はヨコのミガキ調整である。完形に図化できた小型の壺より口縁が若干短いもの(第23図2)は、口縁の内外面をヨコナデし中ほどをやや膨らませる。胴部は外面ハケ、内面を指押えで、やや扁平となり鉢とするもの(例えば第23図10など)に近くなる。同じような調整の丸底(第23図15)も同じタイプと考えられる。底部は2点図化したが、安定した底部に見えるもの(第21図5)は、この時期の壺のいずれかと思われるが、や



第21図 溝 (SD53) 出土の土器実測図5 (縮尺1/3)

や不安定で長胴になりそうなもの(第21図4)は、破片ではあるが周辺でも出土している弥生時代中期の壺の底部かもしれない。

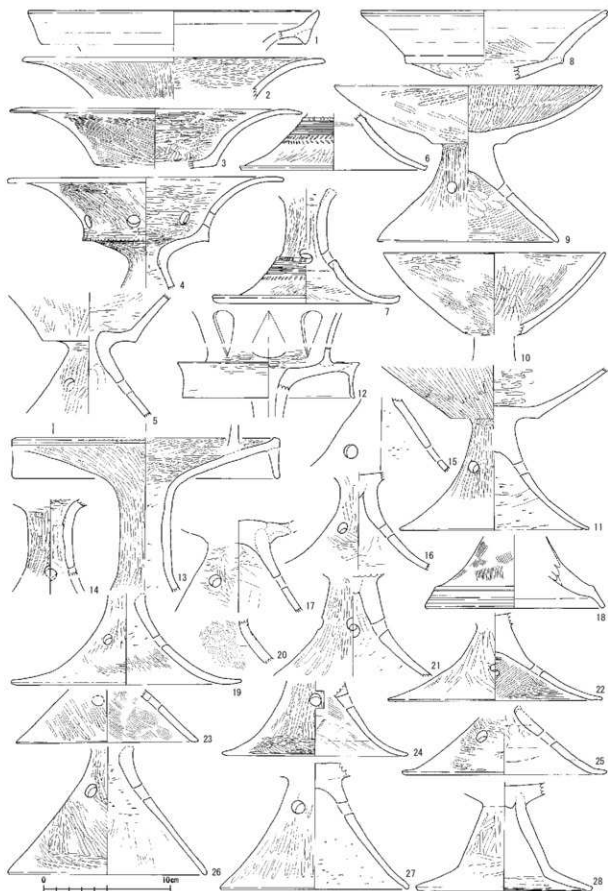
口径と器高から鉢に分類できるが、ここで鉢とするものにはない器形で、小型壺に近いもの(第23図3)がある。立ち上がった胴部の端部を小さく縮み出して外反する。胴部最大径の下に焼成後に穿孔する。外面ヨコ・ナナメミガキののち口縁部のみヨコナデで縮み出す。内面は指ナデののち一部ケズリののち口縁部をヨコミガキとする。この小型の壺と同じような胴部下半のもの(第23図16)があるが、こちらは外面がタテミガキ、内面をタテハケとする。

高坏は完形として図化できたのは1点(第22図9)で、形状や坏底部の有無などで判断したものの12点を図化した。脚との接合部を欠くが、畿内で有稜高坏とされる坏部(第22図8)がある。坏底部から継ぎ足した直線の口縁となる。完形として図化できた高坏は、浅い坑状の坏部に「ハ」の字状に開く脚が付くもの(第22図9)で、在来にはなく東海にその系譜を求めることができる。「ハ」の字状の脚も直線ではなく、外面が微妙に膨らみ東海系本来の内湾する名残と考える。坏部がこのように浅くなるのは東海系でも新しくなると考えている。同じ系譜で古めの深い坏部のもの(第22図10)があり、外面の口縁部付近をヨコミガキ、それから下と内面をタテミガキとする。坏の口縁部を欠くが同様の調整で、「ハ」の字状に開く脚(第22図11)は、脚部が外反するが在地に受容された結果と考えられる。このほかにも坏部との接合部が残る脚は、「ハ」の字状に開く脚(第22図17・21・27)。接合部の脚が細くなり、「ハ」の字状に開く脚端部が次第に水平近くとなる外来系譜のもの(第22図16・22)。「ハ」の字状に開いて途中で屈曲して脚端部が水平に近くなるもの(第22図28)などである。最後のタイプには、脚部中ほどの孔が開くものと開かないものがあり、本例は開かないものと思われる。

小型を除く器台で完形に図化できたものはない。口縁の形状から、有段口縁と口縁がラップ状に大きく開くもの、そして弥生時代後期末の北陸南西部を代表する装飾器台の3タイプがある。有段口縁のもの(第22図1)は、口縁帯に擬凹線が施文されないヨコナデの無文である。ラップ状に口縁が開くもの(第22図2~4)は、端部が水平となり、外面はタテミガキ、内面はヨコミガキを基本とする。口縁部はないが、坏部下半の形状から、このタイプと思われるもの(第22図5)もある。坏部の側面中ほどに孔が開くもの(第22図4)は、古墳時代初頭以降の東日本の古墳時代初頭以降の前期に良く見られる結合器台と呼称されるものである。装飾器台は2点図化した。口縁部へつながる立ち上がりの部分が残り、滴型の透かしが上下交互に入るとと思われるもの(第22図12)は、垂下帯がヨコミガキで擬凹線が施文されない無文である。受部の口径が21cmと装飾器台としては大きいもの(第22図13)も、受部上面中ほどの立ち上がり部分が付く位置と端部直下に剥離痕があることから装飾器台と判断した。外面は砂粒を見ることができないほど非常に良く磨きこまれている。脚部だけであるが、有段部の上端に刺突列点文を加えて、その下に櫛描直線文を巡らし、さらにその下が刺突列点文となるもの(第22図7)と、羽状刺突列点文となるもの(第22図6)の2タイプある。どちらも先の口縁部がラップ状に開く器台か、装飾器台のいずれかの脚部であろう。

高坏か器台か、どちらの脚部か判断できないものには、「ハ」の字状に直線気味に開くもの(第22図14・15・23・26)と、脚端部が水平近くなるもの(第22図19・24・25)である。前者には孔の位置が他のものより低い、脚中ほどより下に位置するもの(第22図15・23)は、孔の位置から上を推定できそうである。

小型器台は受部、脚部ともに完形に図化できたのは2点(第23図35・36)である。脚部に4孔を確認できたもの(第23図35)は、脚の半分ほどを欠くのみ略完形である。脚部の孔と受部と脚部との間の孔の



第22図 溝 (SD53) 出土の土器実測図6 (縮尺1/3)

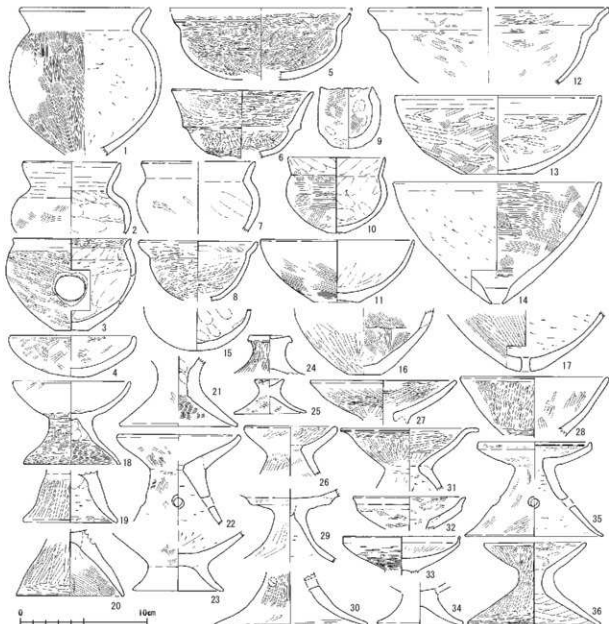


大きさを貫通する孔が、いずれも1cmほどでほぼ同じ大きさである。脚部の孔が確認できないもの(第23図36)は、口縁端部を摘み上げないで先細りでおわる。脚部は「ハ」の字状に直線が大きく開く。同様に口縁端部を摘み上げない受部は、口径が11cmを超えるもの(第23図27)と、8cmに満たないもの(第23図26)があり、後者は小さい口径に比して器壁が厚みである。脚部の開きが小さいもの(第23図21)は、小型器台としては器壁が厚い。受部の端部には摘み上げが僅かで面とはならないもの(第23図22)と、明らかに面を作るもの(第23図32・33)の2タイプある。前者は4孔である。脚部に孔があるもの(第23図30)には「ハ」の字状が大きく反るように開く。「ハ」の字状に開く受部の口縁端部が水平に摘み出すもの(第23図31)は、外面をタテミガキ、内面をヨコミガキとする。

この時期の鉢に分類されるものには大型、または中型のものではなく、比較的小型のものがほとんどである。そのためか、完形に図化できたもの(第23図3・4・9・10・11・13・14)や、完形近くまで図化できたものが多い。無段の小型の鉢(第23図4)は、器形からは時期的に降る古墳時代中期以降に多い坏に類似するが、その時期の鉢の口径よりかなり小さい。次の述べる台坏の坏部と類似するので、このほかの土器と同じく古墳時代前期であろう。先の鉢に脚をつけたもの(第23図18)は、小型器台とするよりも小型の台坏鉢と呼ぶべきかもしれない。脚部をタテミガキののちに間隔を空けたヨコミガキとする。これまで同じようなものは、本果で見た記憶がない。受部が深いもの(第23図28)は底を欠くため確実ではないが、前者のような台坏鉢になるかもしれない。脚部には受部との接合部に孔がないもの(第23図19・20)があり、これらの脚台とも考えられる。脚台には小さく「ハ」の字状に開くもの(第23図23・34)があるが、受部の接合面の上がケズリされており、小型器台ではなく、小型の鉢などと考えられる。鉢には胴部が深めのもので浅いものに、北陸では通有の有孔鉢がある。深めのもの(第23図7・8)は小型の壺と同じような大きさで、頸部が「く」の字状に僅かに屈曲し、外反した小さな口縁が付く。内面は指押えだが、外面はヨコミガキのもの(第23図7)と、ハケ調整のもの(第23図10)がある。浅めとなる胴部の鉢には口縁が有段のものと段が付かない無段のものがあり、いずれも口径が15cmを超える大きめのもの(第23図12・13)と、やや小さめの10~15cmのもの(第23図5・6・11)、さらに10cmにも満たない口径の小型のもの(第23図4・8)に分かれそうである。小型の鉢の調整は丁寧なミガキか、ハケと見た目が極端に分かれる場合が多いが、強くしっかりミガキが、間を空けてミガキに隙間が生じるようなもの(第23図5)は珍しい。有段の鉢は口縁部、胴部の内外面ともにヨコミガキを基本とするが、胴部の中間の内外面をタテミガキとするものが1点(第23図6)ある。有孔鉢は1点が略完形に図化できた。有孔鉢の器形を例えるのによく「砲弾形」と表現されることが多いが、本例(第23図14)は口径が16.5cmと器高の9.6cmより大きく、円錐状の器形である。一般的な有孔鉢より調整が丁寧で器壁の厚さも均一である。同様な有孔鉢の底部が1点(第23図17)図化できた。この土器も口径が器高を上回る、円錐形の器形と思われる。手捏ねの鉢となるもの(第23図9)は、丸みがあり安定しない底部から上に立ち上がり、そのまま口縁となる。口縁端部も摘み上げるだけで、調整せず不揃いである。外面に一部ハケ、内面も工具痕が残るが基本的に指押えで成形したままである。

ここまでSD53から出土した152点について説明してきたが、そのほとんどが弥生時代最終末から古墳時代前期のもので、特に古墳時代初頭以降の古式土師器と呼ばれるものが多い。しかしここでは壺として分類したが、古墳時代でも中期以降、むしろ古墳時代後期の須恵器と同時期の甕である可能性が高い土器(第21図21)は例外と考えられる。

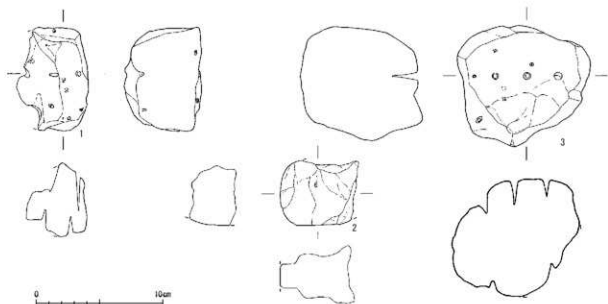
土製品として粘土塊が3点(第24図)出土している。いずれも形はまちまちで不整形ではあるが転がる



第23図 溝 (SD53) 出土の土器実測図7 (縮尺1/3)

ことなく、安定した形状である。最も大きい(第24図3)は長軸10.5cm、短軸(厚み)9.2cmを測る。重さは642gを量る。径0.1~1.0cm前後の孔が各方面に空けられ、その数は11カ所あるが、3カ所等間隔のところもあれば、不揃いのところもあって規則性は見当たらない。表面からは先が細くなった円錐状の工具による。次に大きい(第24図1)は長軸8.1cm、短軸(厚み)4.8cmを測る。重さは191gを量る。この粘土塊も径1~5mm前後の孔が各方面に空けられ、その数は7カ所ある。最も小さい(第24図2)は長軸6.0cm、短軸(厚み)3.6cmを測る。重さは120gを量る。この塊だけ孔は空けられていない。この3点は共通して火を受けたと思われる、1面のみ灰色でその反対側はやや赤味が強い。砂粒がないので単純には言えないが、本遺跡出土の古式土師器の胎土に似ている。古式土師器焼成に関わる遺物であろうか。

SD59~61からは、主に須恵器が多く出土し、同時期の土師器破片は多くあるものの図化できたものは少ない。ここでは器形が判るような須恵器23点、土師器2点に、墨書土器、または墨痕が明瞭に残され



第24図 溝(SD53)出土の土製実測図(縮尺1/3)

た須恵器の29点、合計54点を図化した。墨書土器については文字全体が良くわかるもの、または推定できるものに、文字は部分的しかないが、土器の器形が良くわかるものを抽出して図化した。

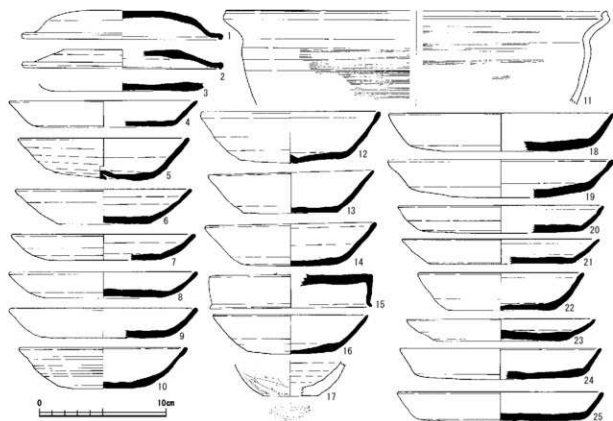
図化できた墨書土器を含む須恵器52点のすべてが坏・埴・皿などの供膳具である。その中高台付4点と少ない。ほぼ完形に近いのは、高台の内側に「楽女」の墨書があるもの(第26図5)で、底部の立ち上がりから口縁部まではほぼ直線に立ち上がる。同様な器形の高台坏は口径が一回り小さいもの(第26図7)で、高台の内側には文字ではなく墨痕が明瞭に残されている。底部から僅かに立ち上がったところまでしかないもの(第26図15)は、高台の内側に「吉」の墨書がある。高台坏で残る1点(第26図8)は底部から大きく開いて口縁部となる、埴の器形に近い。その高台の内側に墨痕が残されている。高台の付かない無台坏で墨書土器でないのは8点(第25図)、墨書土器は14点(第26・27図)の合計22点を図化した。

無台坏は底部から口縁部への立ち上がりが高台坏よりも大きく開くものが大半を占めるが、坏身の側面に「日上」の墨書があるもの(第26図12)は他よりも開かない。その多く(第25図6・12~14・16、第26図1・2・4・9・10・13・14・16)は底部から口縁までの坏身側面を2度からせいぜい3度ほどのヨコナデで立ち上げて口縁としている。5度も強くヨコナデするもの(第25図5)や、細かいヨコナデで立ち上げて口縁直下をさらに強いヨコナデによって端部が膨らむもの(第25図10)などは例外であろう。口径は13~14cm前後のものがほとんどで、一回り小さい12cmに近いものは3点(第25図16、第26図12・13など)である。高台付埴は墨書土器の2点(第27図)を図化した。略完形に図化できた埴の高台は短いが外反するもの(第27図1)で、坏部内面にやや薄い墨痕を、高台内面に「田」(または「口」に「十」か?)の墨書がある。もう1点(第27図8)は長く伸びて外反する脚の部分だけである。脚部の大きさや底部からの立ち上がりから、大型の埴になるものと考えられる。坏部内面、高台の内側にもやや薄い墨痕を残す。皿は墨書土器ではないもの12点(第25図)、墨書土器は5点(第26・27図)の合計17点を図化した。口径が15~16cm前後のもの(第25図4・7・8・20・21・23~25、第26図3・6、第27図7・11)で、器高が2cm未満と低く浅い。口径が18cm前後となるやや大きいもの(第25図18・19)でも、3cm程である。蓋は摘みの付くもの(第27図3)、摘みの付かない無紐のもの(第25図1)に、形状から摘みは付くと思われるが判断がつかないもの(第25図2)の付埴類の蓋3点と、無頭蓋などの蓋の1点(第25図15)の合計4点

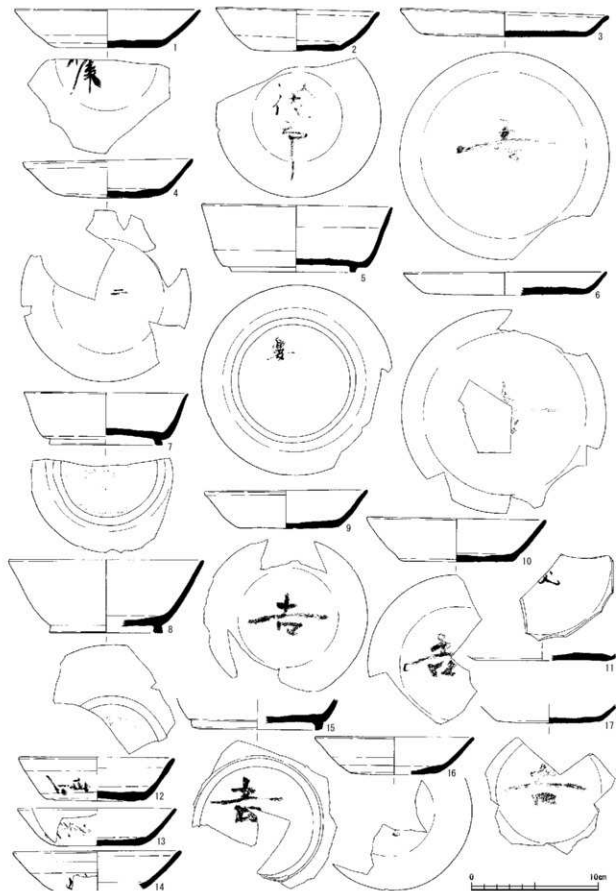
である。無頭壺などの蓋としたもの(第25図15)の天井部の中央付近に立ち上がりが残ることから摘みが付くもので、口縁端部の外反も水平に摘み出しが明瞭である。摘みの付く蓋の内面には「綾生」の墨書(第27図4)がある。この他に時期を明確にできるような須恵器、特に供膳具などは図化できなかった。

土師器は鍋と小型の甕の2点だけ図化できた。鍋(第25図11)は復元口径が30cmほどとなるが、破片が小さく全体は不明確である。立ち上げた口縁の端部を外に摘み出すとともに、内面に丸みのある面を作る。胴部は成形ののに細かい櫛によるカキ目を内外面に残す。小型の甕としたもの(第25図17)は、糸切の底部部分で底部からの立ち上がりに横方向のケズリを行う。

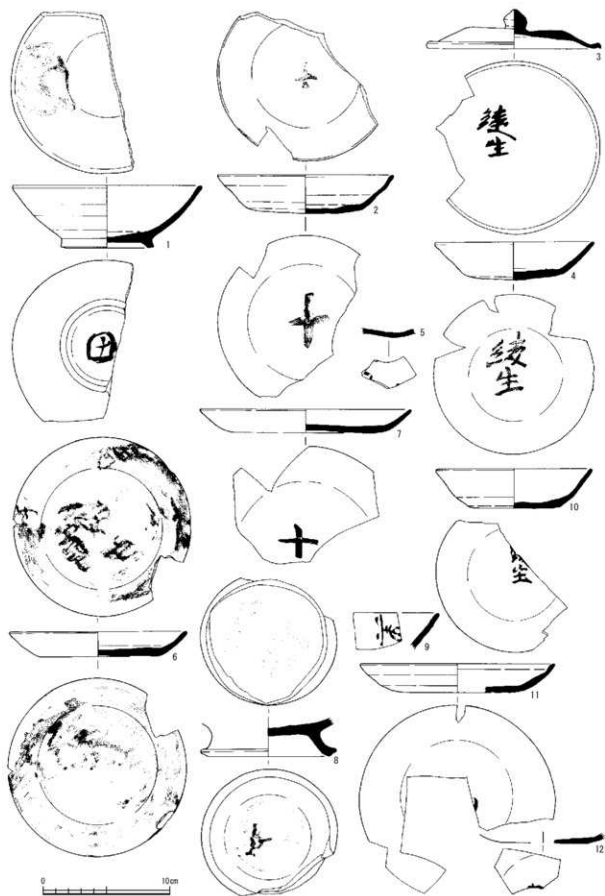
SD59～61からは墨書土器が多数出土し、字としての判読ができなかった破片も含めて29点(第26・27図)を図化した。ここでその内容の概要をまとめておく。点数が多かったのが「吉」の6点で、無台坯底部外面に3点(第26図9・10・17)、高台坯底部外面に1点(第26図15)、皿底部外面に2点(第26図3・6)である。次に多いのが、「口生」(第27図10)を「綾生」とすれば無台坯底部外面に2点(第27図4・10)、蓋内面に1点(第27図3)の3点である。また無台坯の底部内外面(第27図2)の2箇所「十」、皿底部外面(第27図7)にも「十」の墨書があり、これは3カ所(3文字)である。この他は無台坯底部外面(第26図1)に「口津?」、同じく無台坯底部外面(第26図2)に「佐印」または「佐市」、無台坯底部内面(第26図4)に小さく「二」、高台付底部外面(第26図5)に「楽女」などは各1点のみである。注目されるのが無台坯の側面に墨書土器があるものが4点(第26図12～14、第27図9)あり、側面の右側を上とすると「目上」と読めるもの(第26図12)から、いずれも右側を文字の上としているようである。その他は墨書の残された破片が小さく文字全体が判読できなかったものが3点(第26図11、第27図5・12)、破片は大きいものの墨書が記載された部分が大きく欠損して文字全体が残っていなかったものが2点(第26図16、



第25図 溝(SD59・60・61)出土の土器実測図(縮尺1/3)



第26図 溝 (SD59・60・61) 出土の墨書土器実測図1 (縮尺1/3)



第27図 溝 (SD59・60・61) 出土の墨書土器実測図2 (縮尺1/3)

第27図11)ある。また文字が記載された墨書土器ではないが、墨痕が無台杯の底部外面(第26図7・8)皿の内外面(第27図6)、堦の高台部分の内外面(第27図8)などに残されたものが4点ある。

### 3 自然流路(SR)出土の土器

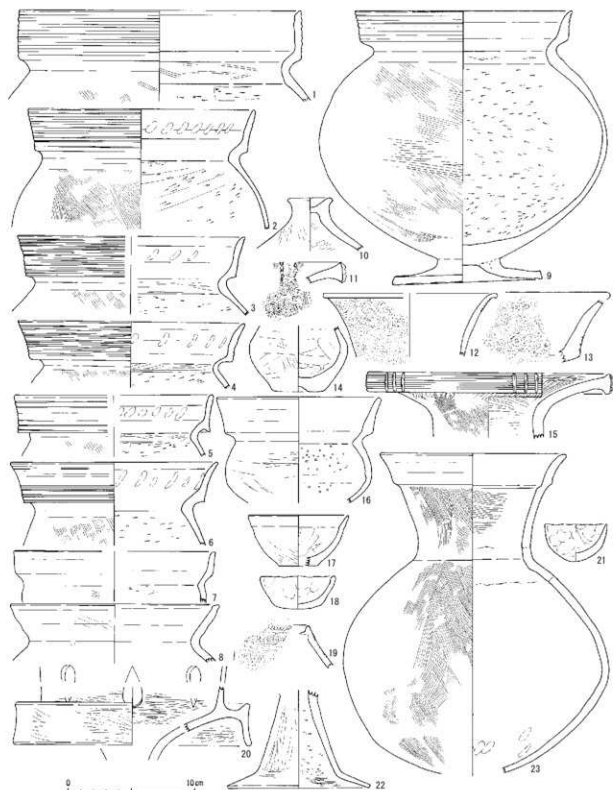
SR02からは須臾器、特に多くの墨書土器、人面墨書土器、さらに細片だが製塩土器が出土している。また古代に埋没した流路であるが、その最下層を中心に古式土師器も多数出土している。ここでは最初に弥生土器でも中期の細片を含む古式土師器について触れていきたい。

弥生時代後期ならびに古式土師器は甕11点、壺7点、鉢2点、高杯・器台4点など27点、および小片であるが弥生時代中期の甕口縁破片など3点を図化した(第28・29図)。

甕は1点が「く」の字甕(第28図8)であるほかは、10点が有段口縁で1点(第28図7)のヨコナデのみの無文を除き、9点(第28図1～6、第29図1～3)に擬凹線が施文される。このうち7点(第28図2～6、第29図2・3)は口縁が幅広く立ち上がり、先端が先細りするもので、1点(第29図3)を除き6点には連続指頭圧痕を確認できる。頭部内面に平坦面をつくり(第28図2～5、第29図2・3)、6点中1点(第28図2)以外はそこにヨコハケを残す。口縁がほぼ直立(第28図1)、またはやや内傾するもの(第29図1)もあるが、口縁帯は他の甕と同様に長く、連続指頭圧痕があったりして同じような時期のものであろう。口縁帯の下端を突出させる例外のもの(第28図5)もあるが、口縁がほぼ直立に立ち上がりそこから外反気味に先細りするなど、これらの特徴から典型的な有段口縁で石川県の福年の月影Ⅱ式に相当すると考えられる。頭部の屈曲が「く」の字となるもの(第28図6)は、口縁の立ち上がりが直立しないで初めから外反する、有段口縁としては新しい要素を示す。有段口縁でも擬凹線が施文されない無文のもの(第28図7)は、残された部分が少ないので判断に迷うが、有段も不明瞭で胴部も大きく開かないようなので甕ではなく鉢となるかもしれない。一見単なる「く」の字甕にも見えるが、口縁端部の肥厚が退化して水平に肥厚する口縁(第28図8)は、調整も粗く器壁も厚くなり、布留式の甕でも最終的な時期のもの、つまりここで図化した古式土師器の甕でもこの土器1点のみが、明らかに時期的に降るものである。ちなみにこのSR02から出土した有段口縁の擬凹線の多くは施文が非常に丁寧である。実測図では表現しきれないが、個々の擬凹線の条線も明瞭でかつ幅も均一なもの(第28図3・4などが典型)を、多数見ることができる。特に月影Ⅱ式の典型と考えている特徴を備えたもの、口縁がほぼ直立に立ち上がりそこから外反気味に先細りし、口縁内面には連続指頭圧痕、頭部内面の平坦面にヨコハケが明瞭に確認され、擬凹線の施文は口縁帯の上下にブレることなく、丁寧である(第28図2・5)。しかしやや新しいと考えるもの(第28図6)などは、擬凹線の施文は丁寧にされているが、口縁帯の下半分のみで上半分には施文されない。このように擬凹線の施文に対する意識の差が出始めたと考えられる。

壺は7点しかないが個体差が大きい。口縁端部に7本の櫛描直線文を施文ののちに、1組3本の棒状浮文を5カ所に貼り付ける頭部から口縁部のもの(第28図15)は、直立する頭部から口縁が大きく開き、端部近くなると水平近くなる。外面は頭部から口縁直下までタテハケ、口縁内面は頭部に近い部分はタテミガキ、端部に近くなるとヨコミガキであるが、内外面ともやや厚め(1mm弱か?)に粘土を被せたのちに調整しているためか、その部分が剥落している箇所あり、特に口縁内面に多い。脚台が付く以外はこの時期の典型的な擬凹線文の甕とほぼ同じもの(第28図9)がある。以前に袖高古墳群の報告書で「有段口縁広口壺」として復元を想定し、その後には上安田向田遺跡など坂井平野のいくつかの遺跡でも完形に復元できた。この壺も口縁部に7条の擬凹線を施文し、胴部外面は斜めのハケ、内面は横方向の小刻みなケズリである。ちなみに脚台部分と胴部が外れていたため、接合状況を確認できた。甕の底

部となる胴部の底は、本来の甕同様に小さいが平底にして胴部の下までタテハケ調整を行ってから、脚台に接合している。脚台との接合も脚台の内側に粘土を紐状に巡らして充填する。この接合状況についてはさらに詳細に説明する。長く伸びた頸部に有段の口縁部が付く壺(第28図23)は、底部を欠く他は略



第28図 自然流路 (SR02) 出土の土器実測図1 (縮尺1/3)



完形に復元できた。胴部の最大径がほぼ中ほどで球形でも無花果に近くなる胴部上半から緩く外反して長い頸部となる。口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部以下の胴部はタテハケ、頸部の内面はヨコハケ、胴部は指押えののち軽いヨコナデである。頸部が伸びる長頸の壺はあるが、このような有段口縁となるものは類例を知らない。破片では3点を図化した。ラッパ状に開く口縁の壺(第28図12)には口縁の外面に、4本の櫛描波状文を巡らせる。口縁端部を外側に膨らませる。肥厚した口縁端面に棒状浮文を貼り付けるもの(第28図11)で、肥厚させた部分の貼付けが剥がれていて、2本の浮文しか残されていない。残る1点は胴部上半の破片(第29図8)で、櫛描波状文と櫛描直線文を2段重ねる。

高坏は布留式に典型的なものの脚部を1点(第28図22)図化できただけである。器台は口縁が大きく開くものの破片(第28図13)と、装飾器台の受部の垂下部分(第28図20、第29図4)の2点、計3点を図化した。器台の破片(第28図12)は大きく開く受部の立ち上がり部分のみであるが、立ち上がり部に円形竹管文を巡らせる。装飾器台は脚部との接合部分を欠くが、残された垂下部分の径が18cmを超えるやや大型となるもの(第28図20)と、同じく径が16cmほどの一般的なサイズのもの(第29図4)である。いずれにも水滴型の孔の一部が残る。

鉢は有段口縁と小型だが非常に丁寧なつくりのもの2点を図化した。有段口縁の鉢(第28図16)は口縁部に擬回線が施文されない無紋で、胴部もハケ調整ではなくナデ仕上げである。小型の鉢(第28図17)は口縁部近くで僅かに屈曲し、平底の底部が明確である。口径7.8cm、器高4.1cmと小さいが、内外面とも丁寧なナデで、いずれも茶褐色の被膜が残されている。

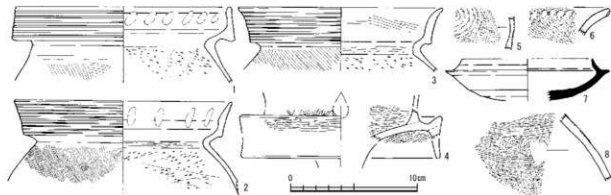
蓋は摘み部のみ1点(第28図10)図化できた。丁寧な成形だが、摩擦のためか内外面とも調整は不明である。

手捏土器として小型の壺の胴部と考えられるもの(第28図14)は、頸部直下までが残っている。内外面とも指押えののちの調整はよくわからない、いわゆる「手捏ね」で大きさの割に器壁は厚い。底部の成形の際に絞りながら平底としたためか、大きく不整形な上げ底状となっている。

鉢状のものは平底と丸底の2点を図化した。平底のもの(第28図16)は指押えの成形のみで器壁の厚さが不揃いで、口縁も波打つように揃っていない。丸底のもの(第28図21)も、指押えの成形ののちナデ仕上げで、口縁部を先細りさせて不十分ながら揃える意図はあったようである。

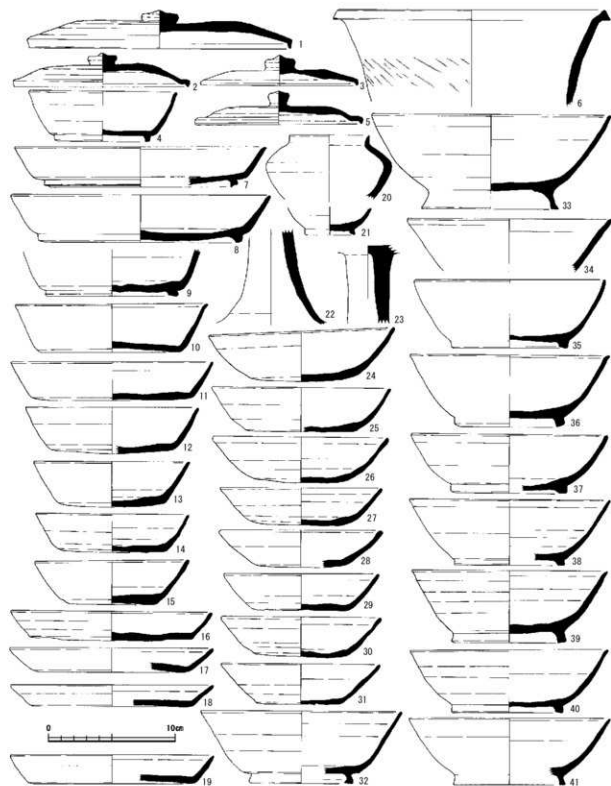
弥生土器でも小片ながら、中期に特徴的なもの2点を図化した。甕の口縁下端に刺突を加えるもの(第29図6)と、器種や部位は不明ながら渦巻のスタンプの一部が残るもの(第29図5)。

土製品としては土錘4点を図化した。土錘4点は中央が太くなった管状で長いもの(第34図7)で4.3

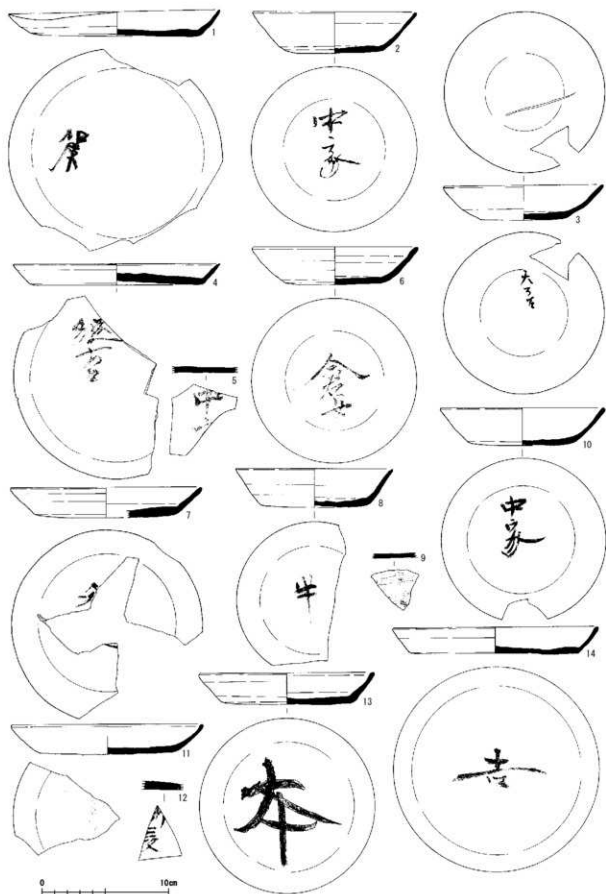


第29図 自然流路 (SR02) 出土の土器実測図2 (縮尺1/3)

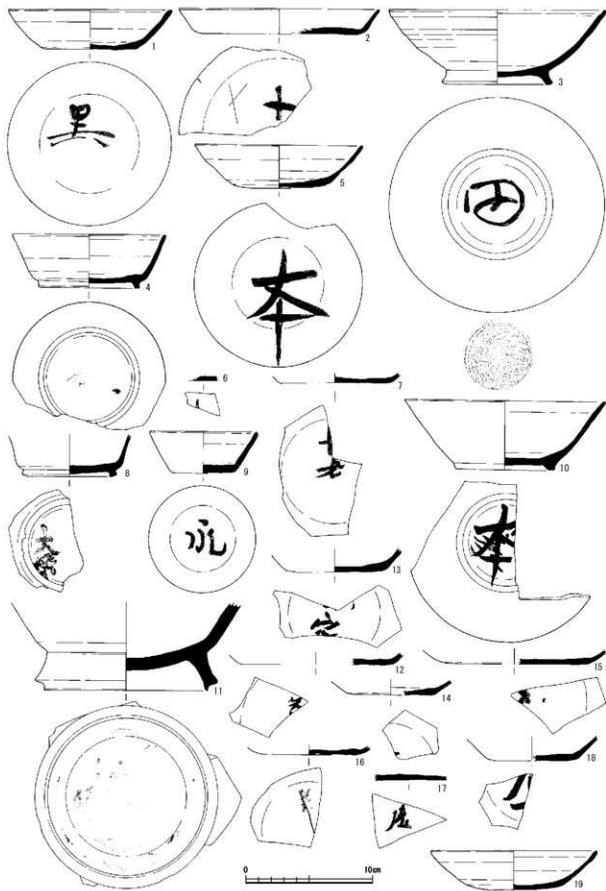
cm、最大径1.4cmを測る。次に長い(第34図6)が3.8cm、最大径1.1cmを測る。これと同じくらい(第34図8)が3.7cm、最大径1.4cmを測る。最も短いのがやや寸胴のもの(第34図9)が長軸3.0cm、最大径1.7cmを測り、最も重く9.0gを測る。



第30図 自然流路 (SR02) 出土の土器実測図3 (縮尺1/3)



第31図 自然流路 (SR02) 出土の墨書土器実測図1 (縮尺1/3)



第32図 自然流路 (SR02) 出土の墨書土器実測図2 (縮尺1/3)

## 古代の土器

SR02から出土した古代の土器には須恵器と土師器、そして製塩土器がある。須恵器はSD59～61と同様に器形が判るような須恵器41点、墨書土器、または墨痕が明瞭に残された須恵器の33点の計74点、土師器は人面墨書土器2点に甕など5点、製塩土器は小片であるが口縁部や調整などが明瞭なもの36点、土製品として土錐4点の計47点の合計121点を図化した。

図化できた須恵器のほとんどが供膳具であるが、SD59～61の溝とは異なりSR02では壺・高坏やなどに加えて、甕の口縁部の1点が加わる。

高台坏は墨書が確認されなかったもの(第30図4・9)が2点、墨書(第32図8)または墨痕が残されたもの(第32図4)の各1点の4点である。いずれも口径が12cm前後の最も多く出土するもので、口縁部は直線に外傾する。墨痕が残されたもの(第32図4)も、「大伴?」と読める可能性があるもの(第32図8)も高台の内面である。無台坏は高台坏のように、口縁部が直線に外傾するタイプ(第30図9～15)が6点と、底部外面に「半」の墨書があるもの(第31図8)と、同じく底部外面に大きく「本」と墨書されたもの(第31図13)の2点もこのタイプである。後者は器高が3cm程と低く、坏と皿のどちらにでも分類できる。

また、口径が9cmに満たないもので、底部に「永」?と読める可能性があるもの(第32図9)は時期的にやや古い可能性がある。口縁部への開きが大きく、丸みのある立ち上がりが目立つタイプで墨書が確認されていないもの(第30図24～31)8点に、墨書土器として7点(第31図2・3・6・10、第19図1・5・19)がある。SD60から出土した強いヨコナデを多数行うようなもの(第25図5・10)は見当たらない。復元できる口径も最も大きいものでも15cmに満たない(第30図24)で、そのほとんどが13cm前後である。1点のみ内面にかすかに墨痕が残るもの(第32図19)以外は、いずれも坏底部外面に墨書がある。「中家」が2点(第31図2・10)で、他に「倉女」(第31図6)、「黒」(第32図1)、「本」(第32図5)、「大万呂」(第18図3)などが各1点ずつである。「大万呂」の墨書土器内面には、「一」とも考えられる刻書があるが、本遺跡ではこれ以外に刻書が確認されておらず、また刻書のヘラ書きも細く弱く見えるので、粘土が乾燥する以前に無意識になされたキズである可能性も高い。墨書を確認した底部片でも、復元できた底径が7～8cm前後のもの(第32図7・13・14・16・18)は無台坏であろう。この5点はいずれも文字の判読はできなかった。

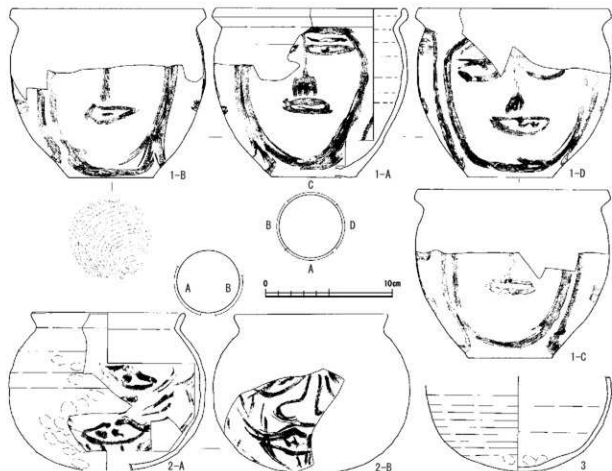
高台付塊は墨書が確認されなかったもの(第30図32～41)を10点、墨書が確認されたもの(第32図3・10)を2点である。高台が確認できた11点の多くは、短いもの(第30図32・35～41、第32図10)が多く、復元できる口径も15～16cmと同じようなものが多数を占める。高台が伸びるもの(第30図33)は、口径も19cmを超える。高台内面に「田」の墨書があるもの(第32図3)は、口径が17cmを超える中間の大きさで、高台の長さも両者の中間の長さである。またこの土器は底部高台内面に糸切を残す。

皿は高台が付かないものがほとんどで、高台が付くもの(第30図7・8)が2点あり、高台坏とするか判断に迷ったが、ここでは高台が付く皿とした。復元できたのは口径が20cmを超える大型の皿は、坏部の器高が3cm未満と低い。この2点には墨書は確認できなかった。この他に皿としたもので墨書が確認できなかったもの(第30図16～19)が4点、墨書が確認されたもの(第31図1・4・7・11・14、第32図2)が6点である。いずれも復元された口径が15～17cmと、高台が付くものより明らかに小さい。器高も2.0cm未満と低く扁平に思えるもの(第30図17・18、第31図1)が目立つ。墨書はいずれも底部外面にあり、「加津」(第31図1)、「綾万呂」(第31図4)、「吉」(第31図14)、「十」(第32図2)、文字部分の欠

損のため判読ができないもの(第31図7)など、それぞれ1点ずつである。墨書を確認した底部片でも、復元できた底径が12cm前後のもの(第32図12・15)は皿であろう。このうち1点は「万呂」(第32図12)の可能性がある。残る1点(第32図15)は文字の判読はできなかった。

蓋は口径が20cmを超える大型のもの(第30図1)が1点と、12~13cm前後のもの(第30図2・3・5)が3点で、4点いずれにも紐はある。蓋は墨書が確認されたものはない。壺は小型の短頸壺の口縁から胴部上半のもの(第30図20)と、同じく小型の短頸壺の高台が付く底部と考えられるもの(第30図21)の2点である。接合はしていないが出土する点数も限られるもので、色調や胎土にも大きな違いはないことから同一個体の可能性が高い。底部の胴部下半外面に自然軸のたまりが、内面の底にも薄い自然軸がある。高台も小さいが丁寧に作り出している。高坏は明らかにその坏部と判断できるものではなく、図化できたのは脚部の上半部分のみの2点である。坏部の底に棒状の脚が付くもの(第30図23)と、坏部との接合部分がなく、脚が大きく開くもの(第30図22)である。この他に最初でも述べた、甕の口縁部(第30図6)がある。口径が21cm程で中型の甕の口縁部であろう。底部外面に墨痕が残された大きな脚台のあるもの(第32図11)は、脚台の形状や大きさなどから瓶類と考えられる。

墨書土器には器種などを特定できなかったものが多数ある。そのなかで文字の大きさなどから「中家」と考えられるもの(第31図5)、二文字あるうちの下が「口長」と読めるもの(第31図12)もあるが、その他の破片(第31図9、第32図6・17)は文字が判読できなかった。

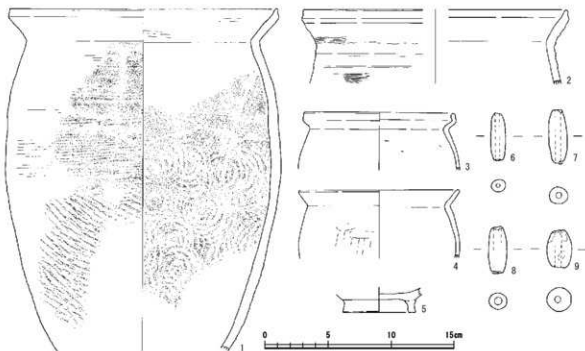


第33図 自然流路 (SR02) 出土の人面墨書土器・土器実測図 (縮尺1/3)

本遺跡の古代で最も注目される遺物が、2点の人面墨書土器である。1点は丸底、もう1点は糸切の平底の小型の甕である。丸底の甕は口縁部の一部と胴部上半は1/6ほどしか残っていないが、胴部中ほどから下半はほぼ残されていた。糸切平底の甕(第33図1)は口縁部は受口状に有段で、口径が胴部の最大径より若干大きい。胴部外面は丁寧なナデにより平滑となっているが、内面は波板状に強いヨコナデの痕跡が残されている。

人面墨書は四方向に残され、特に口縁部まで残された部分では顔面の上半分まで確認できる。いずれも太い線で顔の輪郭を描き、輪郭の線よりやや細めにまつ毛、目、鼻、そして口を描く。目は楕円の中に、黒く点があることから黒い瞳を表現したものと考えられる。鼻には縦の直線の下が楕状に4本に分かれることから、鼻の穴を表現したものと考えられる。口は2方向の顔面に、楕円の中に横棒が描かれたものが明らかに確認でき、残る2方向も下唇が2本描かれていることから、口の中の舌が描かれている可能性が高い。丸底の甕(第33図2)は口縁部から胴部下半の全体の1/6と、胴部中ほどから下半の2つの破片に分かれてしか復元できなかったため、顔面全体は不明である。口縁は「く」の字に屈曲した頸部から外傾して直線に短く立ち上がる。底部は残されていないものの、ほぼ丸い胴部で丸底であるのは確実である。胴部外面には成型時の強いヨコナデが残されているが、内面は丁寧なナデで平滑である。残された部分から判断して、顔の輪郭は表現されず目、鼻、口の3つのパーツのみが描かれているようである。目は楕円の中に黒く点があることから、糸切平底甕と同じ描かれ方であるが、鼻は顔面からの立ち上がりが描かれており、団子鼻を表現したものと判断されて、糸切平底甕とは異なる。また口は楕円の中に複数の黒点が描かれており、舌ではなく歯をさらに下唇の線の下に列点が描かれているので、髭を表現したものと考えられる。

この2点は糸切平底と丸底以外にも土器そのものにも違いがあるのは、前述のとおりであるが、色調も前者は赤味がかっているのに対して、後者は肌色から白色に近い。いずれも煤などの付着は確認できない。丸底の甕には人面墨書がないもの(第33図3)がある。こちらは人面墨書のある丸底のものと同じ



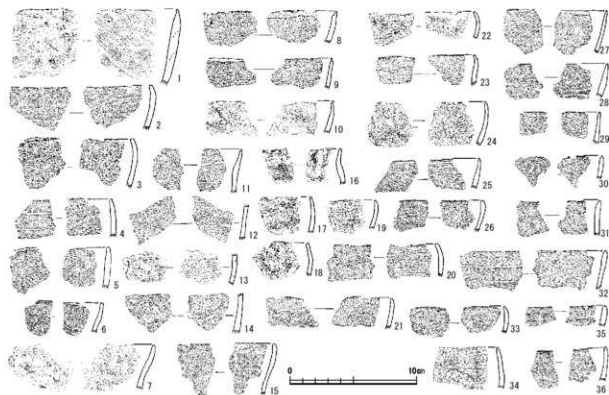
第34図 自然流路 (SR02) 出土の土師器・土製品実測図 (縮尺1/3)

く、外面には成形時の強いヨコナデが残されているが、内面は丁寧なナデで平滑である。さらに胎土の色調は肌色から白色に近いが、底部を除く胴部には煤の付着が、内面には全体に褐色から黒色に近い被膜が残されている。

土師器の甕では人面墨書土器以外に長胴甕2点と、小型の甕は有段と「く」の字の口縁の2点を図化した。長胴甕の破片はいくつか確認できたが、器形まで図化できるように復元できたのは1点(第34図1)である。長い胴部から「く」の字に屈曲した頸部から直線的に外傾した口縁部の端部を積み上げて面取りする。胴部上半の外面は粗いカキ目で、下半を平行タタキの痕跡を残す。内面も外面に対応するように上半をヨコナデ、下半はタタキに対応する青海波を明瞭に残す。外面の頸部以下に付着する煤は下になるほど広く厚くなる。

これと同様の甕と考えられるが、残された部分が少なく口径が21cm前後と推定できる甕(第34図2)の口縁は小さく屈曲するように積み上げて小さく立ち上げる。頸部に3段、頸部から伸びる口縁にも3段となる強いヨコナデで仕上げるが、一部さらにヨコハケを加える。この2点は調整などの違いから違う個体と思われる。小型の甕で有段の口縁(第34図3)は有段の中ほどが少し窪み、端部が膨らむ。外面は薄く粘土が剥落している。色調はやや赤みがあり肌色に近く、人面墨書土器の丸底甕と同じような大きさ、器形であろう。「く」の字の口縁の甕(第34図4)は、内外面とも煤または黒色の被膜で覆われているが、本来は丸底のものと同じく白色の胎土であることが断面で確認できる。この小型の甕の口径は人面墨書土器の丸底甕とほぼ同じの12cm前後である。土師器としては甕の他に、壙の高台部分(第34図5)を1点だけ図化した。内外面ともナデの痕跡が残る。

土製品として、土錐を4点図化した。長さは長いもの(第34図7)で4.1cm、短いもの(第34図9)で3.0cm、重さは重いもの(第34図9)で9.2g、軽いもので5.1gを測る。色調は乳灰色のもの(第34図8・9)



第35図 自然流路 (SR02) 出土の製塩土器実測図 (縮尺 1/3)



と淡橙褐色のもの(第34図6・7)の2種類である。

製塩土器は口縁部を主として、調整などが良くわかる破片の36点を図化した。これらの製塩土器は図版を組んだ段階で、柱穴出土の土器を確認中にその存在に気が付いたために時間がなく、すべての破片を確認することはできていない。よって口径が小さく器壁も薄い小型のものがほとんどであり、厚手で大型の口径となるものが他にないとは言えない。このなかで口径が25cmを越え30cm近くになる可能性のある破片(第35図1)は1点だけで、器壁もこの他のものと比較しても5mm前後と倍近く厚い。口縁端部のみを先細りさせ、外面には幅2cm前後の輪積み痕を残し、内面は左上がりのハケ調整である。この破片を除けば口径が25cm程度のものばかりである。これらの破片は口縁端部の形状で3つに、屈曲の違いで2つに分類できる。端部の形状では上端面に小さいながらも明らかに平坦面を有するもの(第35図2～6)が5点、口縁端部近くに段をつくるもの(第35図8～11)が4点で、この10点以外は口縁を先細らせて終わるもの(第35図7・15～36)が23点と最も多い。越前での製塩遺跡の調査事例が少ないため、このような破片では全体の形状はわからないが、調整や時期などが近似する細呂木阪東山遺跡などと比較すると推察できる部分もある。口縁が屈曲しないで直線的に開き、先端が先細りするもの(第35図27～36)は塊状の器形か平底の鉢のような器形のいずれか考えられる。先端が僅かに内湾して先細りするもの(第35図17～19、22・23～26・33)は、塊状の器形であるものに多い。端部の上端面に明らかに平坦面を有するもの(第35図2～6)や、口縁端部近くに段をつくるもの(第35図8～11)は平底の鉢のような器形であるものに多い。この他に開く胴部から内湾しながら屈曲するもの(第35図7・15)や、内湾気味に伸びる胴部から口縁が外反するもの(第35図16)などは、底部の形状は不明であるが塊状のものや平底の鉢の器形のものより、胴長の器形と推察される。

成形・調整については外面を指押さえか弱いヨコナデで、輪積み痕を残すものも多い。輪積み痕は大型となる可能性があるとしたもの(第35図1)が幅2cm前後と広く、そのほかは広くても1.5cm(第35図13・27・32)で、1cm前後のもの(第35図4・6・11・19・22・23・26・32)が幅の狭い部類である。内面は指ナデが多く、ハケ調整を残すものもあり、ほとんどがヨコハケ(第35図2・3・5・7・20・23・25)で、大型の可能性を考えた1点(第35図1)だけが左上がりのナメハケである。胎土に個体差はあるが、ほぼいずれの破片でも0.1～0.2mm程度の非常に小さい黒色と白色の砂粒が含まれている。色調は大型の可能性を考えたものが白色に近い明るい肌色で、そのほかは赤味の強い褐色(第35図6・29など)が、やや赤味のある肌色(第35図2・15など)が本来の色調と考えられるが、半数近くは吹きこぼれや煤などで黒くなっている部分のものが多い。このように比較すると大型の製塩土器の可能性を考えたもの(第35図1)だけが、輪積み痕幅も広く調整や色調なども異なり異質である。焼成は色調に関わらず、良好である。



## 第4章 遺物

記録番号	出土区・出土層名	種 類	部 位	法 量 (g)		備 考	製 工	色 調	境 況	備 考 (遺著本文)
				口縁・底径	高さ					
第17011	553	甕	口縁部	19.0	13.3	内口3本輪彫刻 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴下1コナダ 胴・横方向ケズリ 輪彫刻	1	赤褐色	良	
第17013	553	甕	口縁部	18.2	16.3	内口3本輪彫刻 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ケズリ	1	赤褐色	良	
第17014	553	甕	口縁部	17.8	15.9	内口3本輪彫刻 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ケズリ	1	赤褐色	良	
第17015	553	甕	口縁部	20.0	17.0	内口3本輪彫刻 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第17016	553	甕	口縁部	18.4	15.3	内口3本輪彫刻 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第17017	553	甕	口縁部	18.2	16.5	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	全体に傷付き
第17018	553	甕	口縁部	18.2	15.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第17019	553	付什物	底蓋	12.1	12.1	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	口縁部
第1801	553	甕	口縁部	16.1	16.6	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ナメハク ケズリ	1	赤褐色	良	
第1802	553	甕	口縁部	18.2	17.7	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ナメハク ケズリ	1	赤褐色	良	
第1803	553	甕	口縁部	18.4	13.4	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ナメハク ケズリ	1	赤褐色	良	
第1804	553	甕	口縁部	13.4	116.3	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ナメハク ケズリ	1	赤褐色	良	非常に良 全体に傷付き
第1805	553	甕(遺著本文) 底蓋	口縁部	15.0	17.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ナメハク ケズリ	1	赤褐色	良	内面に傷付き
第1806	553	甕	口縁部	15.4	16.4	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1807	553	甕	口縁部	14.6	13.0	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1808	553	甕	口縁部	15.4	14.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ケズリ	1	赤褐色	良	全体に傷付き
第1809	553	甕	口縁部	15.0	14.0	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・ケズリ	1	赤褐色	良	
第1810	553	甕	口縁部	16.1	16.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1811	553	甕	口縁部	15.4	16.5	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1812	553	甕	口縁部	16.3	12.4	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1813	553	甕	口縁部	13.4	14.0	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1814	553	甕	口縁部	16.5	14.1	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	やや不潔
第1815	553	甕	口縁部	16.1	17.5	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1816	553	甕	口縁部	11.9	13.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1817	553	甕	口縁部	14.9	11.4	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	非常に良
第1818	553	甕	口縁部	13.8	15.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1819	553	甕	口縁部	17.8	15.5	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1820	553	甕	口縁部	18.4	15.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1821	553	甕	口縁部	14.8	16.3	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	やや不潔
第1822	553	甕	口縁部	16.2	16.0	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1823	553	甕	口縁部	18.9	16.4	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	非常に良 外周に傷付き
第1824	553	甕	口縁部	18.0	11.0	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1825	553	甕	底蓋	12.4	13.8	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	裏面
第1826	553	甕	口縁部	16.5	125.1	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1827	553	甕	口縁部	13.4	16.9	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1828	553	甕	口縁部	12.0	13.0	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	不潔
第1829	553	甕	口縁部	15.8	16.1	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1830	553	甕	口縁部	15.4	15.7	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1831	553	甕	口縁部	15.0	15.4	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	外周に傷付き
第1832	553	甕	口縁部	15.8	13.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1833	553	甕	口縁部	14.4	12.7	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1834	553	甕	口縁部	12.1	12.1	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	裏面にケズリ
第1835	553	石灯籠	口縁部	14.4	16.4	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1836	553	甕	口縁部	13.4	16.1	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1837	553	高脚	胴部	13.0	14.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1838	553	甕	口縁部	16.0	16.0	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1839	553	甕	口縁部	12.7	17.2	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	
第1840	553	甕	口縁部	14.3	16.9	内口3コナダ 胴・ナメハク 内口3コナダ 胴・横方向ケズリ	1	赤褐色	良	









第2表 製塩土器観察表

調査番号	出土地点	部位	調査	粘土	色調	構成	備考
第35図1	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 一部にナナメハケ	指ナゲ	①	① 外外面ともに乳白色	良好 これのみ口徑大
第35図2	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコハケ		①	① 外外面ともに灰褐色	良好
第35図3	S802	口縁部	外) 指押えのみ 内) ヨコハケ		②	② 外外面ともに暗褐色	良好 口縁部に吹きこぼれ?
第35図4	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコナゲ?		①	① 外外面ともに灰褐色	良好
第35図5	S802	口縁部	外) ナナメに工具痕? 内) ヨコハケ		②	② 外外面ともに灰褐色	良好
第35図6	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコナゲ?		①	① 外外面ともに暗褐色	良好
第35図7	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 弱いヨコハケ		①	① 外外面ともに灰褐色	良好
第35図8	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 口縁に段		①	① 外外面ともに灰褐色	良好 口縁部に吹きこぼれ?
第35図9	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコナゲ?		①	① 外外面ともに暗褐色	良好 口縁部に若干の吹きこぼれ?
第35図10	S802	口縁部	外) 指押え 内) 工具痕		①	① 外外面ともに暗褐色	良好 口縁部に吹きこぼれ?
第35図11	S802	口縁部	外) かすかに輪積痕 内) 工具痕		①	① 外外面ともに灰褐色	良好
第35図12	S802	胴部	外) 調整不明 内) 一部ヨコハケ		①	① 外外面ともに灰褐色	良好
第35図13	S802	胴部	外) 輪積痕 内) ヨコハケ		①	① 外外面ともに暗褐色	良好
第35図14	S802	胴部	外) 調整不明 内) ヨコハケ		②	② 外面は灰褐色 内面は暗褐色	良好
第35図15	S802	口縁部	外) 指押え 内) ヨコナゲ?		③	③ 外外面ともに暗褐色	良好
第35図16	S802	口縁部	外) ナナメハケ? 内) 指押え		③	③ 外外面ともに暗褐色	良好
第35図17	S802	口縁部	内・外) ヨコナゲ?		④	④ 外外面ともに暗褐色	良好
第35図18	S802	口縁部	外) 調整痕が顕著に残らない		②	② 外外面ともに暗褐色	良好
第35図19	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコナゲ?		①	① 外外面ともに灰褐色	良好 口縁部に若干の吹きこぼれ?
第35図20	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコハケ		①	① 外外面ともに灰褐色	良好 口縁部に若干の吹きこぼれ?
第35図21	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコナゲ?		①	① 外外面ともに暗褐色	良好
第35図22	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコナゲ?		①	① 外面は暗褐色 内面は灰褐色	良好 口縁部に吹きこぼれ?
第35図23	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコハケ		①	① 外外面ともに灰褐色	良好 口縁部に吹きこぼれ?
第35図24	S802	口縁部	外) かすかに輪積痕 内) 工具痕		④	④ 外外面ともに暗褐色	良好 口縁部に吹きこぼれ?
第35図25	S802	口縁部	外) かすかに輪積痕 内) ヨコハケ		①	① 外外面ともに暗褐色	良好 口縁部に吹きこぼれ?
第35図26	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 未調整?		①	① 外外面ともに暗褐色	良好 口縁部に若干の吹きこぼれ?
第35図27	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 口縁内側に段		①	① 外外面ともに灰褐色	良好 口縁部に段の吹きこぼれ?
第35図28	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 弱いナナメハケ		①	① 外外面ともに暗褐色	良好 外面の調整が荒れている
第35図29	S802	口縁部	内・外) 調整痕が顕著に残らない		④	④ 外外面ともに暗褐色	良好 口縁部に若干の吹きこぼれ?
第35図30	S802	口縁部	内・外) 調整痕が顕著に残らない		①	① 外外面ともに暗褐色	良好
第35図31	S802	口縁部	内・外) 指押え		①	① 外外面ともに暗褐色	良好 瓶片全体が吹きこぼれ?
第35図32	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 工具痕		①	① 外外面ともに暗褐色	良好 外面全体が吹きこぼれ
第35図33	S802	口縁部	外) 指押え 内) 工具痕		①	① 外外面ともに灰褐色	良好
第35図34	S802	口縁部	外) かすかに輪積痕 内) 工具痕		①	① 外) 灰褐色 内) 灰褐色 一部暗褐色	良好
第35図35	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) 指押え?		①	① 外外面ともに暗褐色	
第35図36	S802	口縁部	外) 輪積痕 内) ヨコナゲ?		①	① 外外面ともに暗褐色	

※「法量」の各土器の数値の( )は「口径・底径」については推定値、「器高」については残存高を示す

※粘土 ①0.5mm以下の白色・褐色粒子を含む

②0.5mmから1mm程度の褐色粒子と0.5mm以下の白色粒子を含む

③0.5mm以下の褐色粒子を含む

④砂粒の混入が目立たない

※「備考」の口縁部の吹きこぼれとは粘土の上に黒色の痕跡が部分的に残るもの



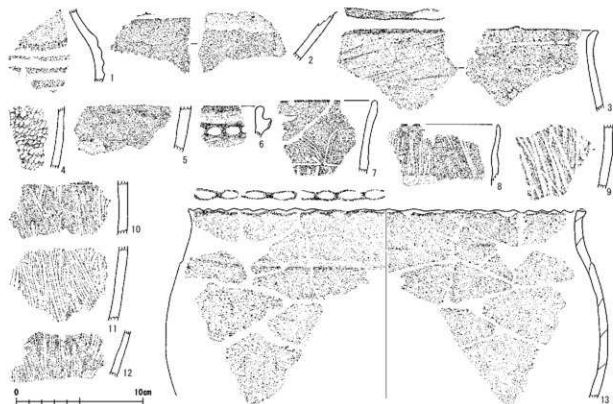
## 4 縄文土器

出土量はコンテナ1箱程度である。主体となる時期は晩期後葉であり、後期後葉の資料もわずかに含む。主な出土箇所には、SD35(第36図2・5・7~13)とSR02(第36図1・3・6)があるが、遺構の主体時期ではないため、すべて混入品とみなされる。以下、これらを一括して扱い、各個に説明する。

1は深鉢であり、胴部上方に横走る3条の凹線を施す。凹線の下端線に単位的な巻貝腹縁圧痕文を加える。2は浅鉢であり、上方に横位沈線が認められる。胎土に微細な砂粒を多量に含む。4は深鉢胴部であり、節内部に繊維痕が残る縄文LRを施す。5は深鉢胴部であり、外面に横位ナデを施す。6は壺の口縁部であり、指による楕円形の連続押圧を施す貼付突帯をもつ。口端部は丸みを帯びる。

3・7~13は胴部を中心に縦位条痕を施す無文粗製深鉢である。縦位条痕施文後、口縁部に板状工具などによる横位ナデを施し、条痕をナデ消すことで無文部とする例(3・7・13)がある。3は胴部上方が内傾し、口縁部下半が直立ぎみで、同上方がやや外反する器形を呈す。口端部にはナデを施し、部分的に押圧状となる。内面には輪積痕とともに沈線状の浅い工具痕が残る。7は口縁部が直立し、口端部は丸みを帯びる。口縁無文部と縦位条痕部の境には、条痕原体による浅い横位沈線を施す。口縁無文部には同原体による逆「U」字状文を連続して上下2段で施す。この文様を構成する各条線は、極めて細浅で、条線間は半隆起線状にやや盛り上がる。施文順は横走沈線後、逆「U」字状文となる。8は頸部がわずかにくびれ、口縁部が直立し、口端部はすぼまる。9~12は胴部である。13は唯一、器形復元できた例である。3と同様な器形を呈す。口径が胴部より小径となる。口縁端部に指による楕円形の連続押圧を施す。口頸部境に浅い横位走沈線を施し、口縁無文部と縦位条痕の境界とする。

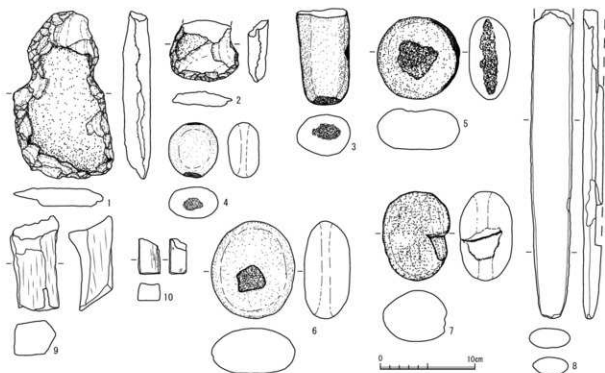
これらの編年の位置は、1が後期後葉の井ノ口式等の凹線文系土器群、2はおおむね晩期後半、4は後期後葉から晩期前半、5は晩期中葉、3・6~13は晩期後葉にそれぞれ位置づけられる。



第36図 縄文土器実測図 (縮尺1/3)

## 第2節 石器・石製品(第37図)

1・2は打製石斧である。1は両側縁の中央が抉られ、基部が張り出している。2は基部を欠損している。3・4は敲石である。3は棒状の石の先端部に敲打痕が見られる。4は小型の円形の石で長軸方向の先端部に敲打痕が見られる。5・6は回み石で表面に敲打痕が見られる。また、5の右側縁にも敲打痕が見られる。7は磨石で表面に擦痕が見られる。8は石剣である。頭部を欠くため全長は不明である。また、前部も僅かに欠く。断面はレンズ状である。9・10は砥石で中砥と考えられる。9は断面が五角形を呈し、上下端以外は砥面で各面ともよく使い込んでいる。10は小振りな砥石で右側面に成形時の鋸痕がある。表面中央が緩やかに凹む。



第37図 石器・石製品実測図(縮尺1/4)

第3表 石器・石製品観察表

挿図番号	器種	遺構	層位	法量				石質	備考
				長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g		
第37図1	打製石斧		表土	17.1	11.1	2.9	510	安山岩	
第37図2	打製石斧	SP76		6.5	7.3	2.1	100	安山岩	
第37図3	敲石	SR02		10.2	5.6	4.4	410	安山岩	
第37図4	敲石	SD56		5.8	5.2	3.3	130	砂岩	
第37図5	敲石	SR02		8.8	8.8	4.3	460	安山岩	
第37図6	敲石			10.3	8.8	4.3	600	安山岩	
第37図7	磨石		表土	9.4	6.2	5.5	450	安山岩	
第37図8	石剣	SR02	川底	32.9	4.5	2.2	465	緑泥片岩	
第37図9	砥石			10.0	5.1	4.6	240	砂岩	
第37図10	砥石		表土	3.7	2.3	1.8	20	凝灰岩	

### 第3節 木製品(第38図～第41図)

木製品としては曲物など機能や用途が特定できたものもあるが、その多くが加工痕はあるものの杭などの加工材や何らかの一部としか判断できないものが多い。

墓壙と考えたSK12からはその判断の理由となった木棺の残存部分の2点(第41図1・2)を図化した。弥生時代から古墳時代前半の土器を出土したSD53からは、縦櫛(第38図5)の他は板材や角材など(第40図4、第41図6～8)の5点を図化した。墨書土器などが出土した古代と特定できるSD60からは曲物底(第38図1)と杭(第40図7)の2点を図化した。その他の37点は全て下層では主に弥生時代から古墳時代前期の土器を、上層では主に古代の須恵器を出土したSR02からの出土であり、出土状況からは時期の特定はできない。

曲物の底板と考えられるものは2点あり、径が20cmを超えるもの(第38図1)と、20cmを越えないもの(第38図2)があり、前者は厚みが1cm近いが、後者は0.5cmと半分以下の厚みである。2点は両面とも凹凸が明瞭に残る。使用の頻度が高いためと考えられる。また観察表ではミニチュア曲物の底の可能性を考えた小片(第40図8)があるが、一乗谷朝倉氏遺跡などの中世ではこれよりはやや大きい曲物が確認されている。珍味を入れたのではないとも考えられているが、古代におけるの類例はないので、ここではその可能性がある程度としておきたい。

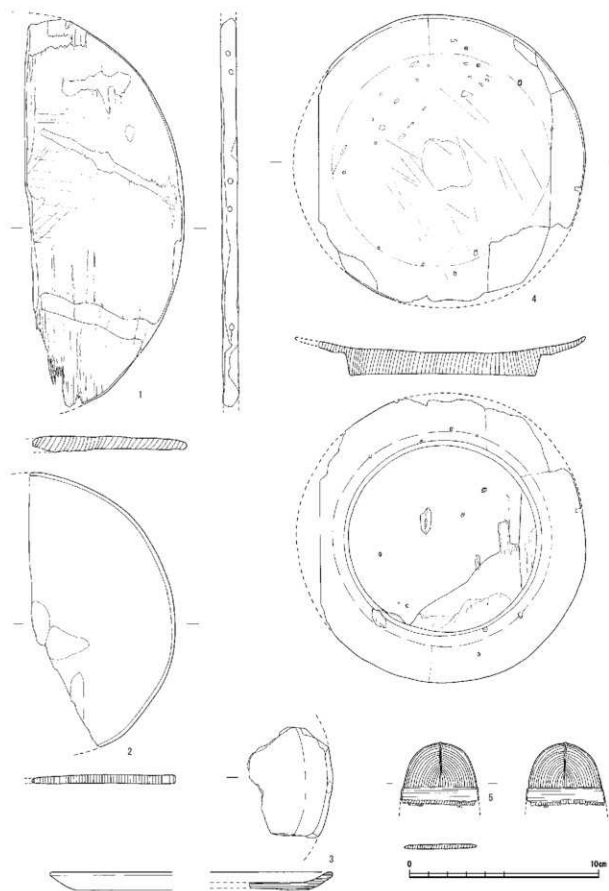
皿は復元される口径が15cmほどのもの(第38図3)が1点ある。底の中央部分を欠いた、口縁部付近の約1/6～1/8ほどの残存である。平安期に類例の多いものである。表では皿として取り上げたが、それ以外の可能性がある製品の部材が1点ある(第38図4)。皿とすると皿の底部となる高台部分の厚みが2cm近いのに対して、皿本体部分が5mm以下と薄く、不釣り合いである。また高台部分から皿本体へつながる部分(皿であれば皿の立ち上がり部)が一度平坦面となって、緩く立ち上がってから皿の縁となる。つまり皿の底に6mm前後の平坦面を明らかに作り出しており、単なる皿であればこの工程は必要のないものである。この面をわざわざ作り出していることから、何らかの組物の部材の可能性もある。また不規則で人工的にあけられたかは特定できないが、10カ所近い孔の存在も考慮しなくては行けない。

縦櫛(第38図5)は歯を根元部分から欠き結東部のみが残されている。細長くした竹などを糸または紐のようなもので束ねて、その上に黒漆を塗布したものと考えられる。

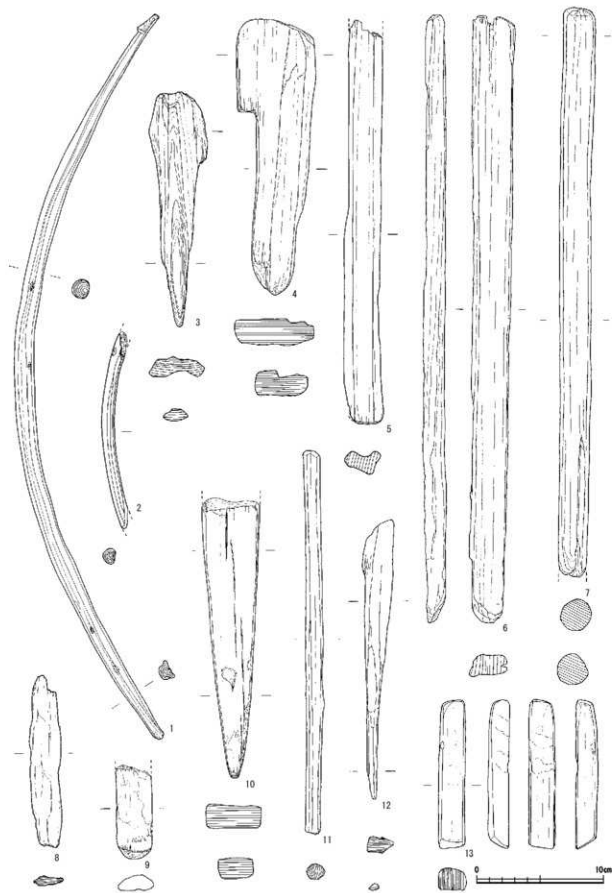
白木の弓と考えられるものがやや大きいもの(第39図1)と、小ぶりのもの(第39図2)がある。いずれも弓の太さが1.0～1.5cm程度と0.8～1.3cm程度と細く、弓の長さも武器や狩猟用の実用品とするには小さい。いずれも弓端の一端が残り、その反対側は欠損する。やや大きいものは弓端が突起し、小ぶりのものは貫通はしていないが、2カ所が孔のように窪んでいる。

藁玉のような平面形の木片があり、やや大きいもの(第40図12)と小さいもの(第40図10)である。いずれも加工によってこのような形状になったと考えられるが、その目的や何の製品・部材かは不明である。これに近い大きさで炭化と摩滅のためか元の形状が判断付きにくい、囲炉裏で鍋などを吊るす鉤のような機能が想定できる木片がある(第40図11)。どこまでが本来の部分を残しているかは判断しがたいが、ふくらみのある反対側が突起は欠損しているようで、本来はさらに大きかったと考えられる。

何らかの把手のような機能が想定できるもの(第40図20)は、目立った欠損部分がないので部材としては完結しているであろう。上端部が円弧となる上に径1cmほどの孔が中央に、下端部が直線となる下側に径2mmほどの孔がやや端によってあけられている。この孔との中間、下から1/3の部分がややくびれていて、この部分が何らかの境目となったと考えられる。丸太材ほど太くはないが、直径3～4cmほど

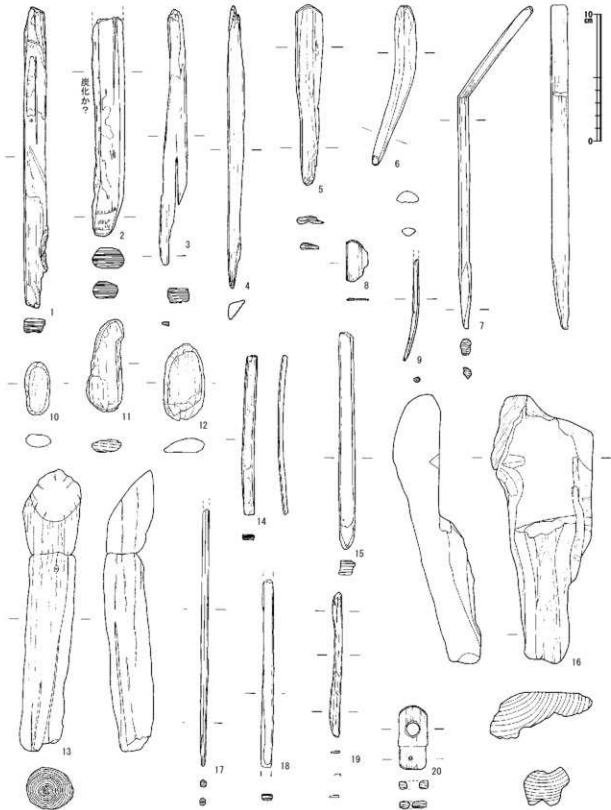


第38圖 木製品実測図1 (縮尺1/3)



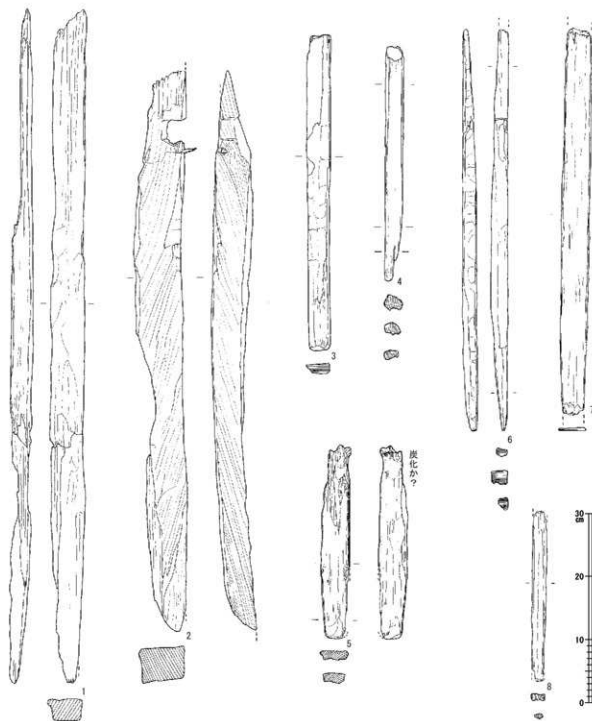
第39圖 木製品実測図2 (縮尺1/3)

の棒を真横に切斷したもの(第40図13)は、その節断面が長軸に対してほぼ水平で、明らかにこのような切斷を意図したものと考えられる。



第40図 木製品実測図3 (縮尺1/3)

最初に述べたようにSK12を墓塚と判断した理由となった木棺の棺材の一部と考えられるものは2点ある。長いもの(第42図1)は長さが106.8cmあるが、両端を欠き、さらに残された全体が2/3と1/3で折れている。腐食が著しく進行したためか、厚みは均一ではない。もう1点のやや短いもの(第41図2)は長さが89.1cmとやや短い、一端が杭のように三角に尖り、本来の形状が残されている可能性がある。その反対側の残された端近くの側面に、幅4cmほど、奥行き2.5cmほどが長方形に削り貫かれて凹状に加工されている。この部分が棺材として必要なものか、または何らかの製品の一部分であったものかは判断



第41図 木製品実測図4 (縮尺1/6)

できない。明確な工具痕は残されていないものの、側面の四面に平坦な面があり、明らかに手が加わったことが判る。

ここで取り上げたものの他に、長方形の断面に整えられた杭の先端のようなもの(第39図10)などや、ヘラ状のもの(第40図14・15)などもある。この他にも単なる加工木のようなものもあるため、以下の観察表としてまとめた。

第4表 木製品観察表

図版番号	遺構名	品名	樹種	法量 (cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
第38図1	SD60	曲物底	ヒノキ	21.0	8.0	0.7	砥目。1/3残存。
第38図2	SR02	曲物底	スギ	15.0	7.5	0.6	砥目。1/2残存。
第38図3	SR02	皿	ケヤキ	5.8	4.5	0.4	皿の一部。漆無し。
第38図4	SR02	皿	ケヤキ	15.6		1.6	ろくろ跡。漆無し。
第38図5	SD53	壺棚	タケ亜科	3.2	4.0	0.2	黒漆塗り。歯面欠く。
第39図1	SR02	丸木弓	カヤ	54.0	1.8		一方弓端残る。内側に幅3mmほどの筋切り。
第39図2	SR02	弓?	カヤ	15.5	1.5	0.7	内側は面取り。
第39図3	SR02		ヒノキ	18.2	4.5	1.6	割り材片を穿らしたものの
第39図4	SR02	板材	スギ	21.8	6.3	2.1	割り材。漆の未成品?
第39図5	SR02		スギ	32.0	2.7	1.7	断面不整形で、一面凹む。
第39図6	SR02	角材	スギ	48.5	2.8	2.1	厚さ2.8cmの材を二つに割った片方のみ。
第39図7	SR02	丸棒	スギ	45.0	2.4		柄?一端残る。
第39図8	SR02		スギ	15.0	2.3	1.0	木っ端。皮面あり。
第39図9	SR02	柄	ヒサカキ属	7.3	3.7	1.0	中央に筋凹み。
第39図10	SR02	板材	スギ	22.0	4.5	1.8	板目。
第39図11	SR02	棒材	スギ	30.4	0.8		断面隅丸方形。
第39図12	SR02		アスナロ属	22.2	2.0	1.7	割り材を穿らしたものの。先端焦げ跡。
第39図13	SR02		スギ	11.6	2.0	1.7	
第40図1	SR02		スギ	19.0	2.0	0.5	棒状。一部に漆塗り跡?
第40図2	SR02	加工木	ヤマダブ	12.0	3.5	1.5	断面楕円。先端に加工跡。焦げ跡。
第40図3	SR02		ヒノキ	20.3	2.2	0.7	焦げ跡。一端が二つに割れる。
第40図4	SD53	割り材片	スギ	22.2	1.7		断面三角。
第40図5	SR02	加工木	アスナロ属	14.2	2.3	0.6	へぎ板の一端を山形にカット。
第40図6	SR02	加工木	ヒノキ	13.0	1.6	0.8	へら状。
第40図7	SD60	杭	ヒノキ	27.6	1.2	0.7	割り材の先端を尖らす。
第40図8	SR02	ミニチュア曲物?底	ヒノキ	3.5	1.9	0.2	砥目。1/3残存。
第40図9	SR02	箸?	カヤ	4.6	0.4		
第40図10	SR02	加工木	ハンノキ属	4.2	1.8	1.8	小鴨状。
第40図11	SR02	加工木	スギ	7.0	2.8	1.2	鉤か?火を受けて一部炭化?
第40図12	SR02	加工木	クルミ属	6.0	3.4	0.7	小鴨状。
第40図13	SR02	棒材	ヤブツバキ	13.6	3.7		丸材。枝の太さのまま。(2つに折れる)
第40図14	SR02	小棒	ヒノキ	8.0	1.0	0.3	少し曲がる。
第40図15	SR02		スギ	12.0	0.7	0.7	一つの角はきれいな直角。焦げ跡あり。
第40図16	SR02	加工木	ケヤキ	21.5	8.0	4.5	のこぎり跡。
第40図17	SR02	箸	スギ	20.4	0.6		一端尖る。(一方は折れる)
第40図18	SR02	箸?	スギ	10.0	0.7	0.5	両端欠く。
第40図19	SR02	へら?	カヤ	11.4	0.9	0.2	へら状
第40図20	SR02	把手?	スギ	5.0	2.3	0.7	一端が丸く、中央付近に径0.8mmの穿孔。
第41図1	SK12	木棺長側板	スギ	106.8	5.9	3.0	両端欠く。
第41図2	SK12	木棺長側板	スギ	89.1	7.3	5.9	凹部あり。一端を欠く?
第41図3	SR02	角材	スギ	50.7	3.6	2.2	一面に細かい手件跡。断面は台形状
第41図4	SR02	角材	スギ	37.8	3.6	1.5	
第41図5	SR02	角材	コウヤマキ	30.0	4.5	2.5	割り材。小さい筋。焦げ跡あり。
第41図6	SD53	小角材	スギ	62.4	3.6	2.2	割り材の先端を尖らす。1面に腫れ跡。
第41図7	SD53	板材	スギ	62.5	4.4	0.5	層板材?
第41図8	SD53	小角材	スギ	26.9	2.0	1.1	両端欠く。



## 第5章 まとめ

本遺跡は調査の経過でも述べているように、ほぼ南北の調査区約400mの東西両側、新幹線に沿う市道部分を市教委が平成10年～16年にかけて発掘調査している。今回の調査区では弥生時代後期から古墳時代前期の古式土師器などが出土したSD53～56や、その南の古代の須恵器が出土したSD59～61などの溝は、調査区の北側に集中し、市教委の調査で四隅突出墓や円墳(いずれも大きく削平されて周溝のみ)が検出された調査区の南側では、遺構がほとんど検出されなかった約130mの低湿地帯を挟んで大きく離れている。ここではSD53～56とSD59～61の溝がある部分を北調査区、市教委の調査で古墳などの周溝に囲まれ、木棺墓と想定されたSK12やSR02などの部分を南調査区と呼び分ける。ここで報告するものと市教委の調査内容<sup>(1)</sup>も併せて検討する。

\*SD00は本報告で使用している遺構番号、SD-F00・SK-F00(一の後のF=アルファベットは調査区<sup>(2)</sup>の記号)は市教委調査報告の遺構番号である。

### 第1節 弥生時代後期から古墳時代前期について(第42図)

#### 1 出土した土器から判断した遺構の時期について

北調査区の西側は市教委第8次、東側は第11・13次調査区で、報告書では併わせてF地区としている。今回報告したSD53～56の4本の溝につながると考えられる溝が検出され、ほぼ同じような時期の土器が出土している。またやや離れた東側では、店舗建設に伴った東西約50m、南北約23mの長方形の調査区がある。ここでは市教委東側の調査区(第11次調査)で検出されていた溝SD-F03が検出されていない。溝の中でも比較浅かったので、上流に当たるこの調査区ではすでに削平されてしまったのか、SD-F02に合流したかと、市教委報告書には記載されている。

今回、152点と最も多くの土器を図化したSD53は調査区の北に位置し、その北側にはピットが多数検出され、掘立柱建物が1棟復元されている。SD53は市教委調査のSD-F01に当たるが、この溝の南北両側で掘立柱建物が数棟検出されている。掘立柱建物の柱穴から古式土師器が出土し、また井戸と考えられるSK-F01からは古式土師器とともに木製の腰掛が出土している。この他の土坑などからも同じような時期の土器が出土していることから、SD53の周辺は弥生時代終末から古墳時代前期の居住域と考えられる。しかし東側の店舗建設に伴う調査区では、古代の須恵器を出土する土坑などがあることから、SD53の南側には古代の居住域があった可能性が高い。本調査区の南端のSD60・61や西側の市教委SD-F05では、古代の須恵器が出土していることから、北調査区でも南へ古代の活動域が広がっていると考えられる。また市教委SD-F01出土の土器には、3点と少ないが古墳時代の須恵器が報告され、同時期と考えられる甕や甔なども複数出土している。文中にも上層で古墳時代中期の土器が少ないながらも出土しているとの記載もある。このことからSD53から出土している土器の中にも、古墳時代の須恵器こそ確認されていないが、この時期と判断される甕が2点ある。本文中でもその時期の可能性を指摘したが甕(第18図11)と、記述では壺の範疇にふくめた「甕」(第7図21)である。SD53の上限となるのは月形式の時期で大きな違いはないが、その後続く布留式土器の時期はやや様相が異なる。SD53出土の甕は布留式以前の「く」の字甕や、内面の肥厚が明瞭な布留式でも前半段階の甕(第19図7・8・14など)であるが、市教委SD-F01出土の布留甕は肥厚そのものが丸くなったたりする退化した肥厚の布留甕である。市教委調査区<sup>(2)</sup>のどこから出土したか明記されていないため確実ではないが、北側に接する市教委調査のG地区(第17・22

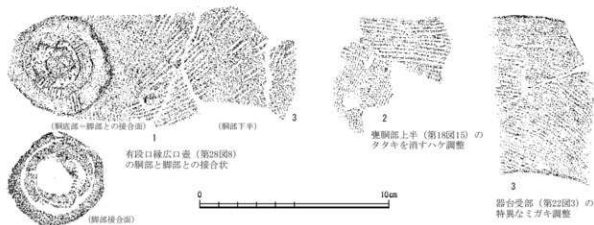
次調査区)SD-G01からも同様に肥厚が退化した布留甕が多数出土していることから、古墳時代中期以降の居住域が、SD53の北側で継続していることが考えられる。SD56や市教委SD-F04では図化された土器が少ないが、いずれも月影式でも後半段階の甕(第16図27)に限られ、検出された弥生時代から古墳時代の溝のなかでも時期幅が短い。このSD56と最も図化された土器が多く時間幅もあるSD53との間のSD54(市教委SD-F02)とSD55(市教委SD-F03)は、先の2本の溝よりも古く、SD54は月影式後半まで降る甕(第3図5)もあるが、市教委SD-F02にやや古手の土器もあることから、SD53に若干ではあるが先行する時期の溝である。溝の中で最も古いのは長頸壺(第3図19)などがあるSD55で、市教委SD-F03では口縁の有段が直立する月影式でも前半の甕が多数あり、法仏式と呼ばれる時期まで遡る可能性もある。

一方、南調査区の西側は市教委第1次、東側は同第25次調査区で、報告書では合わせてB地区としている。ここでは自然流路のSR02が大半を占め、その北側の市教委の調査でも検出された周溝墓などがあるが、SR02の東側の市教委の調査ではこの流路(市教委SD-B01・B02)に削れなかつた周溝を伴う建物(市教委SH-B01と市教委SH-B02)が確認されている。この建物は円墳(市教委ST-B09)の周溝によって切られており、南側調査区が弥生時代後期末以降に墓城となるが、居住域が次第に墓城になるのはこの時期の一般的な集落・墓城の変遷である。しかし墳墓群で出土した同じ時期の土器がSR02からも出土し、墳墓出土の土器と建物の周溝から出土した土器に大きな時期差はない<sup>(3)</sup>。居住域と墓城が次第に離れつつあるこの時期に、両者が近接しているのは珍しく、土器の出土状況や詳細な土器の時期差を検討する必要がある。

## 2 特異な成形・調整の古式土師器について

今回、報告する古式土師器にこれまで確認できなかった、または珍しい成形・調整を確認した土器が3点ある。まず台付有段口縁広口壺であるが、この土器は九頭竜川水系の遺跡で多くが確認されていることは、本文中ですでに述べている。しかし、脚台と胴部の接合については明確には確認できていなかったが、今回報告した有段口縁広口壺(第28図9)は、接合が不十分であったためか、胴部と脚部の接合面できれいに外れていたため接合状況がよくわかる。やや突出した胴底部と脚の接合面に刻み目を入れて接合し、さらに脚の外から粘土紐を輪にして貼り付けて充填したのちに、指押さえとナデで輪積み痕を消している(第43図1)。

2点目は甕胴部上半(第18図15)で、タタキ調整をハケで消しているが、頸部付近のみハケが及ばないでタタキを残している(第43図2)。



第42図 特異な成形・調整の土器微細図(縮尺1/2)

3点目は器台(第22図3)の受部外面をナナメにハケ調整して、そのハケ目に沿ってミガキを行っている。つまりハケ目とハケ目の間をミガキ調整して、意図的にハケ目を消さないで残している(第42図3)。以上本文では特に触れなかったが、これまで類例を確認していないのでここであえて取り上げた。

## 第2節 古代の土器と本遺跡の位置付け(第43図～第46図)

### 1 高柳遺跡出土の墨書土器について

今回調査で北調査区から30点(第26・27図)、南調査区から35点(第31・32図)の墨書土器が出土した。ここではすでに報告書が刊行されている市教委の調査成果と合わせて概観する。

北調査区のSD59～61からは26点の墨書土器と、墨痕が大量に付着した5点(うち1点の第27図1の境は内面に墨痕、底部外面に「田」の墨書)がある。点数が多いのはいずれも底部外面に大きく「吉」の一文字が書かれたもの6点(第26図3・6・9・10・15・17)である。人名か地名か判断がつかない「綾生」が3点(第27図3・4・10のうち第14図10が上の字の2/3を欠くため推定)ある。「十」が2点(第27図2・7)あるが、1点(第27図2)は内面にも外面にも「十」が書かれている。この他は1点のみで、小さい文字で「楽女」の墨書は、名前もしくは楽舞する女性を示すのではとの指摘<sup>(4)</sup>もある。SD59・60・61に相当する溝は市教委調査区でも東側では検出されておらず、西側の調査区のSD-F05が相当する。この溝からも墨書土器は7点出土しているが、「真口万呂」「野太」「国太」「角」などで同じ文字は確認されていない。墨痕が大量に付着したのは高台の外表面だけのもの2点(第26図7・8)、高台の外表面に加え内面にもあるもの(第27図8)や内面にあるもの(第27図1)が1点ずつで、皿の内面に加えて高台の無い底部外面にも残されているもの(第27図6)もあり、その使用のされ方が判らない。

南調査区ではSR02から34点の墨書土器と、壺または瓶類の高台外面に墨痕が残る1点(第32図11)がある。市教委東側の調査区ではSR02に相当するのはSD-B02で、この溝からは56点もの墨書土器が出土している。点数が多いのが「本」の一文字であるが、いずれも底部外面全体を占めるような大きな字(第31図13、第32図10)と、底部を越えて側面にまで及ぶもの(第32図5)の3点で、北調査区の「吉」一文字と同じ傾向を示す。「中家」が2点(第31図2・10)あるが、いずれも同筆と思われる。「中家」は市教委でも1点(市の報告書第66図219)出土しているが、文字が太く同筆とは思われない。

これまで出土した墨書土器について概観してきたが、最後に最も注目した「加津」の墨書について述べておきたいことがある。「加津」の墨書は北調査区のSD61で1点(第26図1)と、北に隣接する市教委調査G区のSD-G03で同筆とは思われないが2点(市教委報告書第168図943・944)出土している。さらに南調査区のSR02で1点(第31図1)と、東の市教委調査B区のSD-B02でも1点(市教委報告書第65図212)の合計5点も出土している。この「加津」の「津」は川澳、もしくは渡渉の川船の泊を示していると考えられるが、頭につく「加」をどのように考えるかである。今回は溝資料であったためこの土器や遺構の時期を特定しなかったが、SD61そしてSR02の須恵器は8世紀末～9世紀前半とのことである。もし「加津」の墨書が記載された須恵器の時期が9世紀前半とすると、この時期の北陸では大きな出来事があった。それは弘仁十四(823)年に全国でも最後となる分国が行われ、越前からあらたに加賀が成立したことである。九頭竜川は越前で最大の河川であり難所であったろう。これを渡って加賀へ行く渡渉点、または渡渉のための船着場の意味と解釈することも可能である。以上、これはあくまで推論に過ぎないので、墨書土器に関する記述はここまでとする。

## 2 内陸部で出土した製塩土器について

高柳遺跡では内陸部の遺跡にもかかわらず小片ばかりであるが製塩土器が出土した。これまで福井平野の内陸部で製塩土器の出土を確認したのは、勝山市猪野口南福道跡や荒土町杉原遺跡など九頭竜川を遡った奥越盆地北部の白山平泉寺に関連すると想定される遺跡を除くと、和田防町遺跡や兼乗・坪江遺跡など官衙的な遺跡が多い。ここでは諸般の事情で報告書に掲載されなかった製塩土器を図化するとともに、高柳遺跡で製塩土器が出土した意義を検討したい。

**和田防町遺跡**(第44図) 和田防町遺跡は高柳遺跡から南へ約7km離れた足羽川水系の遺跡である。底付きや大型の掘方の柱穴を持つ建物が確認され、多数の墨書土器や灰釉陶器・緑釉陶器に土馬なども出土し、古代の足羽郡衙に関連する遺跡と考えられる。1987年に刊行した報告書では7点ほどが図化されているが、この他にも図化できるもの(第44図1~18)を確認した。ここでは報告されている7点に加えて、さらに11点を加えた18点を図化した。高柳遺跡の製塩土器と同じように口縁端部の形状で分類すると、口縁上端面に小さいながらも明らかに平坦面を有するもの(第44図1~5)が5点ある。口縁部近くに段を有するもの(第44図15)は1点だけである。その他は先細りさせる口縁端部となるもの(第44図6~10)と、先細りはするが全体に口縁部で膨らむもの(第44図11~14)である。成形・調整は外面を指押さえか弱いヨコナデで、輪積み痕を残すもの(第44図9・11・13・14・17)も多く、その輪積痕の幅は1.0~1.5cmである。胎土に個性差はあるが、ほぼいずれの破片でも0.1~0.2mm程度の非常に小さい黒色



第43図 福井平野周辺で製塩土器が出土した内陸部の遺跡と周辺の製塩遺跡(縮尺1/300,000)

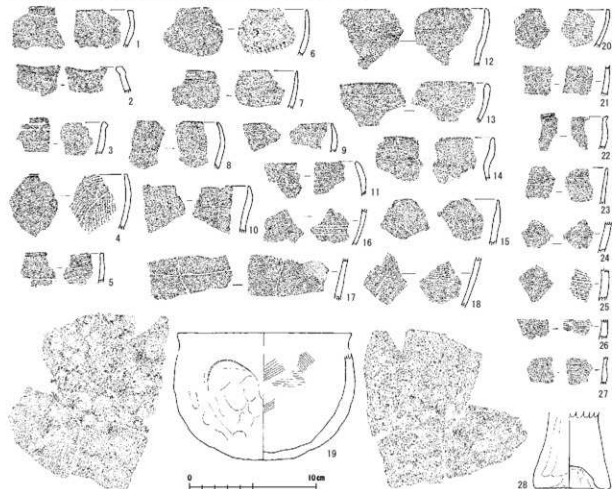
と白色の砂粒が含まれている。色調は赤味の強い褐色(第44図15など)か、やや赤味のある肌色(第44図3・10など)が本来の色調と考えられるが、半数以上が吹きこぼれや煤などで黒くなっている部分のものが多い。焼成は色調に関わらず、良好である。このように見てみると高柳遺跡の製塩土器と非常に類似するとも言える。

**今市岩畑遺跡**(第44図) 今市岩畑遺跡は高柳遺跡から南南西に約9km離れた福井市南部の遺跡で、遺跡の西端で古代北陸道と想定される道路遺構が検出された(調査した市教委は今市遺跡で報告書を刊行)。こちらでも確認できた破片数は5点と少ないが、薄手の製塩土器が出土している。確認した破片は小さく、残りも悪くあまり情報をえることができない。

**持明寺遺跡**(第44図) 持明寺遺跡は高柳遺跡から南南西に約18km離れた、鯖江市西部の日野川水系の遺跡である。遺構はビットなどが検出されているが、明確な建物としては認識できず、溝や自然流路から須恵器が多数出土している。須恵器には「入加万」などの人名、「富成」などの吉祥句、「里寺」などの施設名?「石田口万」「田中」など付近にある地名と関連するもの、そして「長」「里長」なども出土するなど、一般的な集落遺跡ではない様相である。しかしこの付近に官衙関連の遺跡を想定でき

る根拠はなく、この遺跡の性格は不明である。ここでも製塩土器(第44図19~28)が出土している。2008年に刊行した報告書では、諸般の事情から製塩土器は写真だけで、実測図等は掲載することができなかった。ここであらためて図化できている土器を呈示したい。

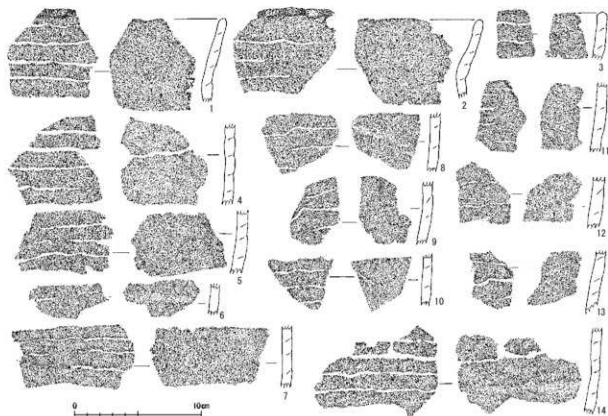
図化した製塩土器は形をある程度復元できたもの1点と小片8点、支脚1点である。形が想定できるもの(第44図19)は、口縁部は無いが底部を中心として全体の1/3近くはあるものと思われる。想定される口径は14~16cm、器高は10cm前後と小型である。輪積痕などを残さないが、外面には指押えを全体に粗く残し、内面には部分的にハケ調整を行う。胎土に1mm弱の褐色や灰色・白色の砂粒を含む。色調はやや赤味がかかった部分もある明るい肌色を呈する。焼成も良好である。小片は口縁部4点、胴部片4点である。口縁部は端部に面をもつもの3点(第44図20~22)、口縁部を先細りさせるもの1点(第44図23)である。胴部片はいずれも内面前面(第44図25~27)、または一部(第44図24)にヨコハケ調整がある。器壁は2~3mm程度を基本とするが、1点だけ6mmと倍の厚みとなる破片(第44図25)があり、この破片は他の胴部片のハケよりかなり粗いハケである。色調は胴部片の4点(第44図20~23)が赤味の強い赤褐色、口縁部の4点(第44図24~27)がやや薄目の肌色を呈し、二次焼成による違いとも考えられる。さらに製塩に用いられた可能性が高い支脚の下半分が出土している(第44図28)。外面はタテの指ナデまたは指押えで、底を円錐状に弱く削って2cmほど中空としている。胎土は製塩土器とは異なり、1mm前後の灰色・白色の砂粒を目立つように含む。断面からすると本来の色調は赤褐色だったが、表面が剥落したのか肌色の部分が多い。焼成は製塩土器ほどではないが良好である。



第44図 和田防町遺跡・持明寺遺跡出土製塩土器実測図(縮尺1/3)

**乗兼・坪江遺跡** 乗兼・坪江遺跡は高柳遺跡の北約9kmの坂井平野東端に位置する遺跡で、若干の縄文時代と弥生時代の土器を出土するが、7世紀代の飛鳥時代に突然と集落が出現する。その後、8世紀半ばに集落は中断するが、8世紀後半からは掘立柱建物が整然と並ぶ官衙的な様相を呈する。調査地の北側(3区)で幅約1m強、深さ0.4~1.0mの溝2条が南北に並行して検出されている。溝の間は約6mを測り、古代の道路跡と考えられる。調査区外の北に続く溝は、調査区内で40mほど直線に伸びて、溝の間を直交してクランクして、1条の溝がさらに南に40m弱伸びる。その先は調査区外となり、南に100mほど離れたトレンチ状の調査区(1区)では検出されていない。この道路状遺構に直交すると思われる溝SD01が、南東の調査区(2区)の中央で約20m弱の長さが東西に検出されている。溝の幅は南北に6~7m、深さ1mほどを測る。この溝も道路状遺構の2条の溝からも、中世の遺物は出土しておらず、飛鳥時代の土器も出土しているが平安時代の土器も出土しこの時期で埋没したものと考えられる。溝SD01から須恵器の浄瓶・稜坑・円面碗、瓦や羽口とともに製塩土器と考えられる破片が出土している。

**御簾尾遺跡**(第45図) 御簾尾遺跡は高柳遺跡の北約11kmの坂井平野北東部に位置する。8世紀後半部片とも土器そのものの湾曲は同じで、想定される口径に大きな差はないと考えられる。この14点の4破片に共通する特徴はどの破片も製塩土器とするには非常に焼成が悪く、土器として製作後に製塩土器として利用さ半から9世紀中頃の須恵器が出土し、掘立柱建物が21棟復元されている。この掘立柱建物の周辺の包含層から製塩土器が出土している。この遺跡はすでに報告書が刊行されており、「水尾駅」の「水」の墨書土器が出土している。報告書のまとめでは「越前国司解」の天平神護二(766)年を最後に「桑原駅」に関する記事が見えなくなり、その後成立した「三尾駅」がこの遺跡である可能性を指摘している。馬の飼育には大量の塩が必要とされていることから、製塩土器の出土は偶然ではあるまい。高柳



第45図 御簾尾遺跡出土製塩土器実測図(縮尺1/3)

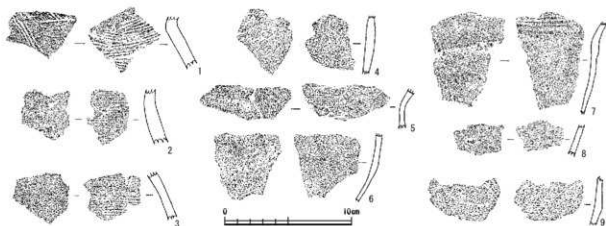
遺跡などのように薄手で小型の製塩土器は図化していないが、すべての土器を確認したのではなく偶然に見つけることができた破片のみなので、未確認のものがある可能性はある。

この製塩土器は、高柳遺跡やこれまで見てきた和田防町遺跡・持明寺遺跡、さらにこの後に取り上げる細呂木阪東山遺跡や三里浜で採集された土器とは異なり、厚手の大型に復元される製塩土器である。幅1cm強の輪積痕を残し、器壁の厚みも6～8mmもあり、口径が40cmを超えると思われる。このような土器は越前では確認されていないが、同じような作りの土器は若狭の製塩土器でも大型となる船岡式の特徴で、想定される口径も近いと考えられる。船岡式製塩土器は現段階では8世紀代とされ、その後に続く8世紀末から9世紀代は傾式となり、輪積痕は残すが口径は船岡式の半分以下となる。一方で越前とは加賀を挟んだ能登でも、8世紀以降に製塩土器が大型化するようで、口径が40cmを超えるものもあるが、8世紀後半以降は30cmを超えないようである。ここでは若狭の船岡式の系譜とするか、口径がやや大きい能登の製塩土器の系譜とするかを定めることはできない。製塩土器の系譜などは問題としないが、むしろ製塩土器が出土していること自体に大きな問題点がある。

図化した土器は14点(第45図1～14)あるが、明確な口縁部、またはその可能性がある破片は少なく3点(第45図1～3)だけである。そのほかの11点(第45図4～14)はいずれも胴部片である。口縁部と推定した破片、つまり2次焼成を受けたとは思えない軟質の胎土である。胎土には1mm前後の白色・灰色・褐色の砂粒を目立つように含むが、土器によってはこの砂粒が抜け落ちてしまうほど焼成が悪い。色調は燈褐色のもの(第45図6～12)や肌色のもの(第45図2・5)など明るい色調のものもあるが、暗めの灰色のもの(第45図1・3・4・13・14)もある。後者は製塩土器の色調としてはあまり見たことがない。

これまででは内陸部で製塩土器を出土した5遺跡について概要を述べてきたが、さらに敦賀を除く越前で高柳遺跡と類似すると思われる製塩土器を出土している遺跡の概要を述べておきたい。

**細呂木阪東山遺跡・樋山遺跡** 細呂木阪東山遺跡は高柳遺跡の北約19kmの汽水湖の北潟湖に面する製塩遺跡である。樋山遺跡は高柳遺跡の北約18km、細呂木阪東山遺跡から南東に1kmほど内陸に入り、現在は北潟湖から1km以上離れるが、細呂木阪東山遺跡と同じ標高の3mほどなので、遺跡の存続した時期には湖面に近かったと考えられる。両遺跡とも石敷きの製塩炉が検出されており、製塩作業を行っていたことは確実である。樋山遺跡から出土した土器は数点の弥生土器以外は、古代の須恵器がほとんどで製塩土器はこの時期と考えられる。支脚にはヘラ記号や「塩」の文字などが刻まれたものが多く、これまで知られている製塩遺跡には見られないものである。樋山遺跡では墨書土器は少ないが、細呂木阪



第46図 米納津遺跡・(仮称)浜割遺跡出土製塩土器実測図(縮尺1/3)

東山遺跡では多数の須恵器が出土したが、墨書土器も多く記号と思われるものが多い。「津」「長畝」などの墨書土器があり、特に「津家」は特殊な土器である後述に書かれており、遺跡の性格を考えるに重要であろう。

**川端遺跡** 川端遺跡は高柳遺跡から北北西に約18km離れた、直接日本海に面した加越丘陵下の砂浜を臨む標高15～16mの緩斜面に位置する集落遺跡である。発掘調査は40年前の1980年に行われたが、最近その報告書の代わりになるものが刊行された<sup>(12)</sup>。それによると製塩炉などは検出されていないが、方形の堅穴住居が8棟検出され、須恵器や土師器とともに製塩土器や支脚なども多数出土している。製塩に関わる人たちの居住域と考えられる。

細呂木阪東山遺跡・樋山遺跡・川端遺跡から出土した製塩土器の中には、高柳遺跡出土の製塩土器と非常に良く似たものもある。

**米納津遺跡**(第46図) 発掘調査はされていないが、筆者が過去に表採した破片に製塩土器と思われるものがある。3点あるがいずれも器壁が8mm前後と製塩土器としては厚い。1点(第46図1)は内面の小

第5表 福井平野周辺製塩土器出土遺跡製塩土器観察表

図説番号	遺跡名・出土地点	部位	調査	胎土	色澤	構成	備考	写真図説番号
第46図1	米納津	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好	口縁部に焼きこぼれ	
第46図2	第46図2	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	やや不良		
第46図3	第46図3	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好	口縁部に焼きこぼれ	
第46図4	第46図4	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図5	第46図5	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図6	第46図6	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図7	第46図7	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図8	第46図8	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図9	第46図9	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図10	第46図10	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図11	第46図11	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図12	第46図12	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好	口縁部に書きこぼれ	
第46図13	第46図13	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好	口縁部に焼きこぼれ	
第46図14	第46図14	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好	口縁部に焼きこぼれ	
第46図15	第46図15	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図16	第46図16	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図17	第46図17	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図18	第46図18	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図19	A1F30	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図20	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図21	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図22	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図23	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図24	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図25	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図26	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図27	A1F30小テ	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好		
第46図28	A1F30	支脚	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	良好	跡は土器より多い	
第46図29	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図30	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図31	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図32	H4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図33	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図34	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図35	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図36	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図37	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図38	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図39	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図40	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図41	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図42	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図43	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図44	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図45	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図46	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図47	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図48	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図49	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図50	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図51	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図52	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図53	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図54	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図55	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図56	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図57	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図58	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		
第46図59	C4E	口縁部	丸輪縁部 内口コウハク	②	内外面ともに灰褐色	不良		



刻みに行われるハケ調整が古代の土師器に多く見られることから、製塩土器の可能性は低い。残る2点(第46図2・3)は製塩土器の内面に多いヨコハケのみの調整で、この2点が製塩土器の可能性が高い。

(仮称)浜割遺跡(第46図) (仮称)浜割遺跡は周知の遺跡としては登録されていないが、ここでも筆者が過去に製塩土器を表採している。表採した6点(第46図4～9)に口縁部はないがいずれも赤褐色の色調で内面にヨコハケのみの調整があるもの(第46図5・7・8)もある。また輪積痕を残すもの(第46図7)もあり、胎土など様々な要素が高柳遺跡や和田防町遺跡の製塩土器に類似する。

### 3 製塩遺跡と高柳遺跡との関係

高柳遺跡の古代では内陸部に位置するにもかかわらず製塩土器が出土したことである。高柳遺跡で出土した製塩土器は1点(第35図1)を除き薄手の小型で、樋山遺跡や細呂木阪東山遺跡から出土した口径が20cm前後のものと同様の製塩土器と考えられる。この土器は海水濃度を高める採鹹作業に使用されたものではなく、さらに煮詰める煎煮作業に使用されたものと考えている。製塩炉が検出されている樋山遺跡や細呂木阪東山遺跡でも小型の製塩土器が主体であるが、あえて海水濃度が低い汽水湖の湖畔で採鹹作業を行ったとは考えられず、この2遺跡でもさらに煮詰める煎煮作業が主体で行われたのであろう。ここでは内陸で出土する製塩土器をどのように考えるかをここでの本題として、製塩の工程について検討することは別の機会とする。

越前では樋山遺跡と細呂木阪東山遺跡以外には製塩炉が検出された発掘調査は、越前海岸の段丘上に位置する厨海円寺遺跡のみである。この遺跡では製塩炉と思われる石敷きが10基以上検出されたが、出土した製塩土器は丸底で器壁も1cm以上と比較的厚く、調整なども内陸部で出土するものと明らかに異なる。この他では1977年に川端遺跡と藻取浜遺跡で行われた小規模な試掘調査以外は、民間事業で約1,000㎡足らずの緊急調査が行われた川端遺跡が製塩に関する発掘調査で唯一である。製塩遺跡が多くあったと思われる三里浜は、1970年代から開始された福井新港の建設によって日本海に面した海浜部はすでに失われ、平野部の遺跡について詳細分布調査が開始された1987年にはすでに遺跡の有無さえ分からなくなっていた。今回図化した米納津遺跡や(仮称)浜割遺跡の破片のみが筆者が知っている製塩土器である。このように高柳遺跡周辺では限られた資料ではあるが、本遺跡の製塩土器は現段階では三里浜か北潟湖周辺に近いと考えられる。高柳遺跡と細呂木阪東山遺跡をつなぐ要素が墨書土器にもある。細呂木阪東山遺跡では「津家」の他に、遺跡から南へ約12kmの現在も地名が残る「長畝」「長畝家」の墨書土器があり、離れた地域との関係が伺われる。「津家」の墨書から港湾施設が付近にある交通に関する遺跡と推定される。高柳遺跡では「加津」や、古代の足羽郡の有力豪族名である「生江」(市教委調査で出土)の墨書土器が出土し、こちらも交通に関する遺跡と考えられる。つまり「加津」の津は川渡、または河川の渡渉点を示していると考えている。先に製塩土器の出土地とした今市岩畑遺跡では、市教委調査で古代北陸道の可能性がある道路遺構が検出されたことを述べたが、古代北陸道の駅家のひとつである「朝津駅」の比定地でもある。今市岩畑遺跡と御簾尾遺跡とは直線で20kmとなり、古代の駅の間隔の基準とされる16kmに近い。この今市岩畑遺跡と御簾尾遺跡とを結んだ直線状に高柳遺跡は位置する。高柳遺跡は古代北陸道の九頭竜川の渡渉点であり、駅などではないが交通の要所として官衙的な施設があったと想定される。朝津駅推定地と三尾駅推定地の中間に位置することから、九頭竜川南岸のこの遺跡周辺に「足羽駅」があったのではないかと積極的な指摘もあるが、今回も含めて周辺の調査では「駅家」を想定できる遺構・遺物は確認されていないが、小字園などの検討が必要である。そのような立地の遺跡だからこそ、当時の貴重品であった塩の存在を示す製塩土器が出土したと考えられる。

## 4 高柳遺跡出土の人面墨書土器の意義

本県で初めて出土した人面墨書土器について、本文中でも不十分ではあるがやや詳しく述べた。人面墨書土器の出土したことでその意義を考えるには不十分である。本県以外の人面墨書土器について時間と紙面の許す限りここに一覧表とした(第6表)。

ここに集成した遺跡は合計12遺跡である。この中で埴生南遺跡は時期も古く、人面墨書に用いられた事例の無い器形であるとともに、残された墨書も不鮮明であることから対象からは除く。さらに豊田大塚遺跡ではほかの遺跡同様に人面墨書が小型甕と、さらに長胴甕にも表現されている。人面墨書土器に長胴甕が用いられている事例は、山形県依田遺跡など東北地方に散見することから、越前から遠く離れ

第6表 北陸で出土した人面墨書土器一覧(報告書が刊行されて、筆者が確認したもの)

遺跡名 (所在地)	国	土器の特徴	法量	人面について	時期	文献
福増カワラダ 遺跡 (金沢市)	加	畿内系小型甕口縁部	口13.0	顔か?	9C前半	註 14
		同上胴部	径13.8×7.2残	顔か?		
		畿内系小型甕口縁部	口12.8	不明墨書		
加茂遺跡 (津幡町)	賀	在地区小型甕	底6.6	顔か? 押付書	9C?	註 15
		在地区平底小型甕	12.9×(6.6)×(11.7)	子供の顔か?輪郭有 表裏二面		
森本C遺跡 (宝達志水町)	能	在地区小型甕	15.4×7.3×10.6	眉・目・鼻・口・髭を逆さまに描く	8C後半～ 9C前半	註 16
在地区丸底小型甕		20.1×17.4	器面に喜怒哀楽?を表現	9C前半～ 9C第3四半期	註 17	
小島西遺跡 (七尾市)	伊	在地区長胴甕胴部	(22.5)×12.0	鼻・口・髭	9C中	註 18
小片で不明		—	単なる墨痕の可能性有			
福井ナカミチ 遺跡 (志賀町)	伊	須恵器無台杯	13.4×9.0×3.6	表裏二面に人面墨書?	9C中～後葉	註 18
「いれも」焼成時の還元が弱い灰白～ 黄褐色を呈した個体を選び		12.0×7.5×3.4	顔か?			
埴生南遺跡 (小穴部市)	福	土師器の平底無頸甕? (用いられない 器形)	17.1×9.0×11.1	頸筋が薄く、人面か?未確定	7C末～8C前半	註 19
在地区小型甕(平底?)		9.7×9.4残	顔の輪郭無に眉・目・鼻・口を二面	8C後半～ 9C初頭	註 20	
石鳥入遺跡 (高岡市)	在地区平底小型甕	13.8×7.3×11.7	耳と顔の輪郭に帽子に眉・目・鼻・口を四面			
北高木遺跡 (射水市)	福	在地区小型甕(平底?)	13.0×12.6残	顔輪郭無いが、耳を加え眉・目・鼻・口を三面か?	8C後半～ 9C中	註 21
		在地区系	34.8×11.6残	顔は四面いずれも眉・目・鼻・口に輪郭を描く。 1点のみ帽子の表現有。		
		在地区平底小型甕	14.7×5.7×13.1	表裏二面に眉・目・鼻・口・髭と耳		
		在地区小型甕(平底?)	12.9×9×12.6残	表裏二面に眉・目・鼻・口・髭と耳(一面は一部のみ)		
南大岡山1遺跡 (射水市)	中	在地区小型甕(平底?)	12.6×9×11.1残	表裏二面に眉・目・鼻・口・髭と耳(一面は目と耳の 残か?)	8C第2四半期～ 第4四半期	註 22
		須恵器無台杯	12.1×11.7×4.6	顔の輪郭は破損、眉・目・鼻・口・髭か?三面あるが 一面は推定		
豊田大塚遺跡 (富山市)	中	在地区平底小型甕	13.2×6.6×12.4	顔の輪郭なく眉・目・鼻・口・耳・(口・頬)髭を表 裏二面	9C後半	註 23
		(焼成後底部穿孔)	—	—		
		土師器長胴甕	20.1×29.6残	顔の輪郭なく眉・目・鼻・口・耳・(口・頬)髭を表 裏二面		
徳立C遺跡 (新高市)	福	土師器長胴甕	20.6×33.0	型・眉・目・鼻・口・髭で輪郭は無い?	9C前半	註 24
在地区中型甕(平底?)		15.0×17.7残	部分的で顔か不明			
船戸塚遺跡 (新内市)	後	在地区平底小型甕	13.3×8.9×12.9	(一)眉・目・鼻・口・髭 (二)目・鼻・口か	9C後半	註 25

註1)「畿内系小型甕」とするのは、北陸では畿内の影響下にある丸底の土師器甕として当然とした認識である。

2) 法量について、報告書に記載されているものはその数値で、記載のないものは図中のスケールを用いて測った。数値がそのままのものは口径を、  
数値×数値は「口径もしくは底径か最大径×残存高」を、数値×数値×数値は「口径×底径×(残存)器高」を示す。( )の数値は推定値を示す。

3) 人面墨書土器の時期は報告書の記載か、または註22の文献に拠った。

た緒立C遺跡・船戸桜田遺跡とともに今回の分析の対象から外した。つまり石川県の加賀2遺跡と能登3遺跡に越中の3遺跡について、報告書のまとめなどを参考に遺跡の性格を推定したい。

福増カワラケダ遺跡は東大寺領横江荘に隣接することから、この施設に伴う祭祀が行われた場と想定されている。加茂遺跡は県の調査で古代北陸道が検出され、「加賀勝示札」や通所木簡も出土している。この南に位置する北中条遺跡で「深見駅」の墨書が出土していることから、この遺跡が古代北陸道の「深見駅」であり、隣接する加茂遺跡も交通に関する地点に位置する。森本C遺跡は「中山寺」「田所家」の墨書土器や呪符木簡が出土し、隣接地付近に公的施設が存在が想定され、近辺に古代北陸道能登路があった可能性が指摘されている。なおこの遺跡は加賀と能登の国境とされる大海川から600mほど能登国に入った位置にある。小島西遺跡は七尾湾に近くに位置し、大量の木製祭祀具が出土しており、古代の対北方政策の中心地であった鹿(香)島津の関連が想定される。福井ナカミチ遺跡の北西約13kmに渤海使の寄港・入国指定地とされた福良港があるが、この港周辺には平野部が少なく、この遺跡がある於古川周辺が最も大きい沖積地である。大量の墨書土器とともに転用硯や転用灯明容器なども出土しており、製塩作業を伴う渤海使関連の公的施設とも考えられる。石名瀬A遺跡は古代北陸道の推定ルートからは離れるが、西に約1.5kmに船着場遺構が検出された中保B遺跡は礪波郡衙関連施設の可能性が指摘されている。北東にはほぼ隣接するように各種木簡・円面硯や転用硯・多数の墨書土器に帯金具を出土し、官衙的な様相の東木津遺跡がある。人面墨書土器の時期である8世紀後半から9世紀中ごろまでは周辺の遺跡は非常に公的な施設が多く、石名瀬A遺跡の付近には伝路があった可能性が考えられる。北高木遺跡の北約1kmには古代北陸道の推定ルートが比定されている。南太閤山I遺跡は周辺に想定される官道や官衙関連の遺跡はないが、周辺は古代の窯業と晴天関連の遺跡が集中していることから国が大きく関わった「官営工業団地」と考えられるので、これらに関連する公的施設があったと思われる、これに伴う祭祀関連の場ではないかと考えられる<sup>(26)</sup>。

このように遺跡の立地場所を検討した8遺跡のうち福増カワラケダ遺跡と福井ナカミチ遺跡・南太閤山I遺跡の3遺跡は荘園や公的施設ともなる祭祀関連遺跡であるが、加茂遺跡と森本C遺跡・北高木遺跡は古代北陸道(または能登路)に関連し、小島西遺跡や福井ナカミチ遺跡もその目的地のひとつであろう。また石名瀬A遺跡は官衙間を結ぶ伝路に関するすれば、8遺跡中の6遺跡までが交通路、またはその目的地であることになる。その意味では高柳遺跡も内陸部の遺跡にも関わらず製塩土器が出土し、周辺の有力豪族名の墨書土器も出土するなど越前国内と関連する遺跡である。

以上のような視点から考えても、高柳遺跡は古代北陸道に関する遺跡で九頭竜川を渡るための渡渉点に関する施設があったものと考えられる。さらに北の「三尾駅」と南の「朝津駅」との距離間から、その中間として九頭竜川南岸の当遺跡付近に「足羽駅」があったとする指摘もあるが、周辺の調査では古代北陸道も古代の駅家に関する遺構・遺物も確認されていない。本遺跡については弥生時代や古墳時代の集落について、具体的に建物や墓など検討すべき事項はまだ多く残されている。まだ筆者は古代史については不勉強で、今回の報告書作成にあたり墨書土器やさらに人面墨書土器についても時間の許す限り試みたが、人面墨書土器に描かれた顔など今回取り上げた遺跡との比較なども行っていないので、さらに機会を改めてこの遺跡について再検討したい。

## 註

- (1) 田邊ほか 2011『高柳遺跡 発掘調査報告書』福井市教育委員会
- (2) 市教委の調査は擁壁を設けずに開削した調査区であったことから、西側の調査区は崩壊の予兆が見られたため、SR02に相当する部分は崩壊しなかったとのことである。
- (3) 前掲註1ではSD-B02から出土した土器は古代の須恵器しか報告されていない。SD-B02の南側にSD-B01があるが、こちらからは古式土師器しか出土していない。SR02からは主に下層から古式土師器が出土しているため、今回の調査区の範囲でSD-B01とSD-B02が合流してSR02となり、西側では確認だけされた上端幅が10m以上になる流路となったと考えられる。
- (4) 出越茂和氏による。ちなみに墨書土器の釈文については同氏にご教示いただいた。
- (5) 山口ほか 1986『六条・和田地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告 第11集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- (6) 赤澤ほか 2008『今市岩塚遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第34集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- (7) 三澤繁志 2016『今市遺跡2』福井市教育委員会
- (8) 赤澤ほか 2008『持明寺遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第16集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- (9) 中川ほか 2006『栗兼・坪江遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第88集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- (10) 宮崎聡 2019『御簾尾・東田中遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第170集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
御簾尾遺跡の報告書は「御簾尾・東田中遺跡」と書名が、「御簾尾遺跡」と「東田中遺跡」の2つの遺跡が重複することになっている。南北約30～40m、東西約11.5mの長方形の調査区を検討すると、弥生時代と古代の遺構(竪立建物や土坑)は北側のみ、古墳時代の遺構(溝のみ)は南側でのみ確認され、その間には遺構は確認されていない。よって特に古代については御簾尾遺跡、古墳時代については東田中遺跡と遺跡地区での表記のままに呼称する。
- (11) 白川ほか 2019『桶山遺跡・細呂木阪東山遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告 第167集 福井県埋蔵文化財調査センター
- (12) 仁科章 2015『川端遺跡発掘調査報告書』『研究紀要』第10号 みくに蔵理館
- (13) 川畑誠氏からはこの他にも金沢市大友遺跡付近や小松市松葉遺跡でも出土しているとのこと教示をいただいたが、報告書刊行前とのこと、詳細な情報がないのでここでは触れなかった。
- (14) 向井ほか 2006『福増カワラケダ遺跡Ⅱ』金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)
- (15) 戸谷ほか 2012『加茂遺跡』津幡町教育委員会
- (16) 澤辺ほか 2008『森木C遺跡』石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター
- (17) 大西ほか 2008『七尾市 小島西遺跡』石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター
- (18) 川畑ほか 2017『羽咋郡志賀町 福井ナカミチ遺跡』石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター
- (19) 1993『平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市埋蔵文化財調査報告書第37冊 小矢部市教育委員会
- (20) 根津ほか 2012『石名瀬A遺跡調査報告書』高岡市埋蔵文化財調査報告 第24冊 高岡市教育委員会
- (21) 安念ほか 1995『富山県大島町北高木遺跡発掘調査報告書』大島町教育委員会
- (22) 岸本ほか 1985『南太閤山1遺跡 都市計画七美・太閤山・高岡船内遺跡群 発掘調査概要(3)』富山県教育委員会
- (23) 堀沢ほか 1998『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』富山県教育委員会
- (24) 渡邊ほか 1994『緒立C遺跡発掘調査報告書』黒埜町教育委員会
- (25) 水澤ほか 2001『船戸桜田遺跡2次』中条町教育委員会
- (26) 堀沢祐一氏は北高木遺跡を越中国府、または射水郡衙の祭祀場、南太閤山1遺跡は婦負郡衙の祭祀場ではないかと仮定している。
- 堀沢祐一 2008『越中国における古代の祭祀』『石川県埋蔵文化財情報』第19号。(財)石川県埋蔵文化財センター
- (27) 木下良 2009『事典 日本古代の道と駅』の198p足羽駅に関する記述

## 附章 自然科学分析

### 1 木製品保存処理の概要

平成26年度実施の高柳遺跡発掘調査より出土した木製品計48点について保存処理を行い、事前調査として樹種同定、塗膜調査も行った。

### 2 樹種同定

#### はじめに

本報告では、遺跡より出土した木製品に対して、木材組織の特徴から樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

#### 試料と方法

試料は、弥生時代後期から古墳時代および平安時代に属するSD60、SR02、SD53、SK12より出土した縦櫛、曲物底、箸、皿、柄、丸木弓、木棺長側板、杭、丸棒、板材、角材、小角材、割り材片などの48点である。試料の詳細は結果表に記す。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柁目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、切片をマウントクイックアクエオス(Mount-Quick "Aqueous"; 大道産業)で封入し、プレパラートを作製する。観察は生物顕微鏡(OPTIPHOTO-2; Nikon)によって40~1000倍で行った。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

#### 結果

第7表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

#### 1) カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で1分野に1~4個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が2本対で存在する。放射組織が単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ25m、径90cmに達する。

#### 2) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~14細胞高である。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。

#### 3) コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射組織は単列の同性放射組織型で、1

～15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の特徴からコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。

#### 4) ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl. ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。

#### 5) アスナロ属 *Thujaopsis* ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、樹脂細胞が存在する。放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型からややヒノキ型を示し、1分野に2～4個存在する。また放射柔細胞内に内容物が多い。放射組織は単列で、樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からアスナロ属に同定される。アスナロ属はアスナロとその変種ヒノキアスナロからなる日本固有の樹種である。アスナロは本州、四国、九州に分布し、関東北部や木曾に比較的多く、ヒノキアスナロは下北・津軽半島を中心に渡島半島南部から日光付近を南限に分布するため、本試料はアスナロと考えられる。常緑高木で、通常高さ40m、径1mに達する。

#### 6) クルミ属 *Juglans* クルミ科

大型で丸い道管が、単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら、短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られる同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。

#### 7) ハンノキ属 *Alnus* カバノキ科

小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10～30本ぐらいである。放射組織は、平伏細胞からなる単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からハンノキ属に同定される。ハンノキ属には、ハンノキ、ヤシャブシ、ケヤマハンノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木または低木である。

#### 8) ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科

年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圍部外の小道管は多数複合して円形および接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は異性放射組織型で上下の縁辺部の細胞のなかには大きく膨らんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の特徴からケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高

さ20~25m、径60~70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。

9) ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科

年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2~3個複合して配列する環孔材である。孔部外の小道管は複合して円形の塊をなす。道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の1~3細胞ぐらいは直立細胞の異性放射組織型で、1~6細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10~15m、径30~40cmである。

10) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科

小型でやや角張った道管が、単独ないし2~3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~30本ぐらいである。放射組織は、異性放射組織型で、1~3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5~10m、径20~30cmである。

11) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で1~3細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。

12) タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。放射断面及び接線断面では柔細胞及び維管束、維管束鞘が輻射方向に配列している。

以上の特徴からタケ亜科に同定される。タケ亜科にはマダケ属、メダケ属、ササ属などがある。

**所見**

同定の結果、高柳遺跡の木製品はカヤ4点、スギ24点、コウヤマキ1点、ヒノキ8点、アスナロ属(アスナロ)2点、クルミ属1点、ハンノキ属1点、ケヤキ3点、ヤマグワ1点、ヤブツバキ1点、ヒサカキ属1点、タケ亜科1点であった。

スギは最も多く同定され、箸、曲物底、木棺長側板、杭、丸棒、板材、小角材、角材、割り材片などに利用されている。スギは加工工作が容易な上大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。なお、北陸日本海側では古くからスギを多用する傾向にあり、これは積雪に耐え純林を形成するスギの性質からこの地域にスギが多く生育する環境であったためと考えられる。ヒノキは次に多く同定され、曲物底、小曲物底、弓、杭、加工木に利用されている。木理通直、肌目緻密で強靱であり、保存・耐朽・耐湿性も高く、大きな材が取れる良材である。また、加工工作が容易な上、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。ヒノキないしヒノキ科の木材は律令期以降よく流通するようになった。カヤは丸木弓、ヘラ、箸、小棒に利用され

ている。カヤは耐朽・保存性が高く水湿に耐える材であり、加工が容易で割裂し易く、表面の仕上がり良好で光沢が出る。また、均質緻密で堅硬、弾性が強いことから弓などに用いられる。また水湿に耐え強度が高いことからまな板、箸、椀などにも最適な木材と言われている。他の針葉樹ではコウヤマキが角材に、アスナロ属(アスナロ)が加工木に利用されている。いずれも木理通直で耐朽・保存性が高く、また水湿にはヒノキよりもよく耐える材である。

ケヤキは皿、加工木に利用されている。概して強く強靱で従曲性に富み、耐朽・保存性は高く水湿にもよく耐える材である。また、縄文時代以降現在まで伝統的に皿、椀などの木地に用いられる材である。ヤブツバキは棒材に利用されている。強靱、堅硬な良材であるが、切削・加工は困難な材である。ヒサカキ属は柄に利用されている。概して強さ中庸の材で杙や農具柄などに利用されることがある。他の広葉樹ではクルミ属、ハンノキ属、ヤマグワは加工木に利用されている。いずれの樹木も強靱で堅硬な材であり、切削・加工は比較的行きやすい樹木である。

タケ亜科は堅櫛に利用されている。タケ亜科の材は乾燥が十分なされると硬さと柔軟さを備え割烈性に富み、また細工が容易であるので、さまざまな素材として利用される。なお、タケ亜科はマダケ、ハチク、ヤダケが古くから日本にあり、モウソウチクは庭木として17世紀後半または18世紀前半に日本本土へ植栽された。本遺跡の堅櫛は素材の大きさからマダケの可能性が高い。なお、ハチク、ヤダケは茶杓などの器具や矢など武器に利用されることがあり、マダケは伸縮性が小さいので弓道の弓、茶筌や茶杓などの工芸品、垂木、土壁などの建材などに利用される。本試料は結菌式縦櫛であり、いずれの種かの同定には至れないが、タケ亜科は結菌式縦櫛の用材としてよく利用された。

同定された樹種は温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木である。殆どの樹木が湿潤な環境に生育し、その中でスギ、ヒノキ、コウヤマキなどは山地や山林に生育し、カヤ、クルミ属、ハンノキ属、ケヤキ、ヤマグワなどは河川や谷間に生育する。また、陽当たりの良い湿潤地にはタケ亜科が生育する。なお、ヒノキは火山灰土壌のやや乾燥したところに分布する。いずれの樹木も当時遺跡周辺や近隣地域に分布し、比較的容易に得ることのできる樹種であったとみなされる。スギが多く同定されたが、中部日本海側では地域的な森林要素からヒノキよりもスギの供給が多く、加工の容易さや広汎な用途により頻繁に利用される特徴があり、その傾向が本遺物でも見られる。また、箸、曲物底、木筒長側板にはスギ、曲物底板にはヒノキ、丸木弓にはカヤ、皿にはケヤキ、柄にはヒサカキ属、縦櫛にはタケ亜科を利用しており、樹木の性質から用材を選定していることがわかる。他の加工木や棒材などに利用されている樹木においても、比較的堅硬な材を選定していると考えられる。

### 3 塗膜分析

#### はじめに

高柳遺跡出土の縦櫛の塗膜について、断面の顕微鏡観察、蛍光X線分析を行い、その構造より製作工程の考察を行う。

#### 試料

分析試料は、高柳遺跡出土したNo.44縦櫛より採取された漆膜である。縦櫛は結菌式堅櫛で、歯を結ぶ紐の部分より試料を採取している。紐素材も含め1mm角程の破片を採取した。なお、これらは保存処理および樹種同定に用いられた縦櫛と同一試料である。

#### 方法

##### (1) 断面観察



蛍光X線分析を行った後、包埋し、厚さ数 $\mu\text{m}$ になるまで#80、#120、#240、#1500、#4000、#10000の耐水紙やすりで研磨した。なお、包埋およびプレパラートへの接着は高透明エポキシ樹脂(ボンドEセット：コニシ株式会社製)で行った。完成した試料を光学顕微鏡(OPTIPHOTO-2：Nikon)および落射顕微鏡(OPTIPHOTO-2：Nikon)で観察した。

## (2) 蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて測定を行う。機器はOLYMPUS製ハンドヘルド蛍光X線分析装置 DELTA DP-2000 Premiumを使用した。測定条件は励起用X線ターゲットがRh、管電圧および管電流はSoilモードでビーム1が40keVおよび60 $\mu\text{A}$ 、ビーム2が40keVおよび40 $\mu\text{A}$ 、ビーム3が15keVおよび25 $\mu\text{A}$ (軽元素測定時は15keV)、Miningモードのビーム1が40keVおよび100 $\mu\text{A}$ 、ビーム2が10keVおよび200 $\mu\text{A}$ である。装置の測定部径は9mm、計測時間はSoilモードが90秒、Miningモードが60秒で、大気雰囲気下で、ワークステーション(卓上式装置)を用いて測定した。原子番号12番のMg(マグネシウム)以上の元素の検出が可能である。

## 結果

縦櫛は全体的に黒色である。

### 1) 断面観察

紐素材の上に漆層1層が観察できた。漆層は層厚22~204 $\mu\text{m}$ までが確認でき、黒色の細かな粉末が観察された。また、紐素材の繊維質の中に粗い多角形の炭粉粒子が観察された。また、炭粉の空隙には漆液が観察され、紐素材の繊維質の内部においても漆液は僅かではあるが観察できる。

### 2) 蛍光X線分析(第47図)

鉄(Fe)のピークが高く、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、銅(Cu)、砒素(As)が検出された。

## 考察

本遺跡の堅櫛は、結菌式堅櫛であり、菌を結ぶ紐素材部より試料を採取している。そのため紐素材が円形であり、観察された漆層は不定形であるが、漆液には通常観察される炭粉よりもきわめて細かい粒子が観察された。また漆液に対してきわめて細かい黒色の粒子が不十分に混ざっているような印象を受けるため、油煙のような煤を漆液に混ぜて黒色漆を作製したのではないかと考えられる。また、紐素材の繊維の中に炭粉と漆液が観察され、古代、特に中世以降では漆製品では漆を塗布する前段階で炭粉と漆を混ぜた炭粉漆下地を製作し木地に塗り下地固めを行うことから、本試料では炭粉漆下地と類似するものを利用した可能性が考えられる。しかし、下地と考えるには紐素材の繊維内部に観察されており、紐を燃る際に炭粉漆を利用していた、U字に曲げた菌部を固定するために炭粉漆で固め紐素材に付着したなども考えられるが、観察される炭粉漆が少なくまた明確な報告例はない。

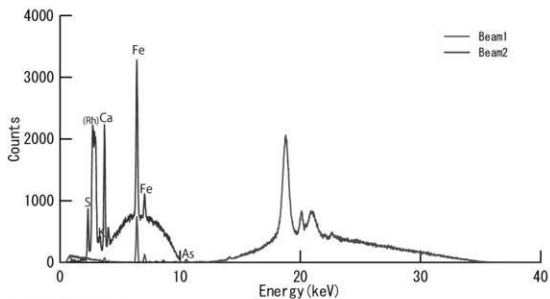
## 参考文献

- 岡田文男 1995『古代出土漆器の研究—顕微鏡で探る材質と技法—』京都書院, 191p.  
 伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学』雄山閣, p. 449.  
 佐伯浩・原田浩 1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p. 20-48.  
 佐伯浩・原田浩 1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版 p. 49-100.  
 島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 p. 176.  
 島地謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p. 296.

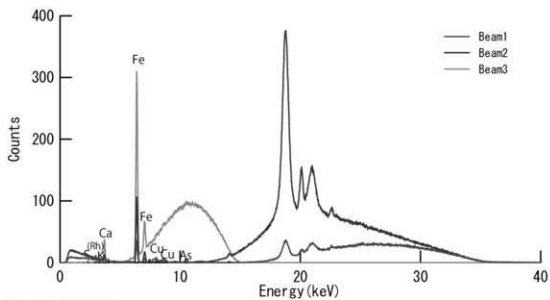
- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究特別第1号』植生史研究会 p. 242.  
 四柳嘉章 2002 「漆の技術と文化—出土漆の世界—」『あらたな世界へ—いくつもの日本II』岩波書店 p. 249-267.  
 四柳嘉章 2006 『漆Iものと人間の文化史131-I』法政大学 252p.  
 四柳嘉章 2006 『漆IIものと人間の文化史131-II』法政大学 435p.

第7表 樹種同定結果

No	遺構名	挿入番号	品名	(学名/和名)	備考
1	SD60	第38図1	曲物底	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
2	SD60	第40図7	杭	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
3	SD53	第41図7	板材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
4	SD53	第41図6	小角材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
5	SD53	第41図8	小角材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
6	SD53	第40図4	小角材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
7	SR02	第41図3	角材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
8	SR02	第41図4	角材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
9	SR02	第41図5	角材	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ
10	SR02	第39図4	板材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
11	SR02	第40図13	棒材	<i>Camellia japonica</i> Linn.	ヤブツバキ
12	SR02		割り材片	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
13	SR02	第40図20		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
14	SR02	第40図3		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
15	SD53		割り材片	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
16	SR02	第39図8		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
17	SR02	第40図8	小曲物底	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
18	SR02	第39図1	丸木弓	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
19	SR02	第39図7	丸棒	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
20	SR02	第39図6	角材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
21	SR02	第38図2	曲物底	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
22	SR02	第40図17	箸	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
23	SR02	第40図19	へら?	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
24	SR02	第39図13		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
25	SR02	第39図11	棒材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
26	SR02	第40図18	箸?	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
27	SR02	第40図15		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
28	SR02	第39図12		<i>Thujaopsis</i>	アスナロ属
29	SR02	第39図5		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
30	SR02	第39図10	板材	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
31	SR02	第39図3		<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
32	SR02	第40図1		<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
33	SR02	第40図14	小棒	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
34	SR02	第39図2	弓?	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
35	SR02	第38図3	皿	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
36	SR02	第40図16	加工木	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
37	SR02	第39図9	柄	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属
38	SR02	第40図2	加工木	<i>Morus australis</i> Poirlet	ヤマグワ
39	SR02	第40図5	加工木	<i>Thujaopsis</i>	アスナロ属
40	SR02	第40図12	加工木	<i>Juglans</i>	クルミ属
41	SR02	第40図10	加工木	<i>Alnus</i>	ハンノキ属
42	SR02	第40図11	加工木	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
43	SR02	第38図4	皿	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
44	SD53	第38図5	堅櫛	Bambusoideae	タケ亜科
45	SR02	第40図6	加工木	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ
46	SR02	第40図9	箸?	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.	カヤ
47	SK12	第41図2	木棺長側板	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ
48	SK12	第41図1	木棺長側板	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	スギ



1 No.44 豎楠 Mining

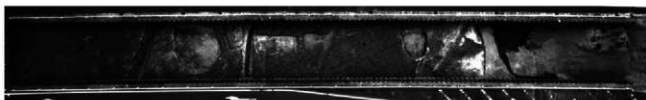


2 No.44 豎楠 Soil

第47圖 螢光X線分析結果

# 写 真 图 版





(1) 2-3区遠景 (上空から)



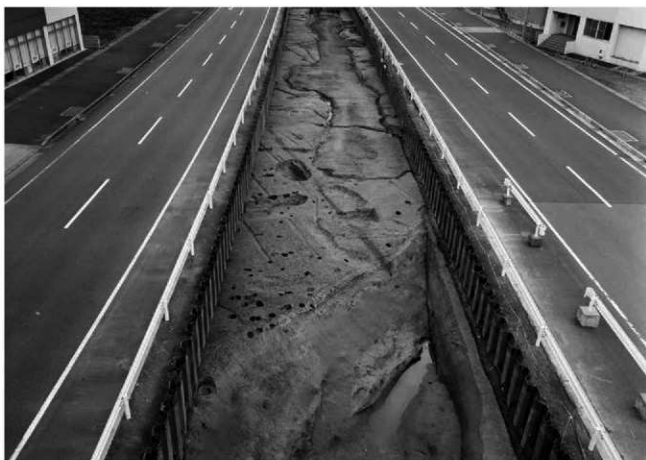
(2) 2-1区遠景 (上空から)



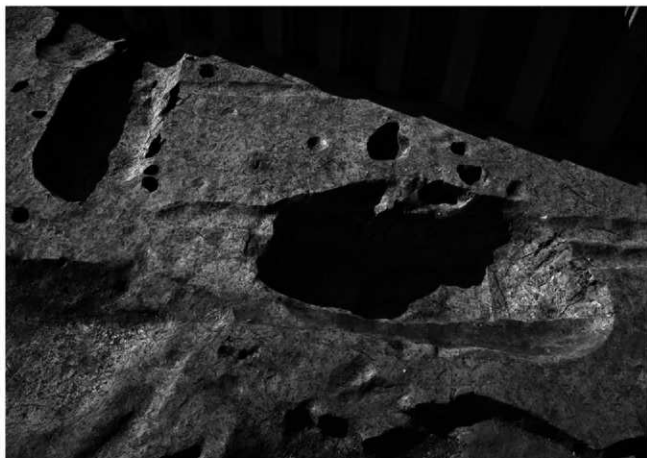
(3) 2-4区遠景 (上空から)



(4) 2-2区遠景 (上空から)



(5) 2-4区全景 (南から)



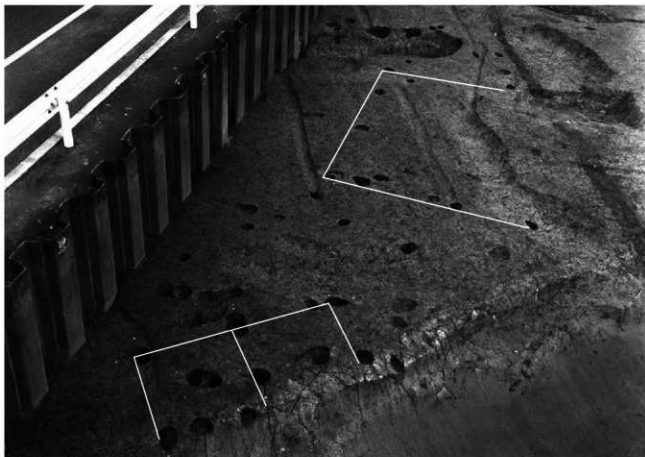
(1) ST02 全景 (東から)



(2) ST02 東溝木棺出土状況 (東から)



(1) ST04 全景 (北から)



(1) SB04・05 全景 (南から)





(2) SB01・02 全景 (南から)



(2) SD53 遺物出土状況 (東から)



(1) SD53 全景 (東から)



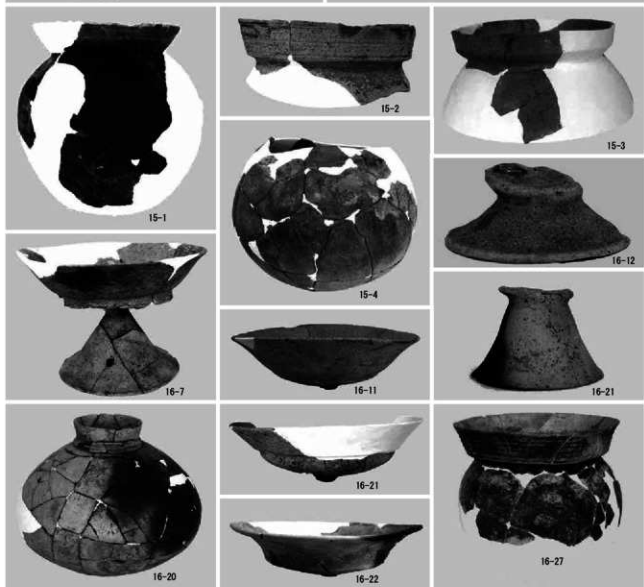
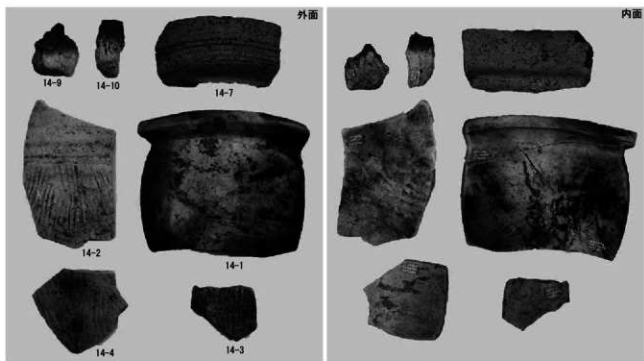
(2) SD54・55 全景 (東から)

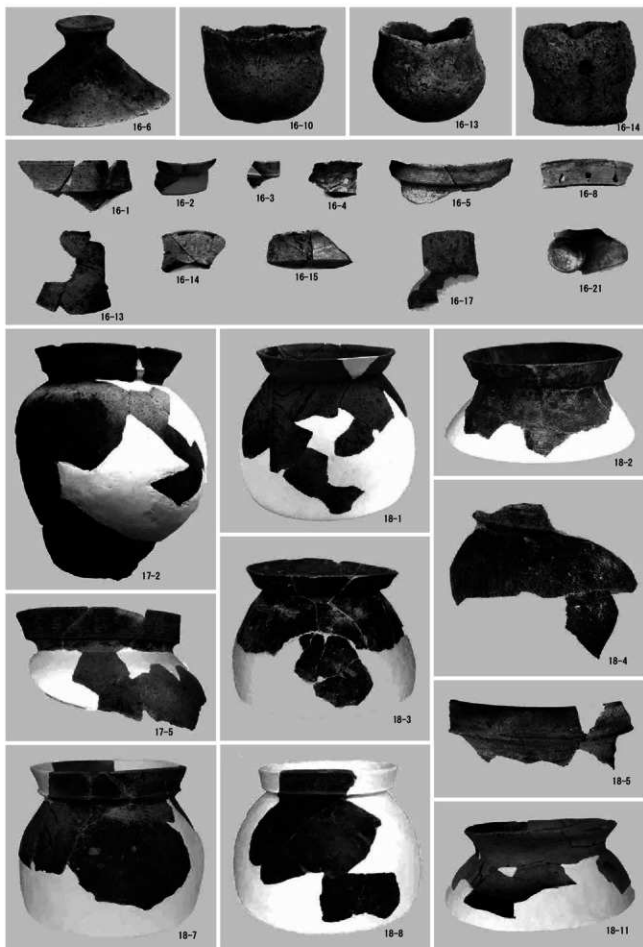


(1) SD56 全景 (東から)



(2) SR02 完掘 (西から)







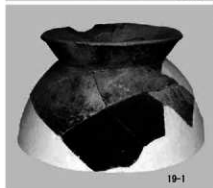
18-13



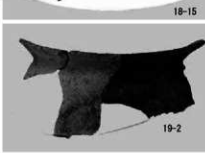
18-15



18-15 裏面



19-1



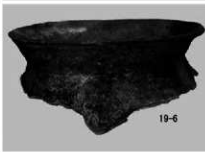
19-2



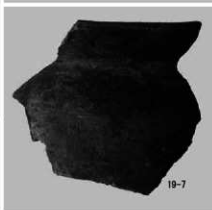
19-3



19-5



19-6



19-7



19-8



19-10



19-11



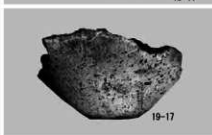
19-9



19-14



19-16



19-17



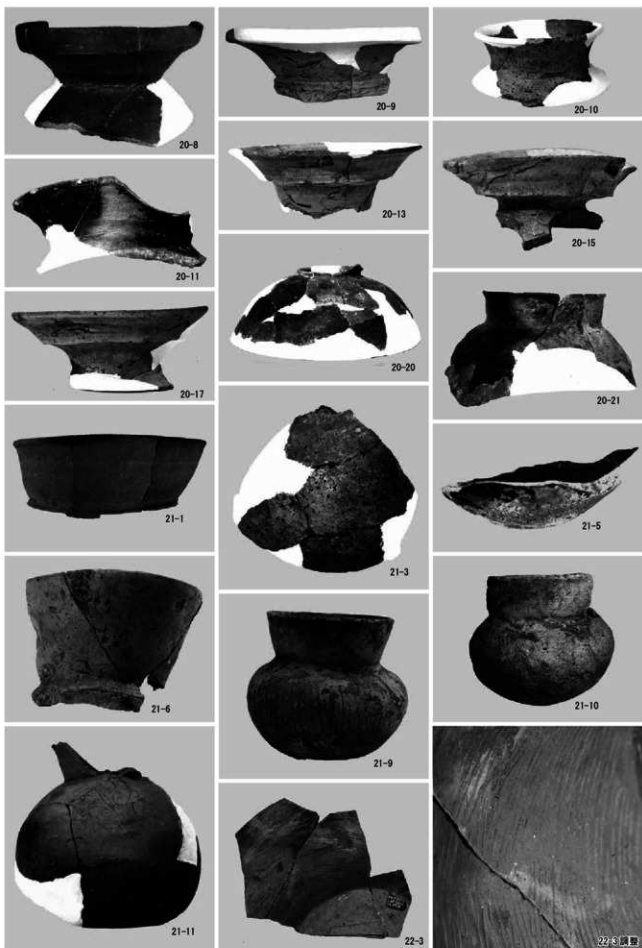
19-18

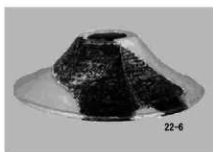


20-5



20-7





22-6



22-7



22-8



22-9



22-11



22-13



22-14



22-16



22-17



22-21



22-22



22-25



22-26

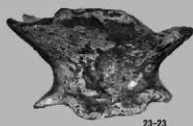
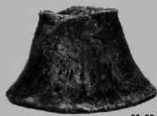
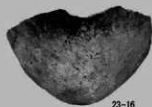
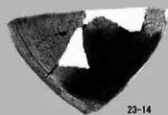
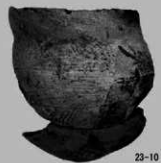
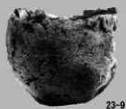
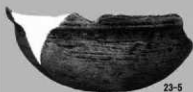
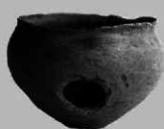


22-28



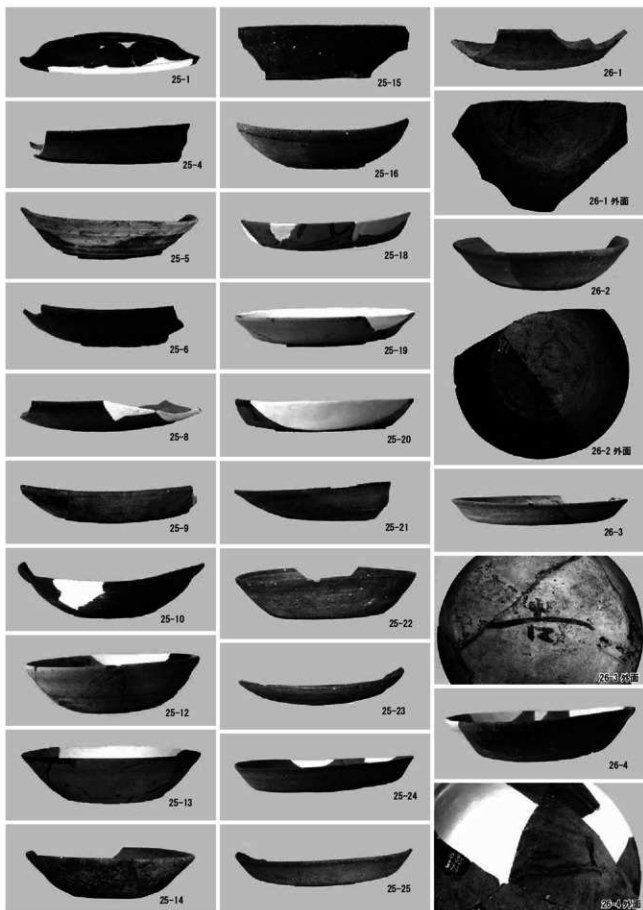
23-1

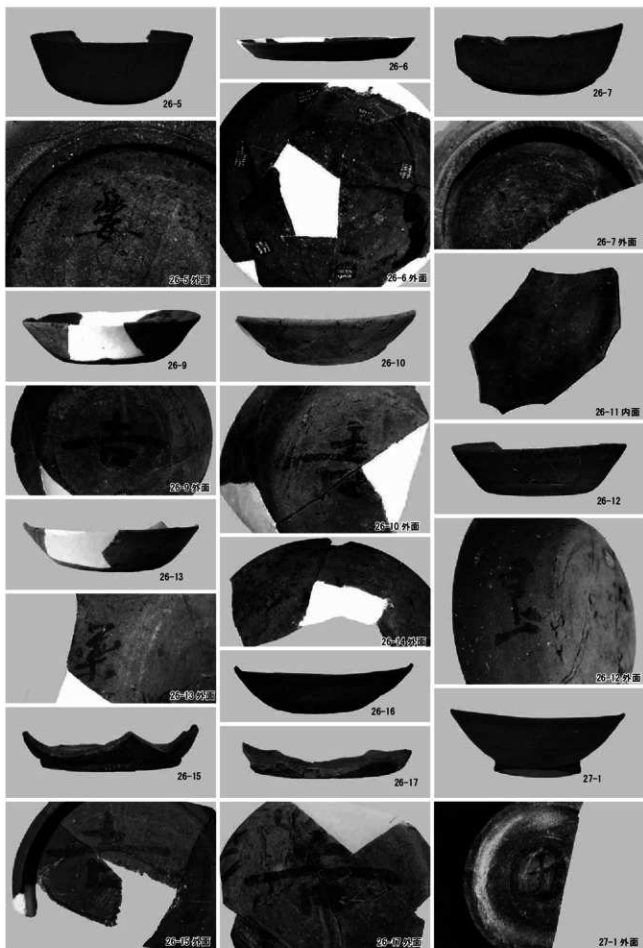


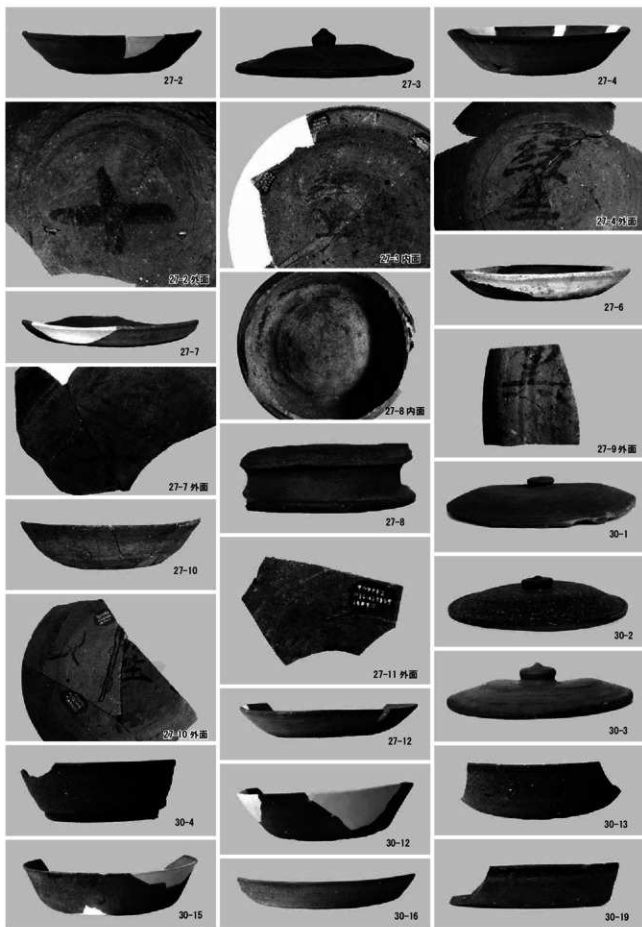


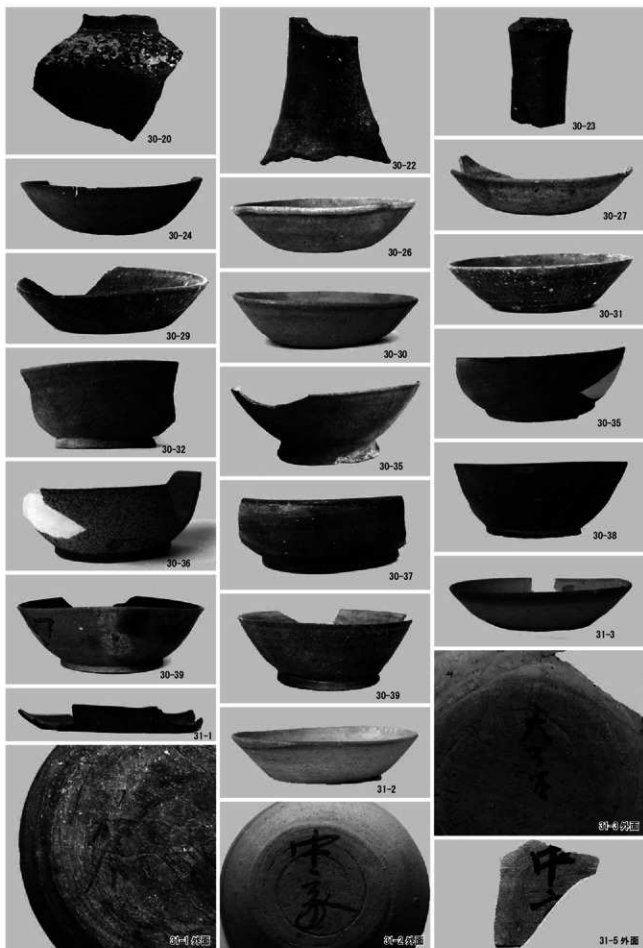


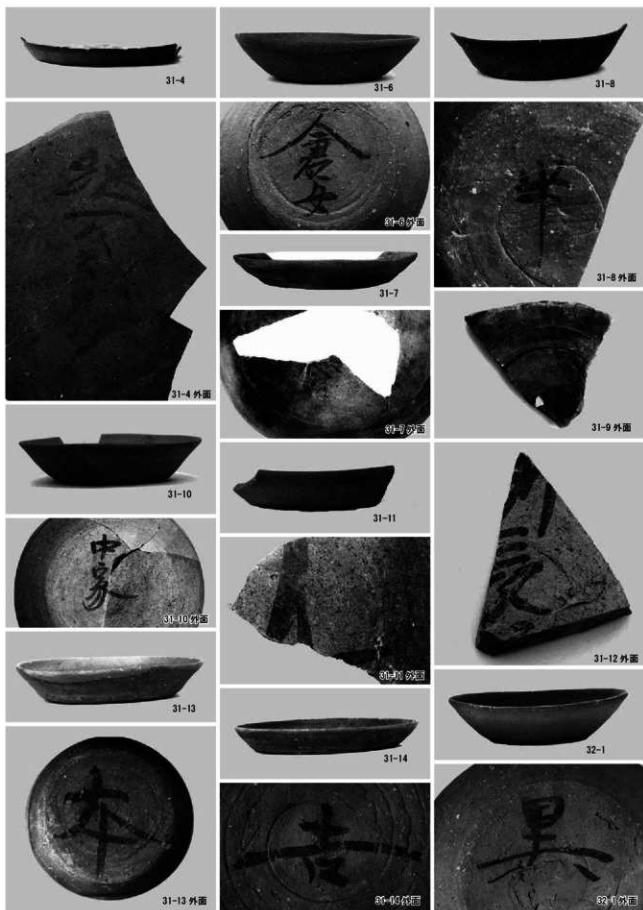




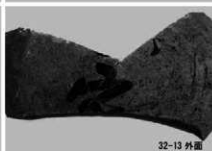
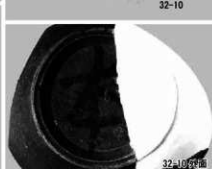
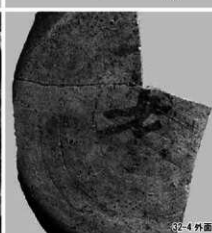
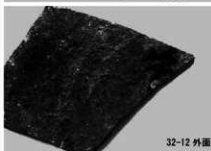
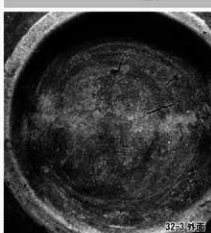




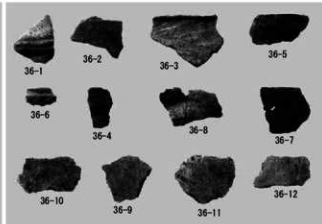
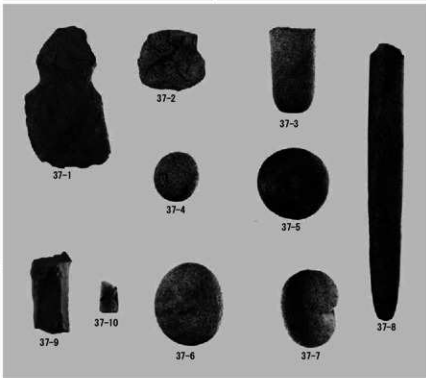
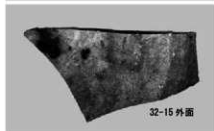
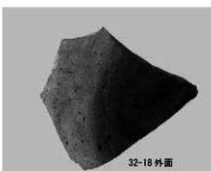
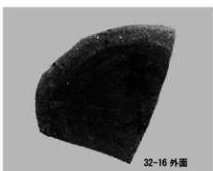
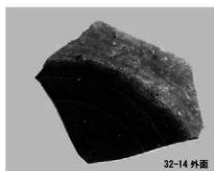


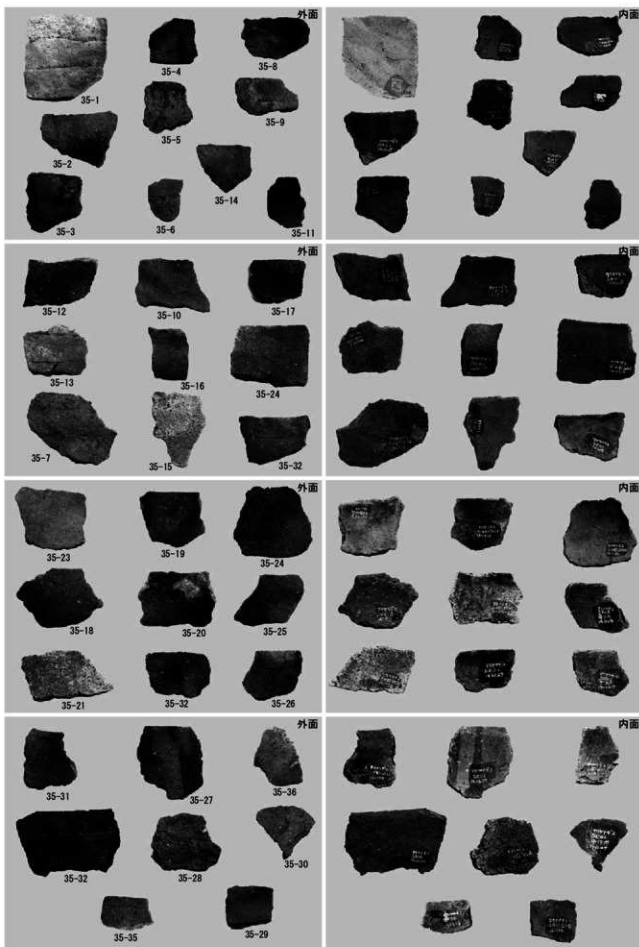


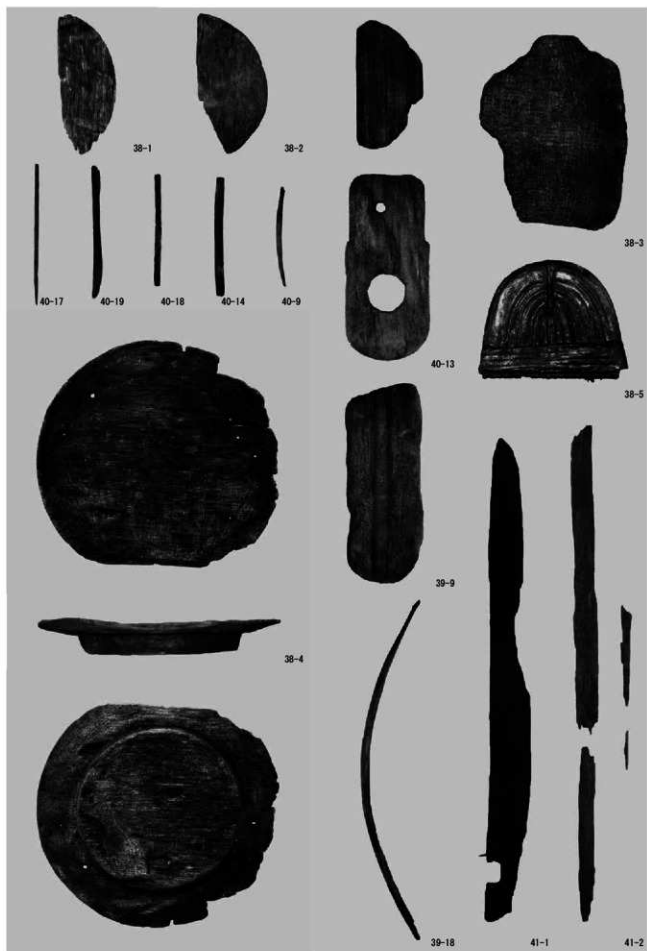


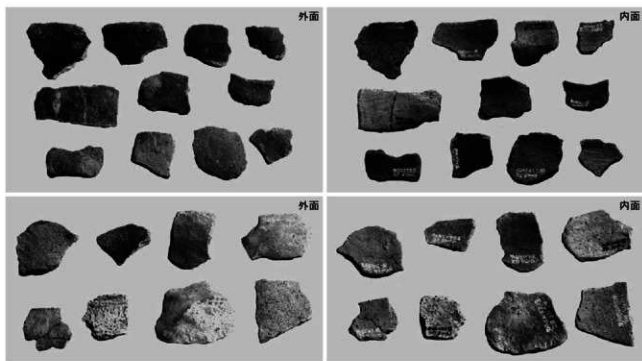




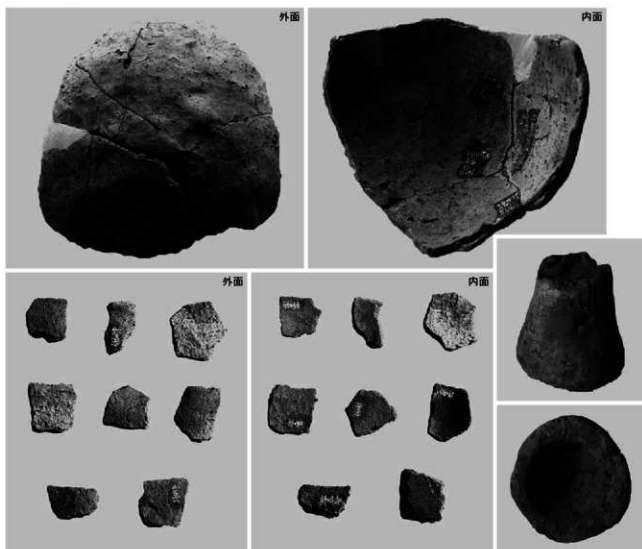




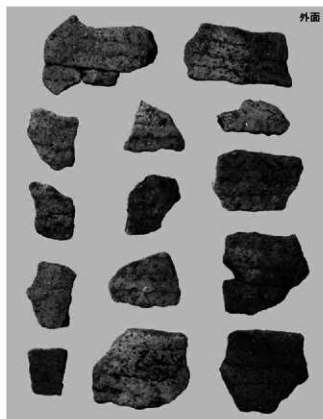




和田防町遺跡出土



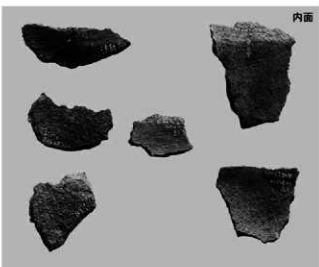
持明寺遺跡出土



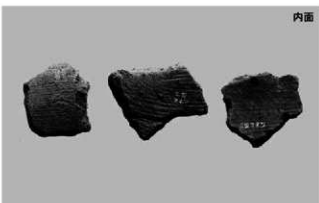
東田中・御麩尾遺跡出土



(仮称) 浜割遺跡表採



米納津遺跡表採



報告書抄録

ふりがな	たかやなぎいせき 2							
書名	高柳遺跡 2							
副書名	北陸新幹線建設に伴う調査 4							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第175集							
編著者名	青木隆佳(編) 赤澤徳明 山本孝一							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2021年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかやなぎいせき 高柳遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 たかやなぎいちようめ 高柳1丁目	18201	01093	36° 05' 26"	136° 14' 37"	20140401 ～ 20141130	3,640	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高柳遺跡	集落	弥生時代 ～ 古墳時代  平安時代	周溝墓 掘立柱建物 土坑 溝  掘立柱建物 土坑 溝	弥生土器・ 土師器  須恵器・土師器	自然流路から多量の9世紀頃の遺物が出土し、その中に墨書土器や人面墨書土器が含まれていた。			
要約	<p>九頭竜川左岸に広がる沖積平野に立地する、弥生時代後期～古墳時代前期と9世紀頃の集落である。</p> <p>弥生時代後期～古墳時代前期では、周溝墓が4基と溝を多数検出した。周溝墓では周溝内で木棺を検出し、高柳遺跡としては初例である。</p> <p>9世紀頃の集落は、建物跡が明確に復元できたものはない。しかし、周囲の様相から同時期の集落が展開していたのは間違いなからう。自然流路の肩部から底面では、弥生時代後期～古墳時代の土器と古代の土器が多量に出土した。古代の土器中には人面墨書土器といった極めて希少な遺物が出土した。このような土器は通常の集落では出土しないものであることから、官衙的な様相を持つ集落と推測できる。</p>							





---

福井県埋蔵文化財調査報告 第175集

## 高柳遺跡 2

— 北陸新幹線建設に伴う調査 4 —

令和3年3月5日 印刷

令和3年3月15日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10  
印刷 白崎印刷株式会社  
〒910-0843 福井県福井市西開発3-715

---

